

大垣城跡・城下町

2018

岐阜県文化財保護センター

おお がき じょう あと じょう か まち
大 垣 城 跡・城 下 町

2018

岐阜県文化財保護センター

序

大垣市は、木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）により形成された濃尾平野の北西部に位置しています。市内には杭瀬川や水門川などが流れ、地下水も豊富であり、古くから「水の都」と呼ばれる地域です。大垣市には美濃国分寺、垂井町には美濃国府、関ヶ原町には不破の関が所在し、この辺りは古代から歴史的に重要な地域でした。また、中世には大垣城が築城され、江戸時代に戸田氏が入城して以来、十万石の城下町として栄えました。

このたび、国土交通省中部地方整備局営繕部による岐阜地方家庭裁判所大垣支部庁舎新営に伴い、大垣市丸の内地内に所在する大垣城跡・城下町の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、主に中世から近代までの遺構や遺物を確認しました。中世については条里地割とほぼ同じ方向性を持つ溝状遺構を複数検出しました。また、複数の土坑が確認されるとともに土師器皿などの遺物が多く出土し、大垣城築城以前の歴史について新たな情報を得ることができました。また、近世については溝状遺構や土坑、近代についても石積を伴う幅約5mの溝状遺構を検出し、この地の土地利用の状況について推測する手がかりを得ることができました。本報告書が当地の埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者、大垣市教育委員会、地元地区の皆様にご深く感謝申し上げます。

平成30年2月

岐阜県文化財保護センター
所長 羽田 能崇

例 言

- 1 本書は、岐阜県大垣市丸の内に所在する大垣城跡・城下町（岐阜県遺跡番号21202-02595）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、岐阜県地方家庭裁判所大垣支部庁舎新営事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 中井均滋賀県立大学教授の指導のもとに、発掘作業と整理等作業を平成28年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章第1節、第3章第2節第2項及び第4節、第5章第1節は三輪晃三、それ以外は加中雅章が行った。また、編集は加中が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 漆器塗膜分析は株式会社パレオ・ラボ、木製品保存処理及び生材の樹種同定は株式会社イビソクに委託して行い、第4章に掲載した。第4章第1節は加中が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
井川祥子、近藤大典、高田康成、富田守泰、中野晴久、林正憲、藤澤良祐、松本正樹、
山田昭彦、大垣市教育委員会、大垣市文化財保護協会、大垣市立図書館
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構・遺物の概要	13
第3節 遺構	16
第4節 遺物	43
遺構一覧表、遺物観察表、出土遺物一覧表	63
第4章 自然科学分析	75
第1節 分析の概要	75
第2節 出土木製品の樹種同定	75
第3節 出土漆器椀の塗膜分析	78
第5章 総括	81
第1節 遺物	81
第2節 遺構	86
引用・参考文献	89

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1	遺跡位置図	1	図23	発掘区全域図分割図(3)	40
図2	試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲位置図	2	図24	発掘区全域図分割図(4)	41
図3	グリッド設定図	6	図25	発掘区全域図分割図(5)	42
図4	遺跡周辺の地形分類図	7	図26	出土遺物(1)	48
図5	周辺遺跡位置図	10	図27	出土遺物(2)	49
図6	発掘区北壁土層断面図	12	図28	出土遺物(3)	50
図7	溝状遺構遺構図(1)	18	図29	出土遺物(4)	51
図8	溝状遺構遺構図(2)	19	図30	出土遺物(5)	52
図9	溝状遺構遺構図(3)	20	図31	出土遺物(6)	53
図10	SK4遺構図	21	図32	出土遺物(7)	54
図11	SK22・25・102遺構図	22	図33	出土遺物(8)	55
図12	溝状遺構遺構図(4)	26	図34	出土遺物(9)	56
図13	溝状遺構遺構図(5)	27	図35	出土遺物(10)	57
図14	溝状遺構遺構図(6)	28	図36	出土遺物(11)	58
図15	SK10・27・80遺構図	29	図37	出土遺物(12)	59
図16	SK78・84・88遺構図	32	図38	出土遺物(13)	60
図17	SK95・97・98・100・101遺構図	34	図39	出土遺物(14)	61
図18	SP21遺構図	35	図40	出土遺物(15)	62
図19	SA1遺構図	36	図41	塗膜層の赤外分光スペクトル	79
図20	発掘区全域図割付図	37	図42	古瀬戸・大窯製品の用途別分類	83
図21	発掘区全域図分割図(1)	38	図43	各時期の主な遺構位置図	86
図22	発掘区全域図分割図(2)	39	図44	調査位置図	88

表目次

表1	周辺遺跡一覧表	9	表17	出土遺物一覧表(1)	73
表2	検出遺構一覧表	13	表18	出土遺物一覧表(2)	74
表3	遺物分類表	14	表19	樹種同定結果一覧	76
表4	溝状遺構一覧表	63	表20	分析対象一覧	78
表5	土坑一覧表(1)	63	表21	生漆の赤外吸収位置とその強度	78
表6	土坑一覧表(2)	64	表22	赤色塗膜層のX線分析結果	79
表7	土坑一覧表(3)	65	表23	塗膜分析結果	79
表8	柱穴一覧表(1)	65	表24	山茶碗類底部・片口鉢口縁部の破片数	81
表9	柱穴一覧表(2)	66	表25	常滑産陶器の破片数	81
表10	柵付属遺構一覧表	66	表26	土師器皿の口縁部破片数	81
表11	遺物観察表(1)	67	表27	古瀬戸・大窯の器種別破片数(1)	82
表12	遺物観察表(2)	68	表28	古瀬戸・大窯の器種別破片数(2)	83
表13	遺物観察表(3)	69	表29	中国産陶磁器の器種別破片数	84
表14	遺物観察表(4)	70	表30	狭小区における遺物包含層と遺構の時期	84
表15	遺物観察表(5)	71	表31	播鉢の口縁部破片数	85
表16	遺物観察表(6)	72			

挿入写真目次

写真1	調査前状況(西から)	4	写真6	遺構実測作業状況	5
写真2	重機による表土掘削状況	4	写真7	遺物の清掃作業状況	5
写真3	遺物包含層掘削状況	5	写真8	高所作業車による写真撮影	5
写真4	遺構検出作業状況	5	写真9	出土木製品の光学顕微鏡写真	77
写真5	遺構掘削状況	5	写真10	漆器碗の塗膜構造(a)と反射電子像(b)	80

写真図版目次

図版1	第1調査面の遺構(1)	図版6	土器類(1)
図版2	第1調査面の遺構(2)	図版7	土器類(2)
図版3	第1・2調査面の遺構	図版8	土器類(3)
図版4	第2調査面の遺構(1)	図版9	土器類(4)・木製品
図版5	第2調査面の遺構(2)	図版10	土製品・石器・瓦

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

当遺跡は、大垣市郭町他に所在する中世から近世にかけての城館跡（図1）として周知されている¹⁾。本報告書に掲載する調査地点は、城内武家屋敷に位置する²⁾。

平成21年度から26年度にかけて、岐阜県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）は国土交通省中部地方整備局営繕部、名古屋高等裁判所事務局、岐阜地方裁判所事務局と岐阜地方家庭裁判所大垣支部庁舎建替工事計画にかかる遺跡の取扱いについて協議し、国有財産事務分掌者岐阜地方裁判所長から庁舎新営計画予定地を対象とする試掘・確認調査の実施について依頼を受けた。平成27年6月19日、県教育委員会が試掘・確認調査（調査坑TP3・4）を実施した結果、TP3・4ともに遺構・遺物を確認した（図2）。同年11月4日に開催した平成27年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、開発事業に対する遺跡の取扱いについて検討し、TP3・4及びその周辺のうち裁判所建設によって改変されていない工事予定地内（317.8㎡）について、記録保存のための発掘調査の実施が必要であるとされた。

本工事については、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、国土交通省中部地方整備局長から県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘の通知（平成28年3月16日付け国部整計第166号）が提出され、同法第94条第4項の規定に基づき、県教育長は同局長あて発掘調査の実施を求める勧告（同年3月31日付け社文第54号の209）を通知した。同局長は県教育長に発掘調査の実施を依頼し、それを受け当センターは、同年5月6日から発掘調査を開始し、発掘調査着手の報告（平成28年5月12日付け文財セ第84号）を県教育長に提出した。

平成28年度に発掘作業及び整理等作業を実施し、平成29年度に本報告書を刊行した。

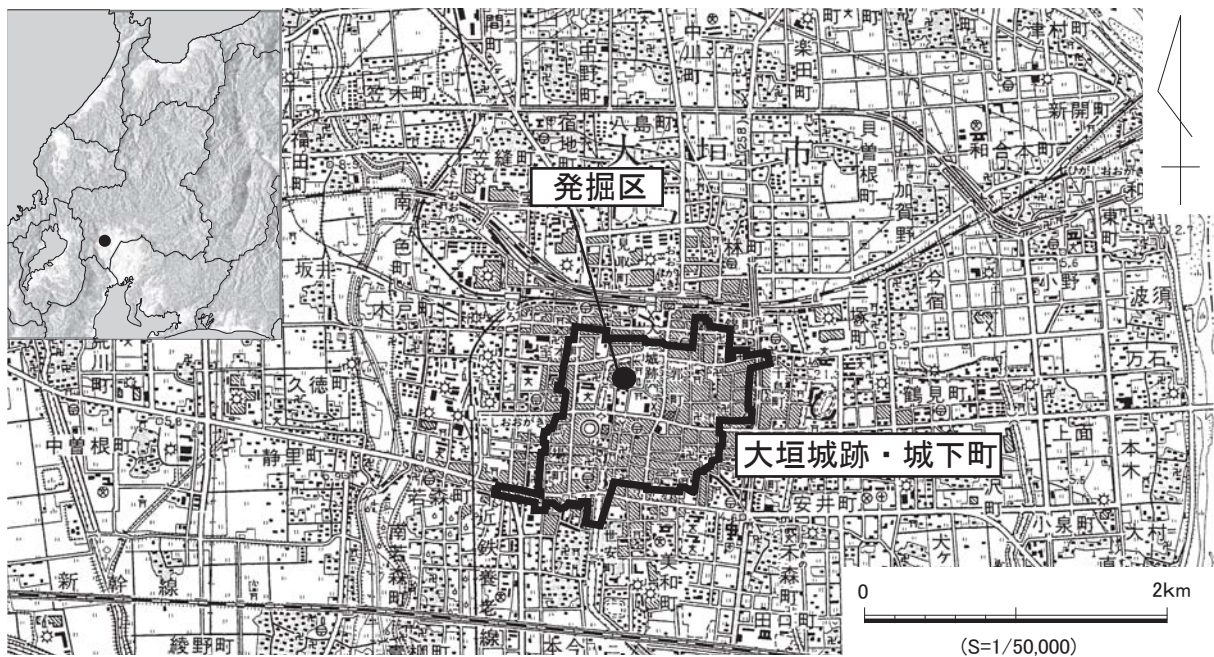


図1 遺跡位置図（平成8年国土院発行1:50,000地形図「大垣」）

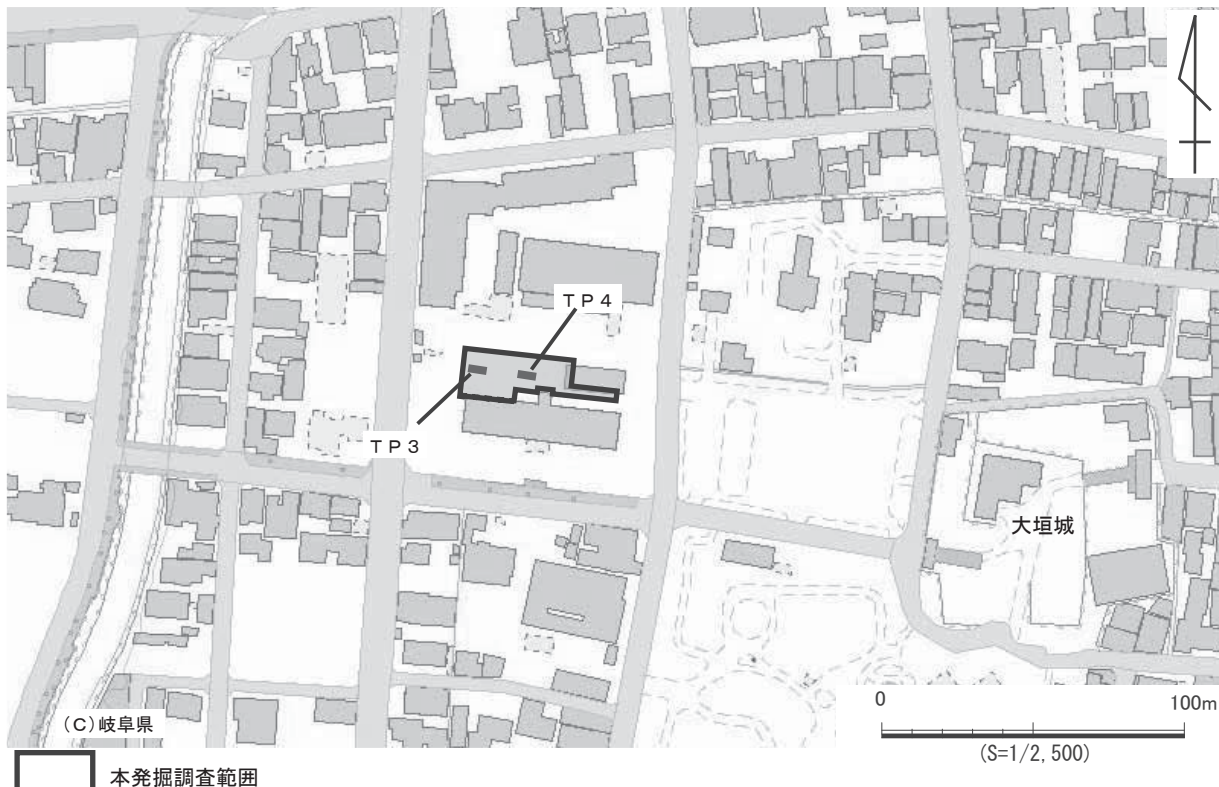


図2 試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲位置図

注

- 1) 大垣市教育委員会1994『新版大垣市遺跡地図』
- 2) 大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘区は岐阜県地方家庭裁判所大垣支部敷地内に位置し、排土処理方法の都合から、発掘区を東西に分けて反転調査を行った。世界測地系座標をもとに5m×5mの小区画を設定し、北から南へAからD、西から東へ1から11とした(図3)。そのため、発掘区の南東隅のグリッドはD11、南西隅のグリッドはC1となる。

発掘区内の表土(I層)を除去し、II層上面で遺構を検出し、遺構掘削作業を実施した(第1調査面)。その後、整地層(II層)、遺物包含層(III層)を掘削し、IV層上面で遺構を検出し、遺構掘削作業を実施した(第2調査面)。遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削は人力で行った。遺構は、土層堆積状況を観察し、必要な記録を作成した後に完掘した。発掘区内は湧水があり、必要に応じて排水を行いながら作業を実施した。

遺物包含層から出土した遺物は、原則グリッド単位で取り上げたが、遺構との関係性が検討できる遺物は、出土状況図を作成し、あるいは出土位置を測定して取り上げた。

検出した遺構は検出順を原則として通番を付し、遺構番号は「S001」というようにSと3桁の数字により表記した。この番号は、二次整理作業時に遺構種別ごとに遺構種別番号を付けた。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は、20分の1を基本として、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影では、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、中判カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。調査面毎の発掘区全体の景観写真撮影は、発掘区西半第1調査面は高所作業車、それ以外は、脚立により撮影した。

2 調査の経過

現地での調査経過は、以下のとおりである。

第1週（5/6）発掘区西半の重機による表土掘削を開始。

第2週（5/9～5/13）発掘区西半の重機による表土掘削終了（5/12）。発掘区西半の第1調査面遺物包含層掘削開始（5/13）。

第3週（5/16～5/20）遺物包含層の掘削継続。

第4週（5/23～5/27）大溝SD2の検出（5/25）。発掘区西半の第1調査面遺構掘削開始（5/26）。SD2の土層を確認するため、発掘区西半の東壁にトレンチを掘削（5/26）。

第5週（5/30～6/3）SK4より漆器、箸、貝殻出土（6/3）。

第6週（6/6～6/10）発掘区西半の第1調査面SD2の石積みの写真測量（6/8）。

第7週（6/13～6/17）高所作業車による発掘区西半の第1調査面全体の景観写真撮影（6/14）。

第8週（6/20～6/24）発掘区西半の第2調査面遺物包含層掘削開始（6/20）。発掘区西半の第2調査面遺構掘削開始（6/23）。

第9週（6/27～7/1）高田康成氏（大垣市教育委員会）の指導（6/28）。

第10週（7/4～7/8）発掘区西半の第2調査面遺構掘削継続。SD9の検出（7/7）。

第11週（7/11～7/15）SD2の杭の土層断面観察。発掘区西半の第2調査面全体の景観写真撮影（7/14）。発掘区西半の埋め戻し開始（7/15）。

第12週（7/19～7/22）発掘区東半の重機による表土掘削開始（7/20）。発掘区東半の埋め戻し終了（7/21）。発掘区東半の表土掘削終了（7/22）。発掘区東半の第1調査面遺構掘削開始（7/22）。

第13週（7/25～7/29）遺構掘削継続。発掘区東半のSD2の石積み検出（7/28）。

第14週（8/1～8/5）発掘区東半の第1調査面SD2の写真測量（8/4）。

第15週（8/8～8/12）発掘区東半の第1調査面全体の写真撮影実施（8/10）。夏期休暇のため、現場作業休止（8/11～16）。

第16週（8/15～8/19）発掘区東半の第1調査面狭小区（C7他7グリッド）の重機による表土掘削開始（8/17）。発掘区東半の第1調査面狭小区（C7・D7グリッド）の遺構検出（8/18）。

第17週（8/22～8/26）発掘区東半の第1調査面の写真撮影実施（8/25）。

第18週（8/29～9/2）発掘区東半の第2調査面遺物包含層掘削開始（8/29）。発掘区東半の第2調査面遺構掘削開始（9/1）。

第19週（9/5～9/9）発掘区東半の第2調査面遺構掘削継続。SD13・SD14の検出（9/9）。

第20週（9/12～9/16）中井均氏（滋賀県立大学教授）の指導（9/15）。

4 第1章 調査の経緯

第21週（9/20～9/23）台風16号のため、発掘区内冠水（9/21）。

第22週（9/26～9/30）発掘区東半の第2調査面狭小区（C7他7グリッド）の写真撮影（9/27）。SK78の検出（9/29）。SP21石鉢出土（9/30）。

第23週（10/4～10/7）発掘区東半の第2調査面遺構掘削終了。発掘区東半の第2調査面全体の景観写真撮影。全調査を終了（10/7）。

第24週（10/11～10/14）発掘区東半の埋め戻し作業終了（10/12）。

第25週（10/17～10/18）調査員事務所撤収完了（10/17）。現地引渡し（10/18）。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、10月25日から11月18日までの期間に、遺物実測や挿図作成等の二次整理作業は12月1日から3月3日までの期間に、それぞれ当センターにて実施した。整理等作業時には、11月8日に富田守泰氏（岐阜県森林研究所）にSD2に伴う木製品の樹種に関する指導を受けた。12月20日に井川祥子氏（岐阜市教育委員会）に土師器に関する指導を、平成29年1月6日に藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）に陶磁器に関する指導を受けた。また、2月21日に中井均氏（滋賀県立大学教授）に総括に関する指導を受けた。2月24日に松本正樹氏（岐阜県博物館）にSK4出土の貝殻に関する指導を受けた。

3 調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	羽田能崇
総務課長	二宮 隆
調査課長	春日井恒
調査担当係総括	三輪晃三
担当調査職員	加中雅章



写真1 調査前状況（西から）



写真2 重機による表土掘削状況



写真3 遺物包含層掘削状況



写真4 遺構検出作業状況



写真5 遺構掘削状況



写真6 遺構実測作業状況



写真7 遺物の清掃作業状況



写真8 高所作業車による写真撮影

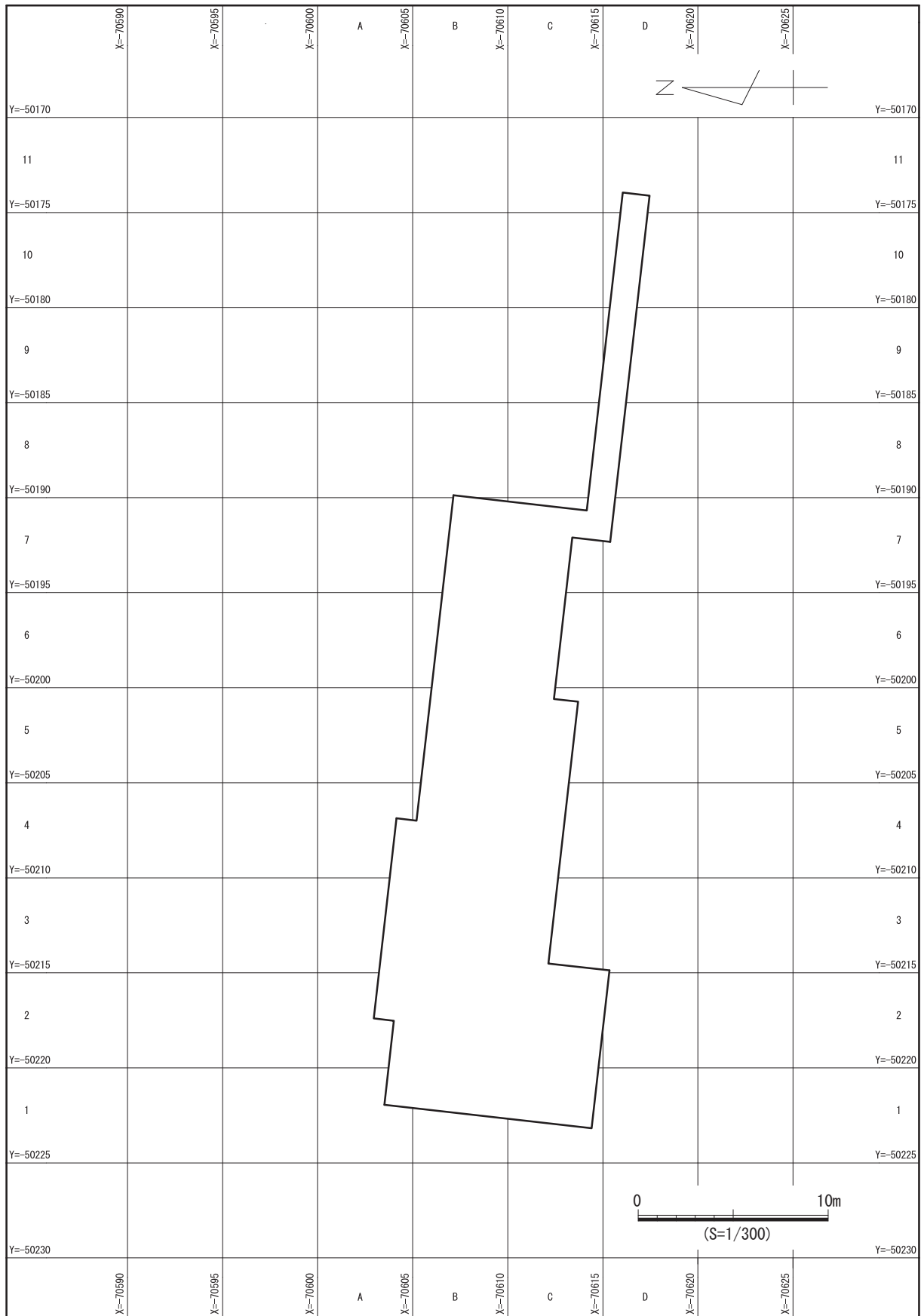


図3 グリッド設定図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

大垣城跡・城下町が所在する大垣市は岐阜県の南西部に位置し、岐阜市、羽島市、瑞穂市、揖斐郡池田町、安八郡神戸町、安八町、輪之内町、不破郡垂井町、関ヶ原町、養老郡養老町と接している。また、平成18年の合併により、市東部に墨俣地域、南西部に上石津地域が飛び地で存在し、上石津地域は滋賀県、三重県とも接している。

大垣市は、木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）により形成された濃尾平野の北西部に位置する。濃尾平野は国内有数の平野であり、その大部分を沖積平野が占め、上石津地域を除く市域のほとんどが標高約3～12mの沖積地である。一般に、上流側から扇状地帯、自然堤防地帯（はん濫平野）、三角州地帯に分けられるが、大垣市付近には、扇状地、自然堤防や後背湿地などからなるはん濫平野が広がる（図4）。自然堤防は島状をなして点在し、もとより周りより標高が高いため、古くから集落の立地がみられた。大垣市の河川は揖斐川、相川、牧田川が市域の外周を流れ、市内には、杭瀬川、水門川、大谷川などが貫流している。地下水も豊富であり、古くから「水の都」とも言われている。

当遺跡は、扇状地帯との三角州地帯の境界付近に位置する。ボーリング資料によればJR大垣駅付近が縄文海進期の境とみられ、JR大垣駅の北側では、沖積層中に貝化石が見られず、南側では、貝化石を含むシルト層をはじめ軟弱な海成層が分布している。そのため、後期旧石器時代に当たる約2万年前の遺跡は、市域南部において深く埋もれていると考えられる。空中写真の分析によると、JR大垣駅付近に三列の砂堆が東西にのびていることが明らかになっており、大垣城は最も北側に位置する砂堆の西端近くに位置している。大垣城の城下町を囲む堀として機能していた水門川は、砂堆が障害となり、南下できず、西側へと流れを変えたと考えられている¹⁾。

注

1) 大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編—』

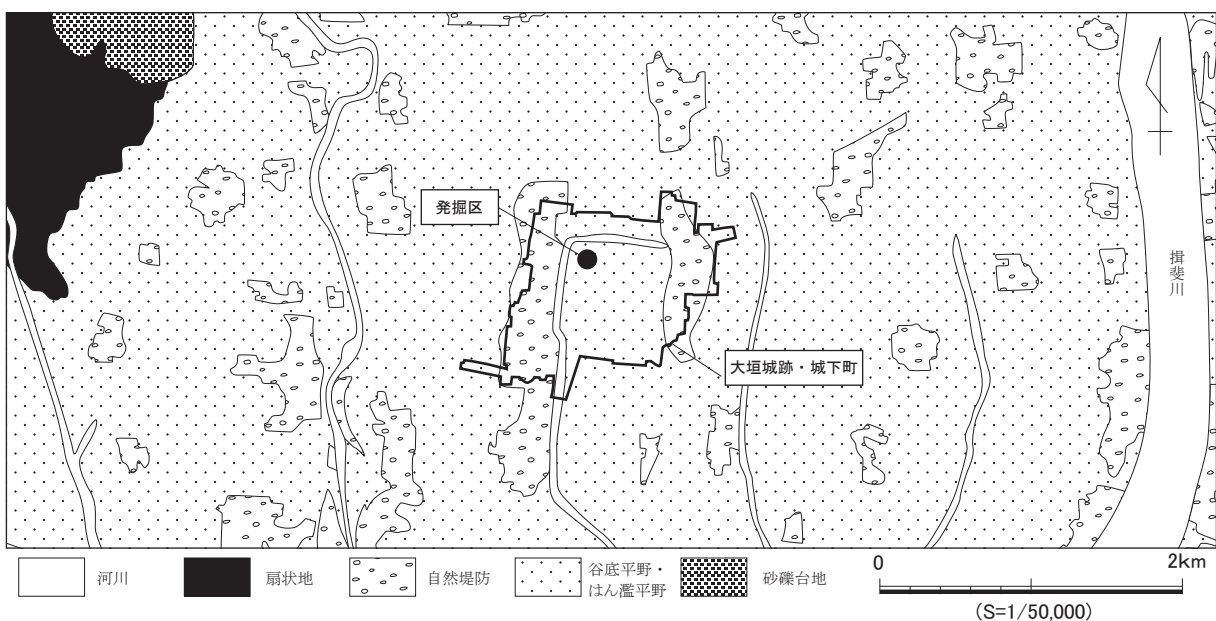


図4 遺跡周辺の地形分類図（岐阜県企画部1983『岐阜県土地分類基本調査 大垣』をもとに作成）

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺では、弥生時代から近世にかけての遺跡が分布している。表1、図5は、『改訂版岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会2007）を基に、遺跡の種類、時代等に関する新たな成果を踏まえて作成した。以下に年代順に遺跡の概要を述べる¹⁾。なお、本文中の括弧内の番号は、表1の番号、図5の番号と一致する。

縄文時代

東町田遺跡から草創期の尖頭器と中期の土器が出土した。荒尾南遺跡では、竪穴建物跡が検出され、自然流路内や遺物包含層などから縄文時代晩期の土器が出土した。

弥生時代

弥生時代になると遺跡数が増加する。今宿遺跡（23）では、人面線刻絵画土器が出土した。林A遺跡（16）では、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土した。三塚遺跡（21）では、弥生土器や土師器、須恵器が出土した。南一色遺跡（15）は、昭和8年に紡績工場を建設する際、地表面下約2m下より多量の弥生土器・土師器、木製品が出土し、弥生時代後期以降の大規模な集落があったと考えられている。城屋敷遺跡（31）は、地下2m掘り下げた時点で弥生土器、土師器が出土したとされている。

古墳時代

市内北西部に古墳前期から中期には、矢道長塚古墳、昼飯大塚古墳など大型の前方後方墳や前方後円墳が集中し、この地域に一大勢力が存在していたことを窺わせる。今宿遺跡では、洪水により埋没した水田で約9000歩の足跡が検出された。楽田遺跡（11）は弥生時代終末～古墳時代初頭頃を中心とする遺跡である。

古代

奈良時代以降、不破郡垂井町に美濃国府、不破郡関ヶ原町に不破関が置かれ、大垣市に国分僧寺、不破郡垂井町に国分尼寺が造られた。そのため西濃地域は、古代美濃国の政治的中心地となった。塚越遺跡（3）では、平安時代から鎌倉時代の土坑を検出し、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗など古代から中世にかけての遺物が出土した。南一色遺跡（15）では、「美濃」刻印須恵器が採集された。郭町C遺跡（28）、林A遺跡（16）、林B遺跡（17）、林D遺跡（19）でも古代の遺物が出土した。

中近世

興福地遺跡（2）では、鎌倉時代初頭の井戸を検出し、その中から扇子の骨や墨書資料が出土した。

大垣城跡・城下町一帯は、奈良時代から室町時代にかけて東大寺大井荘が所在した。大井荘の範囲は、近世大垣城跡・城下町を包括するほどの広さであると考えられている。平安時代末から鎌倉時代の大井荘の経営には、下司職の大中臣氏が、その後は東大寺から派遣された下司代と現地の田所・公文があたったと考えられている。しかし、この時期の遺構については、平成12年度、戸田家廟所である圓通寺東の調査において、平安時代から鎌倉時代の遺構が確認されているのみである。

これまでに実施された、発掘区周辺の埋蔵文化財発掘調査、工事立会の概要は、以下のとおりである。

昭和41年、乾櫓建設に伴い、金箔瓦が出土した。鬼瓦の一部とみられている。

昭和62年度、丸の内2丁目内のビル建設工事時の工事立会では、現地表面約1.5m下から石列、胴木、杭列を検出した。北の丸西堀に伴う土塁の一部と考えられている。

平成6年度には、ビル建設に伴い、郭町地内で発掘調査が行われた。調査地点は、太鼓門跡付近と推定される場所である。調査では、上下2面の戦国期の遺構面が確認され、瀬戸・美濃陶器を多く占める陶磁器や土師器皿が出土した。このうち8割近くが灯明皿、酒器に用いられた土師器である。なかでも京都産と思われる搬入品があり、京都文化の影響を受けていたと考えられている。瓦は岐阜城や清州城の軒丸瓦と同型のものが出土した。

平成25年度には、大垣市立興文小学校屋内運動場建替え工事に伴い、発掘調査が行われた。中世から近世の遺構が確認されるとともに、弥生時代から近世の遺物が出土した。

大垣市内には、多くの城館跡も分布している。稲葉氏ゆかりの曾根城跡・城下町では、石垣が検出された。15世紀末から16世紀中頃の遺物が出土しており、城館を構えていた時期は15世紀末頃まで遡る可能性がある。内膳正行広が在城したといわれる三塚城跡(32)では、現在でも周辺に、城屋敷、北屋敷、中屋敷、南屋敷等の小字名が残る。内膳盛国が城主であったといわれる楽田城跡(10)、『美濃志』に記述がある笠縫城跡(8)、今宿城跡推定地(20)、宮川吉左衛門安定が居城したといわれる若森城跡(33)、城屋敷の小字名が現在でも残る青柳城跡(35)など多くの城館は、地元伝承や宇絵図から推定されている。

近・現代

明治以降の大垣城は、多くの建物が払い下げあるいは取り壊しとなった。昭和10年に天守は、郷土博物館として一般市民に開放され、昭和11年に天守と櫓が国宝に指定された。その後昭和20年7月29日の大空襲で、天守をはじめ大部分は焼失した。昭和33年に再建工事がはじまり、昭和34年に完成して現在に至る。

注 1) 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

大垣市2011『大垣市史考古編』

大垣市教育委員会2000『大垣城跡Ⅰ—太鼓門跡付近発掘調査報告書』

大垣市教育委員会2001『大垣市埋蔵文化財調査概要平成12年度』

大垣市教育委員会2015『大垣城跡・城下町—大垣市立興文小学校屋内運動場建て替え工事に伴う発掘調査—』

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	大垣城跡・城下町	城館跡	中世・近世	20	今宿城跡推定地	城館跡	中世
2	興福地遺跡	集落跡	古代・中世	21	三塚遺跡	散布地	弥生～古墳
3	塚越遺跡	散布地	古墳	22	加賀野城跡	城館跡	中世
4	興福地向田遺跡	散布地	古代・中世	23	今宿遺跡	集落跡・生産遺跡	弥生・古墳・古代・中世
5	西之川遺跡	散布地	弥生・古墳・古代	24	馬場町遺跡	散布地	弥生
6	河間遺跡	散布地	古代・中世	25	船町遺跡	散布地	弥生
7	河間村内遺跡	散布地	中世	26	郭町A遺跡	散布地	弥生
8	笠縫城跡	城館跡	中世	27	郭町B遺跡	散布地	弥生
9	中川大坪遺跡	散布地	中世	28	郭町C遺跡	散布地	弥生～古墳
10	楽田城跡	城館跡	中世	29	南類遺跡	散布地	弥生～古墳
11	楽田遺跡	散布地	弥生～中世	30	高橋遺跡	散布地	弥生
12	大島遺跡	散布地	古代・中世	31	城屋敷遺跡	散布地	弥生
13	福田城跡推定地	城館跡	中世	32	三塚城跡	城館跡	中世
14	福田遺跡	散布地	中世	33	若森城跡	城館跡	中世
15	南一色遺跡	散布地	弥生～中世	34	青柳遺跡	散布地	弥生
16	林A遺跡	散布地	弥生～中世	35	青柳城跡	城館跡	中世
17	林B遺跡	散布地	弥生～中世	36	綾野遺跡	散布地	中世
18	林C遺跡	散布地	弥生	37	築捨遺跡	散布地	古墳
19	林D遺跡	散布地	弥生～中世				



图5 周辺遺跡位置图 (平成14年国土地理院発行1:25,000地形图「大垣」使用)

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

各土層から出土した遺物と、遺構の時期を検討し、発掘区の基本層序を以下のように設定した。SD 2の北側・南側では、遺構の重複が著しく、攪乱も多い。しかし、ほぼ全域Ⅰ層～Ⅳ層を確認することができた。

Ⅰ層 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色土～7.5Y 3/1 オリーブ黒色土 表土（攪乱を含む）

層厚は約0.7～1.0mである。戦後から現代にかけての整地層をまとめてⅠ層とした。

Ⅱ層 7.5Y 4/2 灰オリーブ色シルト 整地層

発掘区の全域で確認した。層厚は約0.05～0.3mである。発掘区の東側（C 7～9、D 7～11グリッド）においては、層厚が約0.3mと厚く堆積していた。本層上面で、近代（明治時代前期末以降）の遺構を確認したことから近代（明治時代前期末）の整地層と思われる。上面を第1調査面とした。

Ⅲ層 5 Y 4/2 灰オリーブ色シルト 遺物包含層

発掘区のほぼ全域で確認した。層厚約0.05m～0.15mを測る。古代から近代の遺物包含層と考えられる。ただし、狭小区では標高が約0.2m低く中世の遺物が多いことから、同一層ではなくⅢ層とⅣ層の間の堆積物である可能性がある。

Ⅳ層 5 Y 3/2 オリーブ黒色シルト 基盤層

発掘区のほぼ全域で確認した。発掘区の東側（C 7～9、D 7～11グリッド）では、Ⅳ層は厚く堆積する。それ以外の地点では遺構の重複が著しく、攪乱が多いため、痕跡的な確認であるもののほぼ全域で確認できた。層厚約0.05m～0.15mを測る。本層上面で中世から近代（明治時代前期）にかけての遺構を確認した。上面を第2調査面とした。

Ⅴ層 10Y 4/1 灰色砂質土～7.5Y 2/1 黒色粘土 基盤層

SD 9の北壁土層断面において、Ⅳ層下で確認した。層厚は、約0.6～0.7mである。無遺物層である。

Ⅵ層 10Y 3/1 オリーブ黒色粘土～7.5Y 4/1 灰色粘質シルト 基盤層

SD 2の留杭において土層の断面実測をした際に、SD 2の掘方の下で確認することができた。無遺物層であり、粘質シルトの下層から湧水がある。

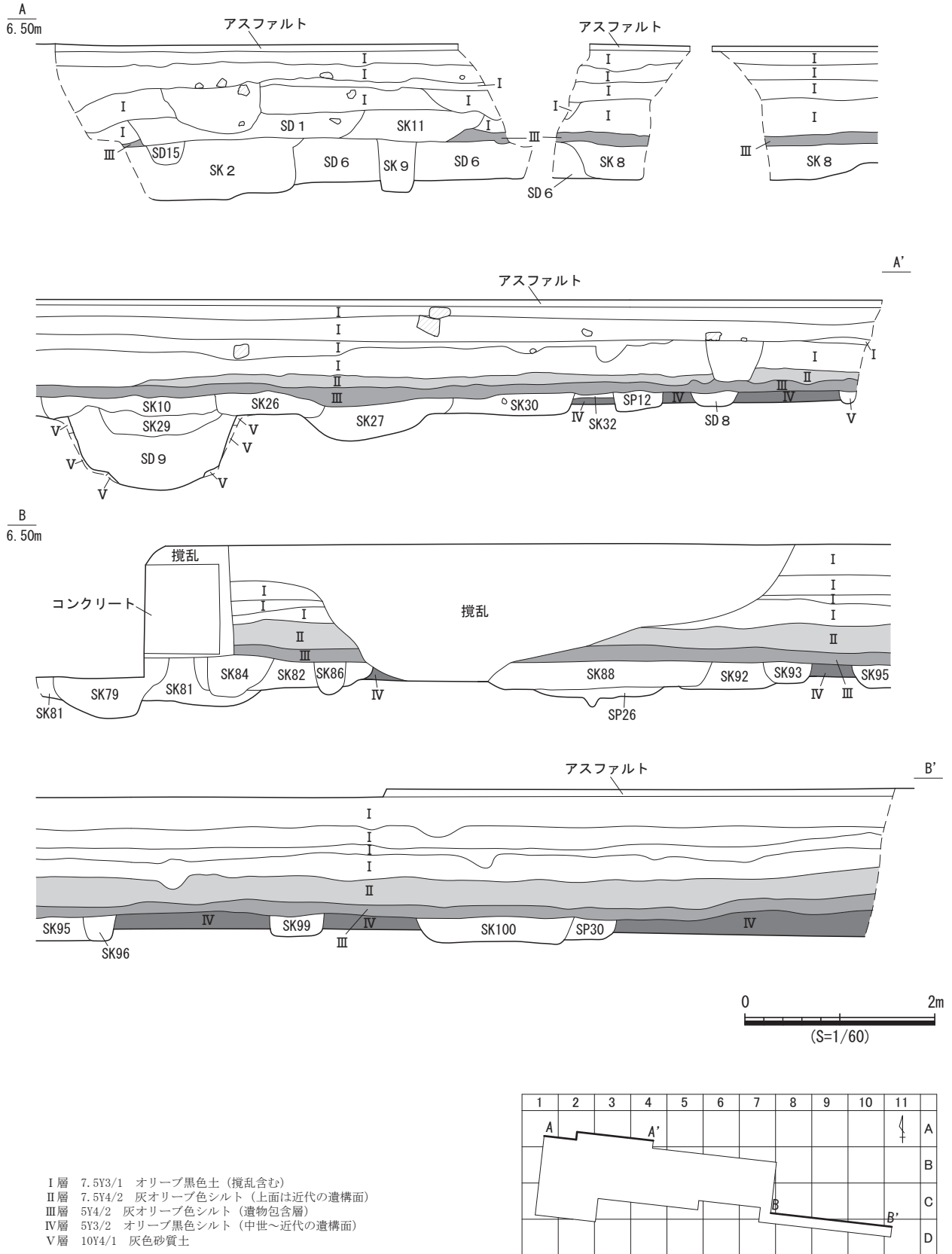


図6 発掘区北壁土層断面図

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構概要

(1) 概要

調査では、中世、近世、近代の遺構を検出した。検出した遺構数は、表2のとおりである。第1調査面では、発掘区のほぼ中央部を東西に走る近代の大溝を検出した。他に溝状遺構や土坑、柱穴を検出した。第2調査面では、中世から近代にかけての溝状遺構、土坑、柱穴、柵を検出した。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係などから判断したが、時期不明とした遺構もある。また、出土遺物が複数の時期に跨る場合は、原則としてより新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、これらの遺構のうち、区画施設のように遺跡の性格を検討する上で、重要な遺構や一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例が少ない遺物が出土した遺構などを抽出して掲載した。

表2 検出遺構一覧表

遺構種別	S D	S K	S P	S A	合計
遺構数	15	102	30	1	148

(2) 遺構の分類

今回検出した遺構は、溝状遺構（石積を含む）、土坑、柱穴、柵に分け、各遺構の分類は、形状と規模、構造から判断した。以下に各遺構の分類基準を概述する。

溝状遺構（略号S D） 地面を掘りくぼめた遺構の内、細長い平面形を呈するもの。

土坑（略号S K） 地面に掘りくぼめた遺構の内、明確に性格付けができないもの。遺物の出土状況から廃棄土坑の可能性が考えられるものもある。

柱穴（略号S P） 埋土に柱痕跡や柱の当たり、柱根の残る遺構、又は掘立柱建物や柵などのうち、柱が存在していたと想定されるもの。

柵（略号S A） 規則的に一列に並ぶ複数の柱穴によって構成される遺構で、向かい合う2辺以上が確認できないもの。

(3) 遺構一覧表

各遺構の規模は遺構一覧表に示した。基本項目については次のとおりである。

遺構の検出層位 基本層序で表し、II層上面で検出した遺構の場合「II上」と表記した。

遺構埋土 堆積状況を次のように表示した。

A－埋土が単一層 B－ほぼ水平な堆積 C－中央がU字状に凹むような堆積

D－凹みが片寄った堆積 E－柱痕跡状の土層があるもの F－その他

平面形 A－円形 B－不整円形 C－方形 D－不整方形 E－不定形 F－不明とした。発掘区外に続く、あるいは他の遺構に削平され形状が明確でないものについては不明、不定形などとした。

断面形 断面の形状（A～F）で示した。

A－半円形 B－方形 C－逆三角形 D－逆台形 E－二段の掘り込み F－その他

遺構の規模 単位はmであるが、() で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を測ったものである。

切り合い関係 「新>古」の関係を示す。

2 遺物概要

(1) 概要

今回の発掘調査では、弥生時代から近代にかけての土器・陶磁器とその他の遺物（土製品、瓦、石器、木製品、金属製品・銭貨）が出土した。種類別の点数は、表3のとおりである。遺物の主体となる時期は近世であり土器・陶磁器全体の約7割を超える。ただし、中世との区別が困難な遺物（常滑産陶器、土師器皿、内耳鍋、茶釜）については「中近世」としてとりまとめているため、厳密には近世の遺物はさらに多い。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なもの、遺跡の性格を端的に示すもの、遺物の分類上で代表的なものを中心に選択し掲載した。

なお、遺物実測図の縮尺は3分の1（土器・陶磁器・石器）、2分の1（土製品）、4分の1（瓦）、等倍（銭貨）としたが、一部の遺物についてはその大きさや種類に応じて縮尺を替えた。

(2) 遺物の分類

出土した遺物は、種類により弥生土器・須恵器・灰釉陶器・鍋（以上、古代）、無釉陶器・施釉陶器・中国産陶磁器・鍋・羽釜（以上、中世）、常滑産陶器・土師器皿・鍋・茶釜（以上、中近世）、陶磁器・

表3 遺物分類表

種 別		破片数合計				掲載点数		
		接合前		接合後				
土器・陶磁器	弥生時代	弥生土器	37		36	0.7%	1	
	古代	須恵器、灰釉陶器	51	52	50	51	1.0%	3
		土器（清郷型鍋）	1		1			1
	中世	無釉陶器（山茶碗類、片口鉢）	431	585	422	574	11.8%	17
		施釉陶器（古瀬戸、大窯等）	122		120			22
		中国産陶磁器	18		18			9
		土器（伊勢型鍋・羽釜）	14		14			1
	中近世	常滑産陶器	123	747	120	729	15.0%	17
		土師器（皿）	490		476			14
		土器（内耳鍋、茶釜）	134		133			2
	近世	陶磁器	3,476	3,516	3,366	3,406	70.2%	88
		土器（ホウロク、焼塩壺）	40		40			4
	近代	陶磁器	38		37	0.8%	1	
時期不明		22		22	0.5%	0		
小 計		4,997		4,855		100.0%	180	
その他	土製品	22	172	22	171		5	
	瓦	92		91			9	
	石器	6		6			2	
	木製品	41		41			22	
	金属製品、銭貨	11		11			7	
合 計		5,169		5,026			225	

※中世施釉陶器には、美濃須衛産陶器1点を含む。上表に、自然遺物（貝殻、堅果類）の点数は記載してない。

ホウロク・焼塩壺（近世）、近代に分類し、時期が不明なものは一括した。各種類の器種・時期等については、既存の文献¹⁾を参照したが、主に以下の方々に遺物を実見の上で御指導、御助言いただいた（敬称略）。ただし、本報告書における掲載内容の責任は、執筆者にある。

藤澤良祐（瀬戸美濃産陶磁器・中国産陶器）、中野晴久（常滑産陶器）、井川祥子（中世後期～近世土師器皿）、山田昭彦・近藤大典（墨書）

（3）出土遺物一覧表

遺構・遺物包含層毎に種類別の遺物点数を計測し、結果を表17・18に掲載した。なお、本報告書に記載する遺物点数は接合後破片数であり、遺構間で遺物が接合した際に遺構の切り合い関係がある場合は古い遺構に、遺構の切り合い関係がない場合は破片の大きな遺構に帰属させた（注記できない2cm角以下の遺物は計測対象から除外した）。

注

1) 遺物の分類に際して、主に下記の文献を参考にした。なお、中世、近世、近代の区分は藤澤2007による。

井川祥子2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』、高志書院

江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』、柏書房株式会社

小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号、美濃の考古学刊行会

金子健一1996「ホウロクの種類」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

北村和宏1996「尾張の「伊勢型鍋」「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』、九州近世陶磁学会

鈴木正貴1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

永井宏幸1996「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

中野晴久2012「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』、愛知県史編さん委員会

藤澤良祐2007「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』、愛知県史編さん委員会

横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』

第3節 遺構

本節では、検出した主要遺構を第1調査面、第2調査面に大別して、溝状遺構（SD）、土坑（SK）、柱穴（SP）、柵（SA）の順に説明する。出土した遺物の詳細内容については、主に第4節で説明する。

1 第1調査面

(1) 溝状遺構

SD2（図7・8）

検出状況 B・C1～7グリッドに位置する。I d層掘削後、発掘区の東西にわたって砂礫の埋土を検出した。B1グリッドでは北端を確認したが、B7グリッドでは攪乱に切られる。また、C3グリッド以西では南端を確認したが、C4グリッド以東では発掘区外に延びる。発掘区外の東側約13mには戦後まで大垣城の外堀が残存しており、本遺構が東に向かって緩やかに下っていることから外堀につながっていた可能性が考えられる。SK24・58など多数の遺構を切っている。

規模・形状 長さ30.3m以上、最大幅5.42m、最大深1.28mであり、主軸方位はN-87.5°-Wである。掘方の断面形は逆台形で、底面はほぼ水平である。北壁は傾斜が強くわずかに開くが、南壁は平坦な面をもち緩やかに立ち上がる。底面の標高は、A-A'断面では4.19m、C-C'断面では4.29mである。

埋土 B-B'断面（図7）の1層は、周辺の調査地点でも戦後の堆積として解釈されている¹⁾。2層は石積抜き取り後の堆積土である。3層から被熱したレンガ、ガラス、ゴム製品が出土したことから、2・3層は同じ時期の堆積の可能性がある。3層を除去すると、護岸施設に伴う木組みを設置した際の埋め戻し土（4層）を確認した。本遺構を掘削した際に、胴木・留杭・枕木を設置し、胴木が見えなくなるまで埋め戻されたと考えられる。その直上に砂質シルトがわずかに堆積しており、流水の痕跡と推測する。

護岸施設 北壁寄りでは石積が部分的に残存し、それを支える胴木、留杭、枕木を確認した。石積は矢羽根積みで、発掘区西半では最大3段、発掘区東半では最大5段残存していた（図8）。石材の大半は砂岩であり、石灰岩や泥岩が少量混じる。人頭大の垂角礫を用い、面をそろえて敷設している。礫を除去すると、溝と並行する胴木列1条を確認した。胴木は合計11本で、樹種はアカマツである²⁾。胴木が南側に倒壊しないよう胴木両端の南側に留杭が打設されていた。留杭の樹種はマツ属であるが、細分は不明である。表面が焼けており、防腐処理の可能性はある。先端部は、地面に打ち込むために周縁から先端に向かって鋭角に削られる。胴木の両端直下に、胴木に直交して枕木が1本ずつ設置されていた。確認した枕木は19本で、樹種は不明である。C-C'断面（図7）の観察から、石積と同時に8～12層を埋戻し、7層は石積抜き取り後の堆積と考えられる。これらのことから、本遺構は掘方の掘削、枕木・胴木の設置、留杭の打設、石組敷設と背後の埋戻し、木組みの埋戻しの順で構築されたと考えられる。低湿地であることから石積が沈まないように木組みを設置した可能性が考えられる。

出土遺物 弥生時代から近代までの遺物が散在して出土したが、近世陶磁器が大半を占める。

時期 近代の整地層を切っていること、底面で検出したSK4で近代磁器が出土したこと、明治24年の地形図で戸田家の別邸と大垣大神宮の間に所在する溝状の痕跡（第5章第2節参照）に相当することから、所属時期は明治時代前期末と考えられる。

SD3（図7・9）

検出状況 B・C1～7グリッドに位置する。検出当初は、SD2に切られる遺構であると考えていたが、土層断面B-B'（図7）からSD2が埋没する過程で掘削され、その後に削平されたことが判明した。SD2にはほぼ並行して東西に延びる。SK4・24など多数の遺構を切る。

規模・形状 長さ30.7m以上、最大幅1.40m、最大深0.85m、主軸方位はN-85.5°-Wである。掘方の断面形は逆台形に近い。底面の標高は、E-E'断面で4.54m、F-F'断面で4.59m、G-G'断面で4.61mである。

埋土 3層に分層した。1層や2層に炭化物や植物片を含む。

杭列 発掘区西端で本遺構の南壁に沿って打設された杭列1条を確認した。杭の間隔は均等ではない。西端の杭3本は竹材で脆い。杭に伴う施設は確認できず、用途については不明である。

出土遺物 弥生時代から近代までの遺物が散在して出土したが、近世陶磁器が大半を占める。

時期 SD2との切り合い関係から、所属時期は明治時代中期と考えられる。

(2) 土坑

SK4（図10）

検出状況 B1グリッドに位置する。SD2の完掘後、周囲を精査し掘方を検出した。SD3に切られる。本遺構はSD2の埋め戻し土を掘り込む。

規模・形状 長軸長2.91m以上、短軸長0.51m以上、深さ0.46mである。掘方の平面形は西端が発掘区外であるため不明である。底面はほぼ平坦である。南壁は傾斜が強くわずかに開くが、北壁は緩やかに立ち上がる。

埋土 4層に分層した。南壁近くに4層が堆積した後、ほぼ水平に2・3層が堆積する。1層は別の掘り込みのような堆積であるが、平面では明瞭な掘方は確認できなかった。

出土遺物 中世と近世の陶磁器と木製品が散在して出土し、2・3層から動植物遺体³⁾がまとまって出土した。木製品は漆器5点（73～77）、箸8点（78～85）、棒状木製品1点（86）、板材4点、割材1点、角材1点、丸木芯持ち材1点である。埋土から多数の遺物が出土したことから、廃棄土坑と考えられる。

時期 SD2との切り合い関係から、明治時代前期末である。

SK22・25・102（図11）

検出状況 C2グリッドに位置する。攪乱を完掘後、遺物がまとまって出土したため、精査したところ、しまりのない粘土層の範囲を確認した。SK6を切る。検出当初は一つの土坑として判断したが、掘削中に本遺構の南東部で基盤層を確認したため再精査したところ、3基の遺構が切り合っていることが判明し、うちSK102は遺物の出土状況からSK22に切られていたことを確認した。SK25では土樋(93)が東西方向に埋設され、土樋と直交する方向に板材を垂直に立て、その外側から杭が4本打設されていた。土樋を固定するための施設⁴⁾と考えられる。土樋は、基部をSK102の東壁に向けて設置し、

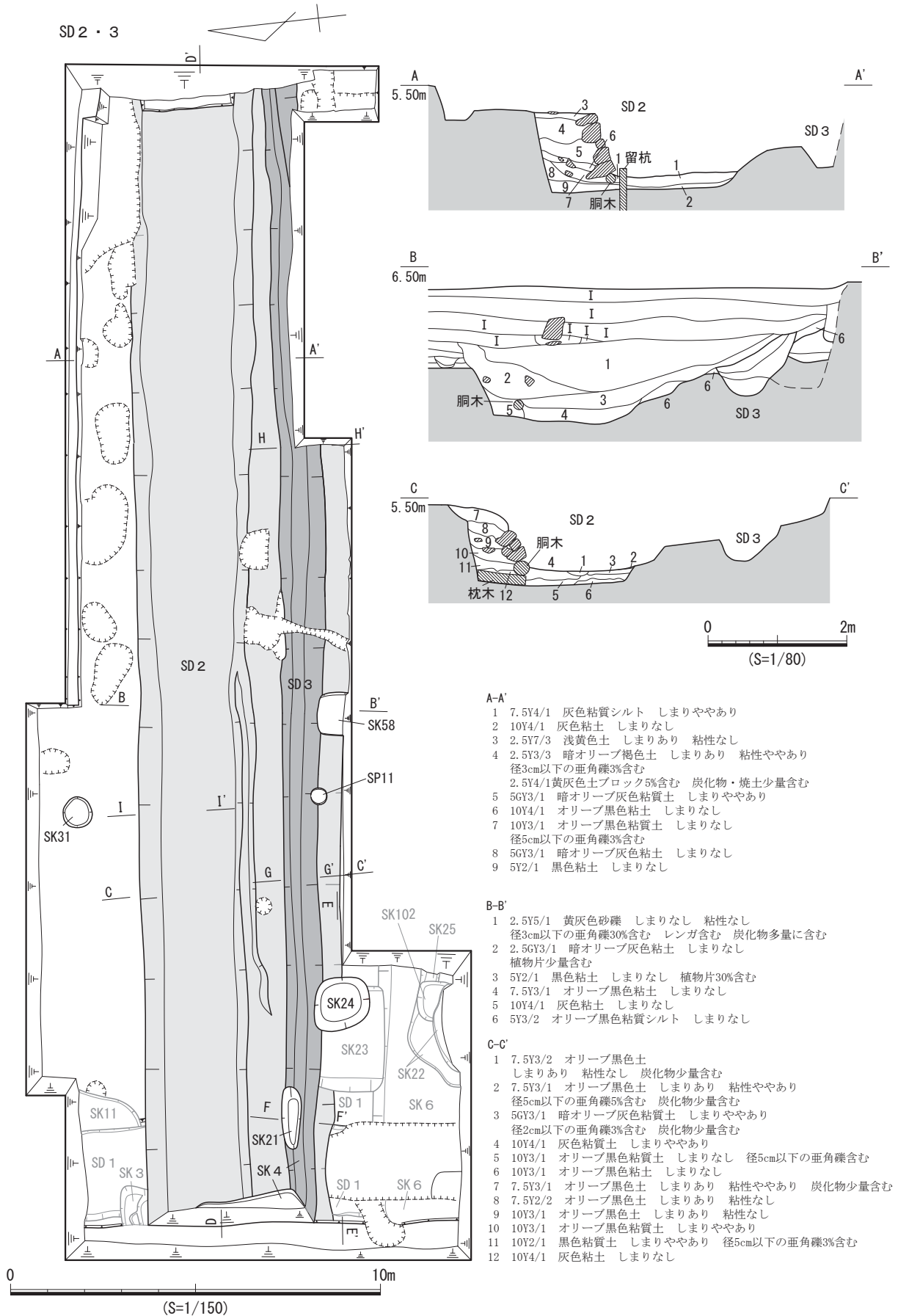
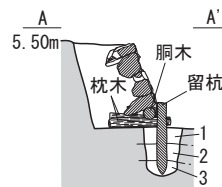
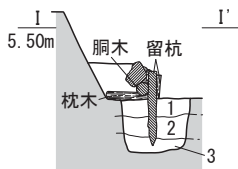
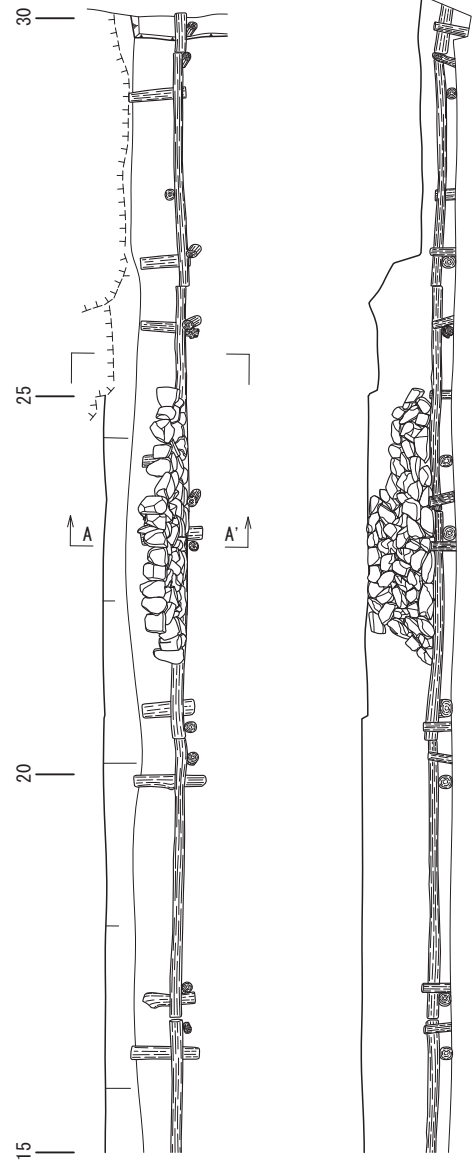
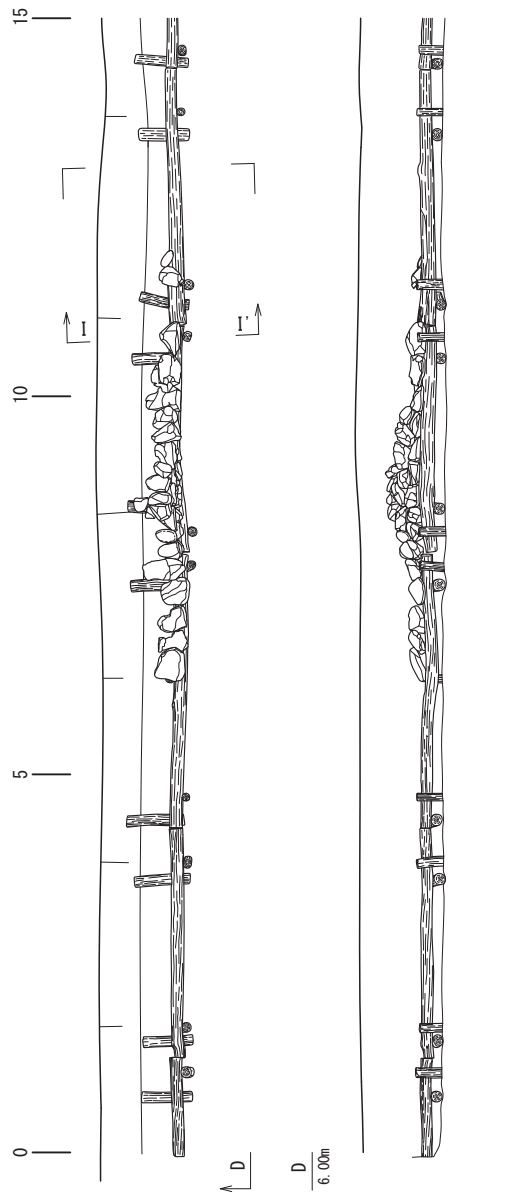


図7 溝状遺構遺構図(1)

SD 2



- 1 10Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまりややあり (VI層)
- 2 5Y4/1 灰色粘土 しまりややあり (VII層)
- 3 7.5Y4/1 灰色粘質シルト しまりなし (VIII層)

- 1 10Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまりややあり (VI層)
- 2 5Y4/1 灰色粘土 しまりややあり (VII層)
- 3 7.5Y4/1 灰色粘質シルト しまりなし (VIII層)

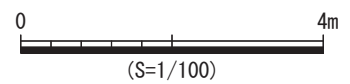


図8 溝状遺構遺構図(2)

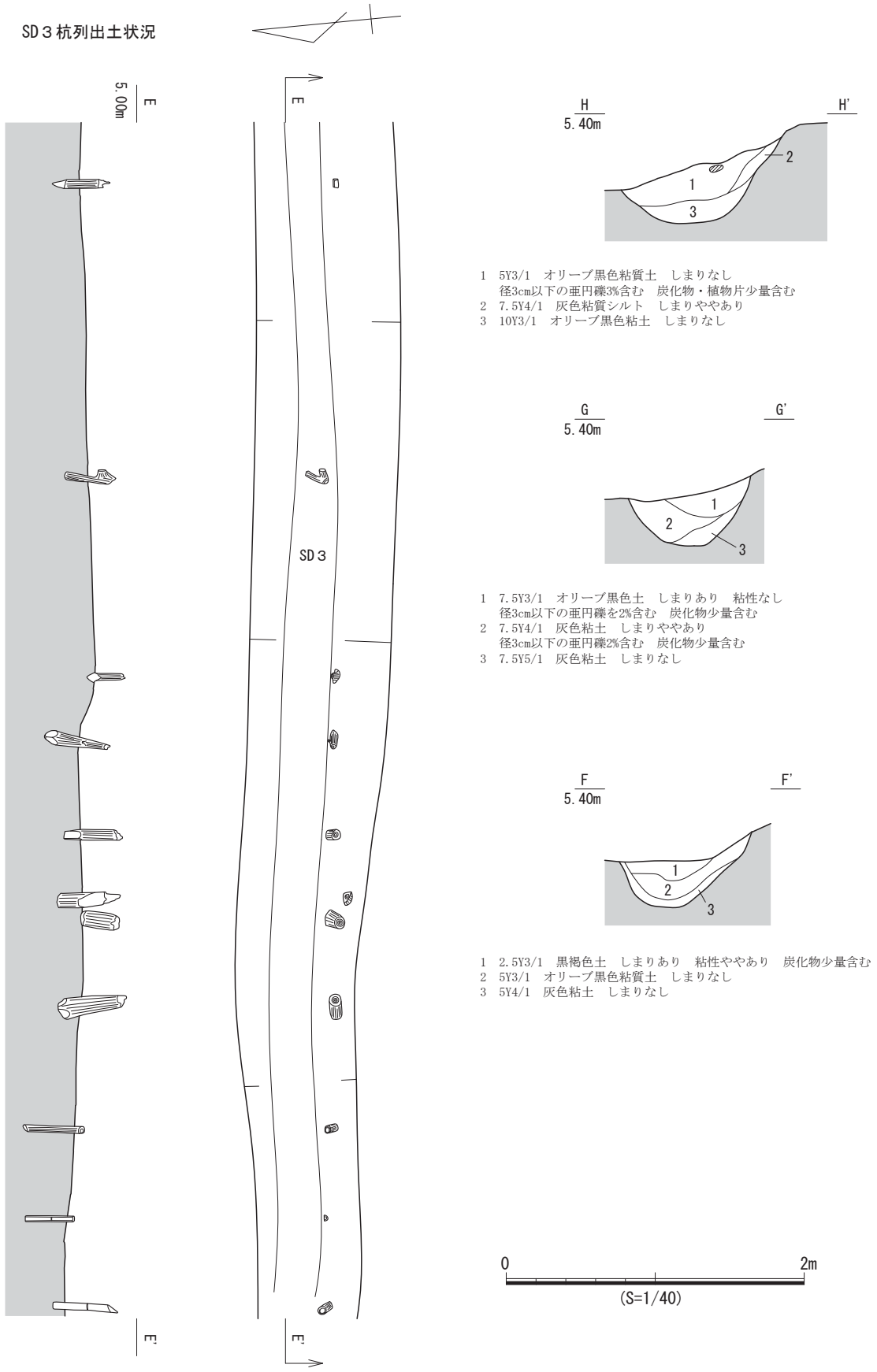


図9 溝状遺構遺構図(3)

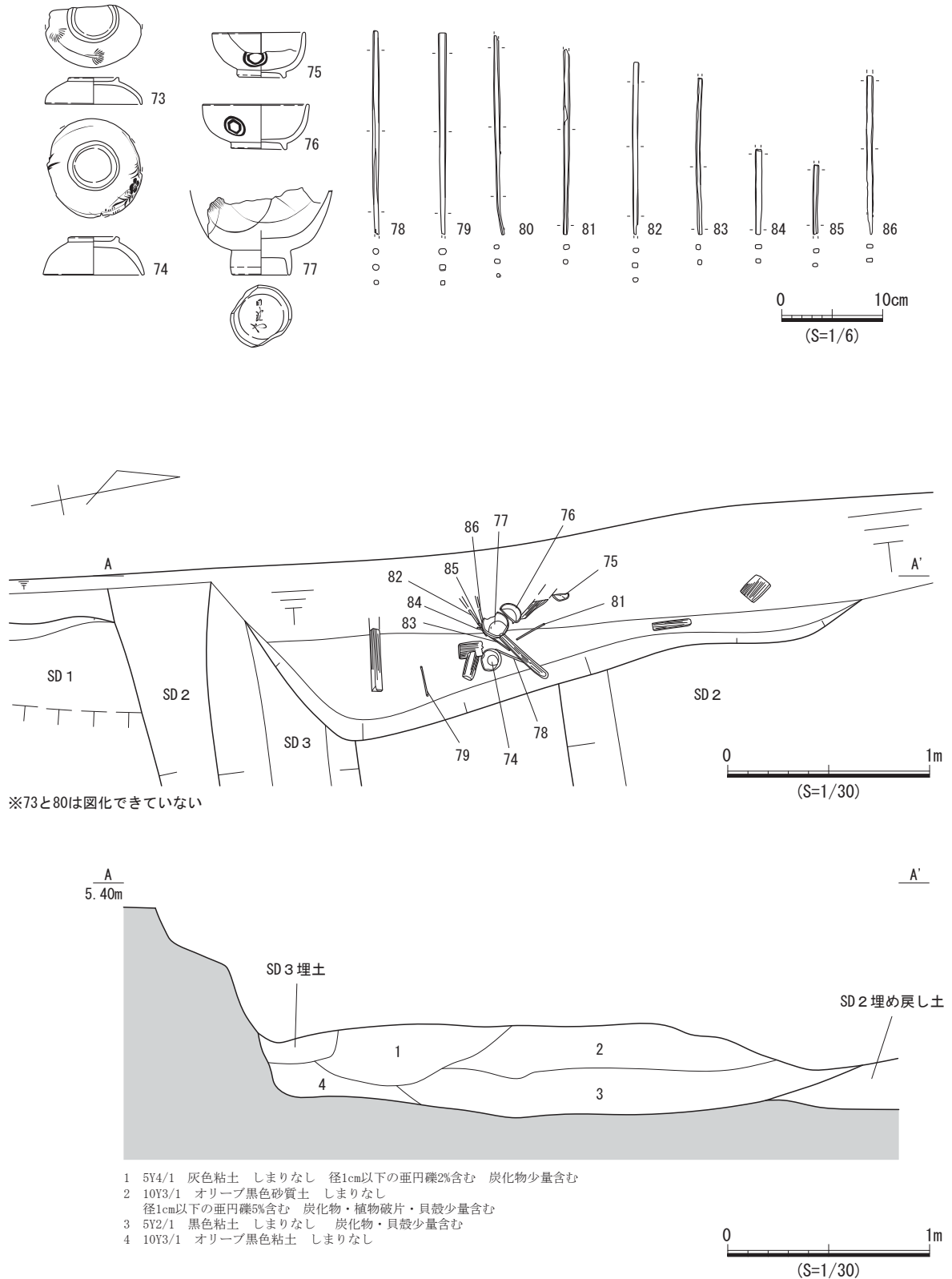


図10 SK4遺構図

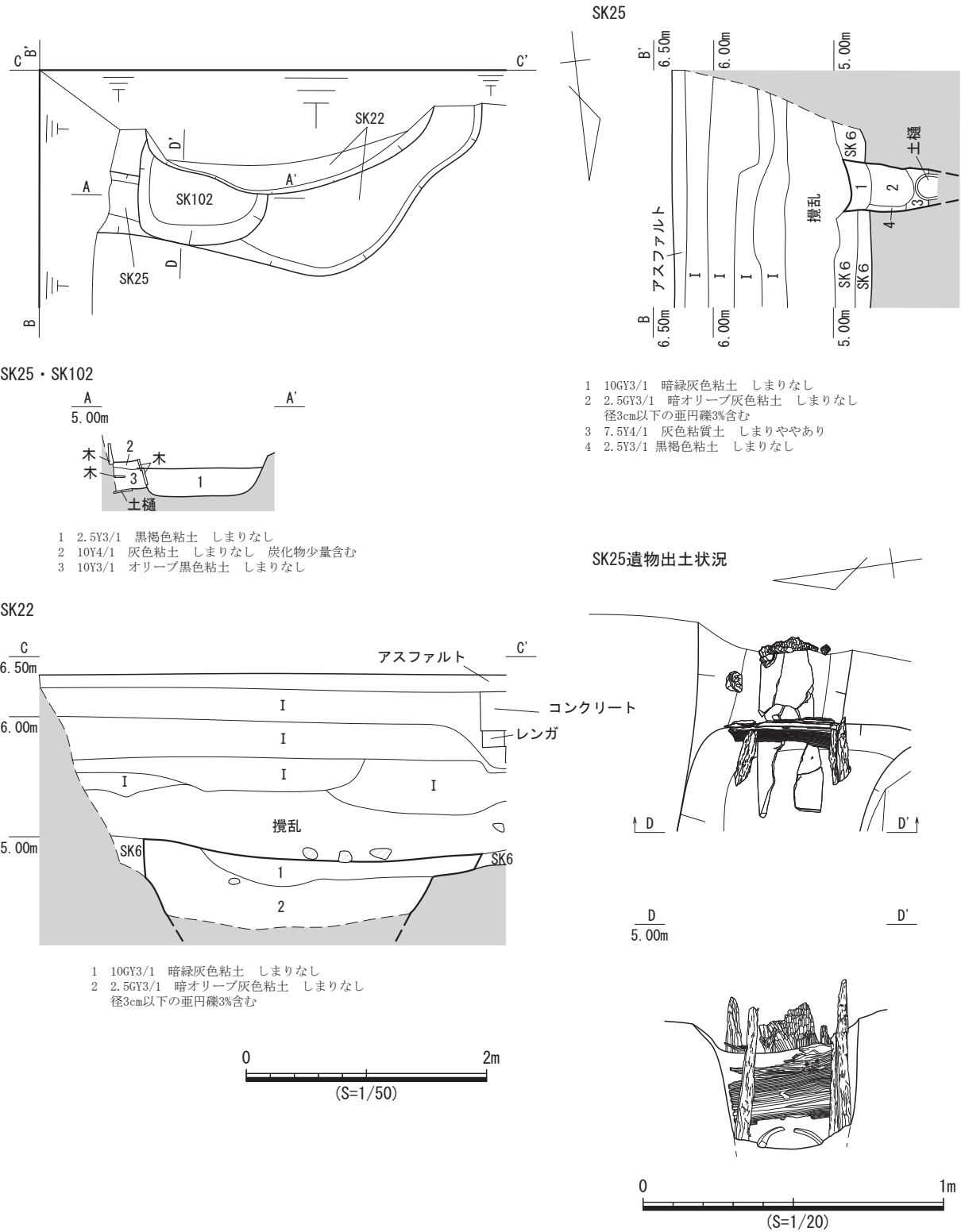


図11 SK22・25・102遺構図

SK22・102には続かないことから、SK25で収束し、SK102付近で南側又は地上に向けて屈曲していたと考えられ、SK102はその抜き取り穴と推測される。なお、SK22・25は発掘区壁面に接し、遺構の底面が現地表面から2mを超えたため、安全管理上完掘できなかった。

規模・形状 SK22は長軸長2.77m以上、短軸長0.98m以上、深さ0.73m以上で、掘方の平面形は不明である。SK25は長軸長0.52m以上、短軸長0.50m、深さ0.69m以上で、掘方の平面形は不明である。SK102は長軸長1.08m以上、短軸長0.61m以上、深さ0.35m、掘方の平面形は不整形とされる。A-A'断面の東西壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平坦である。B-B'断面の南北壁は垂直である。C-C'断面の東西壁はわずかに開く。

埋土 いずれの層もしまりのない粘性がある埋土である。A-A'断面の1層は、土樋の受口を抜き取った後の埋土と考えられる。

出土遺物 1基の遺構として検出したため、どの遺構に属するか判別が困難な遺物もある。近世を主体とする遺物がSK22の発掘区南壁付近とSK102でまとまって出土した。特に瓦の出土が目立つ。

時期 土樋は19世紀後半に位置することから、SK25は近代（明治時代中期）、SK22・102は明治時代中期以降である。

注

- 1) 大垣市教育委員会高田康成氏の御教示による。
- 2) 木材の樹種同定については、岐阜県森林研究所富田守泰氏の御教示による。
- 3) 動植物遺体の同定については、岐阜県博物館松本正樹氏の御教示による。同定の結果、ハマグリ321点（完存2点（殻長4.3cm、殻長3.3cm）、殻長3～4cmが7点、4～5cmが7点、殻長5～6cmが6点、計測不能が299点）、アカニシ1点（殻長9cm）、マガキ9点、サザエ？15点、イソシジミ？1点、アサリ？1点、クルマミ？1点（長さ2.8cm）であった。
- 4) 愛知学院大学中野晴久氏の御教示による。なお、この土樋のタイプは明治15年まで製造されていた可能性があると考えられる。

2 第2調査面

(1) 溝状遺構

溝状遺構は規模の違いにより大きく二分でき、上幅の狭い遺構（SD4・5・7・8・10・11・12・15）は一括で、上幅が概ね2mを超える遺構（SD6・9・13・14）は個別に説明する。

SD4・5・7・8・10・11・12・15（図12）

検出状況 検出面はいずれもIV層上面である。SD7はSD11に、SD8はSD10に切られる。また、SD12はSD10を切るが、主軸方位は同じであるため掘削時期も同じと考えられる。

規模・形状 主軸方位は、SD4がN-2°-W、SD5がN-3°-E、SD7がN-84°-W、SD8・11がN-2°-E、SD10がN-84°-W、SD12がN-84°-W、SD15がN-4°-Eである。南北方向の遺構については一部の検出であるが、東西方向の遺構は遺構の全体を把握でき、SD7が長さ16.82m、SD12が長さ3.54mである。深さは0.09～0.25mである。掘方の断面形は、SD4・5・8・11が逆台形、SD7が半円形（ただし遺構の西側は逆台形）、SD10が半円形、SD12・15が半円形である。

埋土 SD7・10は2層に分層したが、他は単層である。

出土遺物 いずれの遺構も少量の遺物（SD7を除く）が散在して出土した。SD4の1層から大窯第2段階の丸皿1点（99）、SD7の下層（人工層位b層）から近代磁器1点が出土した。

時期 出土遺物からSD4は16世紀前半以降（ただし、SD4出土遺物がSK101埋土から浮上したとす

れば近世に降る可能性がある。)、SD7は明治時代前期である。遺構の切り合い関係により、SK85(表30参照)を切るSD5は近世、SD7に切られるSD8は明治時代前期以前、SD7を切るSD11、SD7の主軸方位と一致するSD10・12、SD7に直交するSD15はいずれも明治時代前期と考えられる。

SD6 (図12)

検出状況 A・B1～2、C2グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK1・2・8、SD2など複数の遺構に切られ、SK5・SP4を切る。北端、西端は発掘外である。SD2に分断されており、検出段階では、慎重を期して別遺構として扱っていたが、主軸方位や底面の形状が類似すること、出土遺物の内容に大きな違いがないことなどから同一遺構と判断した。

規模・形状 長さ8.31m以上、最大幅3.91m以上、最大深0.44mである。主軸方位はN-4°-Eで、南北方向に直線状に伸びる。西側はSK3に切られるため、掘方の断面形は不明である。底面は平坦である。

埋土 4層に分層した。埋土の2層は炭化物、焼土を含む。東壁に近接する範囲に4層が堆積し、その後、3・2層が堆積する。

出土遺物 中世遺物29点、中近世遺物6点、近世遺物1点、土製品1点が散在して出土した。中世遺物は、山茶碗類24点(時期幅は第4型式から生田2号窯式まで)、古瀬戸5点(時期幅は後Ⅲ又はⅣ期から大窯第4段階後半まで)、中近世遺物は土師器皿(口縁部はB1類1点、C2類4点)と鍋類1点、近世遺物は瀬戸美濃産の壺又は瓶である。うち、大窯第4段階後半の志野鉢は埋土上部(人工層位b層)、近世陶器1点は上層(人工層位a層)から出土した。

時期 遺物はほぼ中世に限られ、近世遺物1点はⅢ層の遺物が混入したと考えたい。本遺構を切るSK1から瀬戸美濃産登窯第1又は2小期の大皿(172)、本遺構に切られるSP4では尾張型山茶碗が1点出土した。うちSK1は埋土をやや削り込んで検出し、埋土から出土した大皿の残存状況は良く混入遺物とは考えにくい(図版4)。埋没時期は大皿の時期から17世紀初頭と考えられる。掘削時期は、本遺構がSD9と並行することから、中世後期に位置づけることが妥当である。

SD9 (図13・14)

検出状況 A～C・2～3グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SD2・3の掘方壁面で立ち上がりを確認したことから周囲を精査し検出した。SD2に分断されており、検出段階では、慎重を期して別遺構として扱っていたが、主軸方位がほぼ同じであり、底面の高さが北から南へ徐々に高くなること、出土遺物の内容に大きな違いがないことから同一遺構と判断した。SK13・19など複数の遺構に切られる。

規模・形状 長さ10.11m以上、最大幅1.85m、最大深1.03mである。主軸方位はSD2を挟んで南側ではN-6°-E、北側ではN-4°-Eとなり、溝の南半が緩やかに東へ折れる。掘方の断面形は、A-A'断面では逆台形に近いがB-B'断面では半円形に近い。底面の標高はA-A'断面では4.45m、B-B'断面では4.18mで、南から北にかけて傾斜していると考えられる。

埋土 埋土全体が粘性があり、B-B'断面付近では埋土全体に炭化物を含む。水平若しくは中央に向かって緩やかに窪むような堆積である。

出土遺物 古代遺物1点、中世遺物16点、中近世遺物5点、時期不明1点、土製品1点が散在して出土した。中世遺物は、山茶碗類11点(時期幅は第3又は4型式から第5又は6型式まで)、古瀬戸4

点（後Ⅰ～Ⅲ期と後期の細分不明のみ）、白磁碗1点、中近世遺物は土師器皿2点と常滑産陶器3点である。遺物は、SD2を挟んで北側については2層又は3層から多く出土し、南側については2層から出土した。以上のうち、常滑産甕は遺構北側の2～3層から出土した。

時期 埋没時期は、常滑産甕（103）の時期より15世紀後半以降である。掘削時期は中世後期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SD13（図13・14）

検出状況 B5、C4・5グリッドに位置する。発掘区の南側ではIV層上面、発掘区の北側ではSK64完掘後に検出した。検出当初、SD2の壁面において立ち上がりを確認し、その地点から南西方向に向かって広がると想定した。しかし、発掘区の北壁、SD2の南北壁、SD3の南北壁で同様な立ち上がりを確認したため、南北方向に延びる1条の溝状遺構と判断した。SK64・66など複数の遺構に切られる。なお、本遺構の埋土は水を含むと脆く、底面が現地表面から2mを超え安全管理上危険なため、完掘できなかった。

規模・形状 長さ7.11m以上、最大幅4.31m、最大深1.50mであり、主軸方位はN-5°-Eで、南北方向に直線状に延びる。掘方の断面形は逆台形である。

埋土 6層に分層した。全体的に粘性があるが、特に最下層は粘性の高い灰色粘土が堆積していた。

出土遺物 古代以前の遺物6点、中世遺物13点、中近世遺物8点、近世遺物4点、瓦1点が散在して出土した。出土遺物の最新型式である大窯第3段階後半の播鉢2点は、埋土上部から出土した。近世遺物は、埋土上部やSD2の掘削後の壁面で出土しており、混入遺物と考えたい。

時期 最新型式の遺物の時期から、埋没時期は16世紀後葉と考えられる。なお、6層から出土した山茶碗第6型式（13世紀前葉）まで遡ると、埋没に要する期間があまりに長いため、混入と考えておきたい。掘削時期は中世後期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SD14（図13・14）

検出状況 B・C6グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SD2の北壁で立ち上がりを確認したことから周囲を精査したところ、SD3の南北壁でも同様な立ち上がりを確認したため、南北方向に延びる1条の溝状遺構と判断した。SK72・80など複数の遺構に切られている。本遺構も安全管理上完掘できなかった。

規模・形状 長さ5.20m以上、最大幅3.71m、最大深1.65mであり、主軸方位はN-6°-Eで、南北方向に直線状に延びる。掘方の断面形は逆台形である。底面は、東寄りやや窪みがみられる。

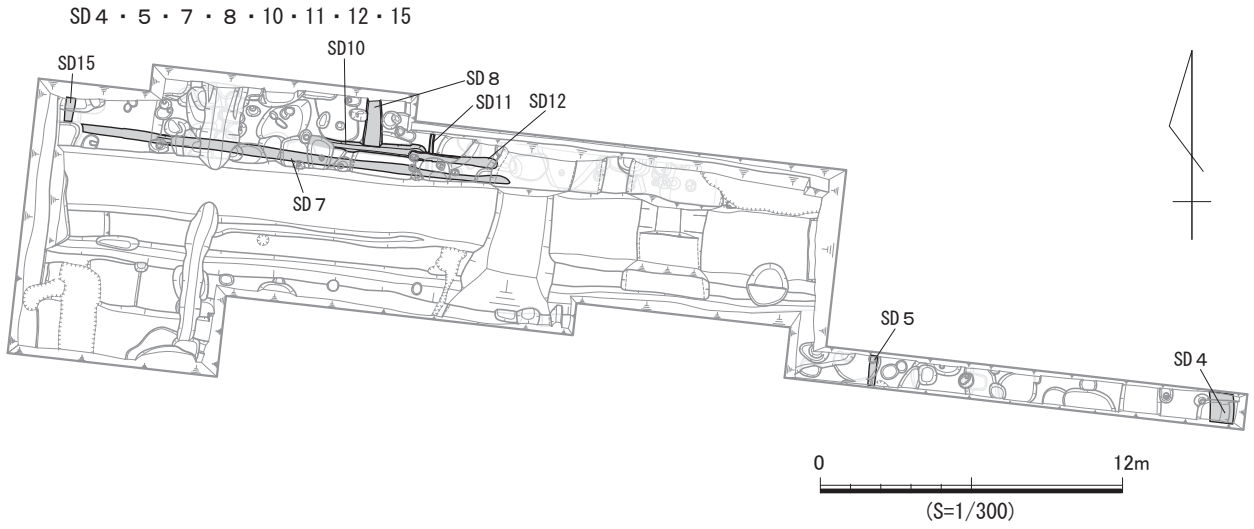
埋土 1層に暗灰黄色土ブロックが含まれることから、人為的に埋め戻された可能性がある。その下層は粘土層になっている。

出土遺物 中世遺物5点、中近世遺物6点が出土した。出土遺物の最新型式である古瀬戸中期壺又は瓶1点は、4層から出土した。

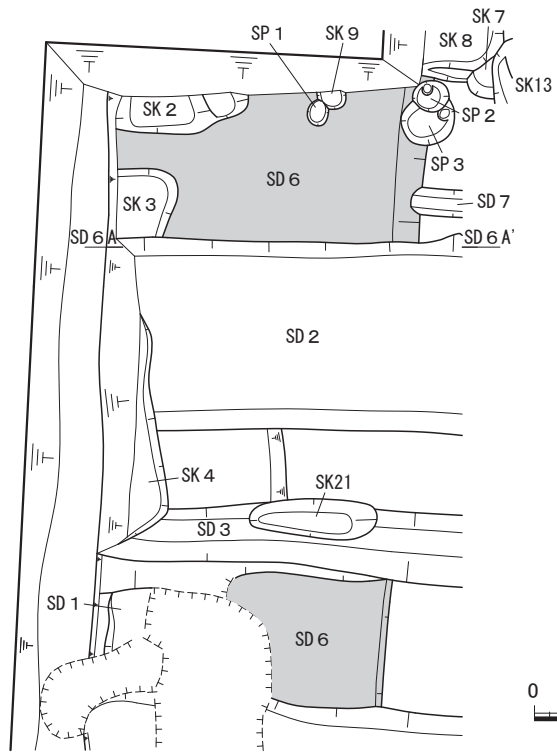
時期 掘削時期は最新型式の遺物の時期から14世紀前葉～中葉と考えられるが、埋没時期は本遺構に切られるSK80の所属時期（15世紀後葉）以前である。

（2）土坑

SK10（図15）

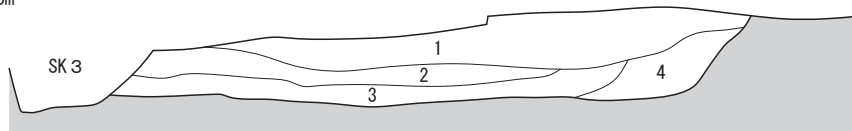


SD 6



SD 6 A
5.40m

SD 6 A'



- 1 5Y4/1 灰色土 しまりあり 粘性なし 炭化物・焼土少量含む
- 2 7.5Y4/1 灰色粘質土 しまりあり 炭化物・焼土少量含む
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色シルト しまりややあり 粘性なし
- 4 7.5Y5/1 灰色土 しまりあり 粘性なし

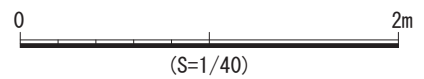


図12 溝状遺構遺構図(4)

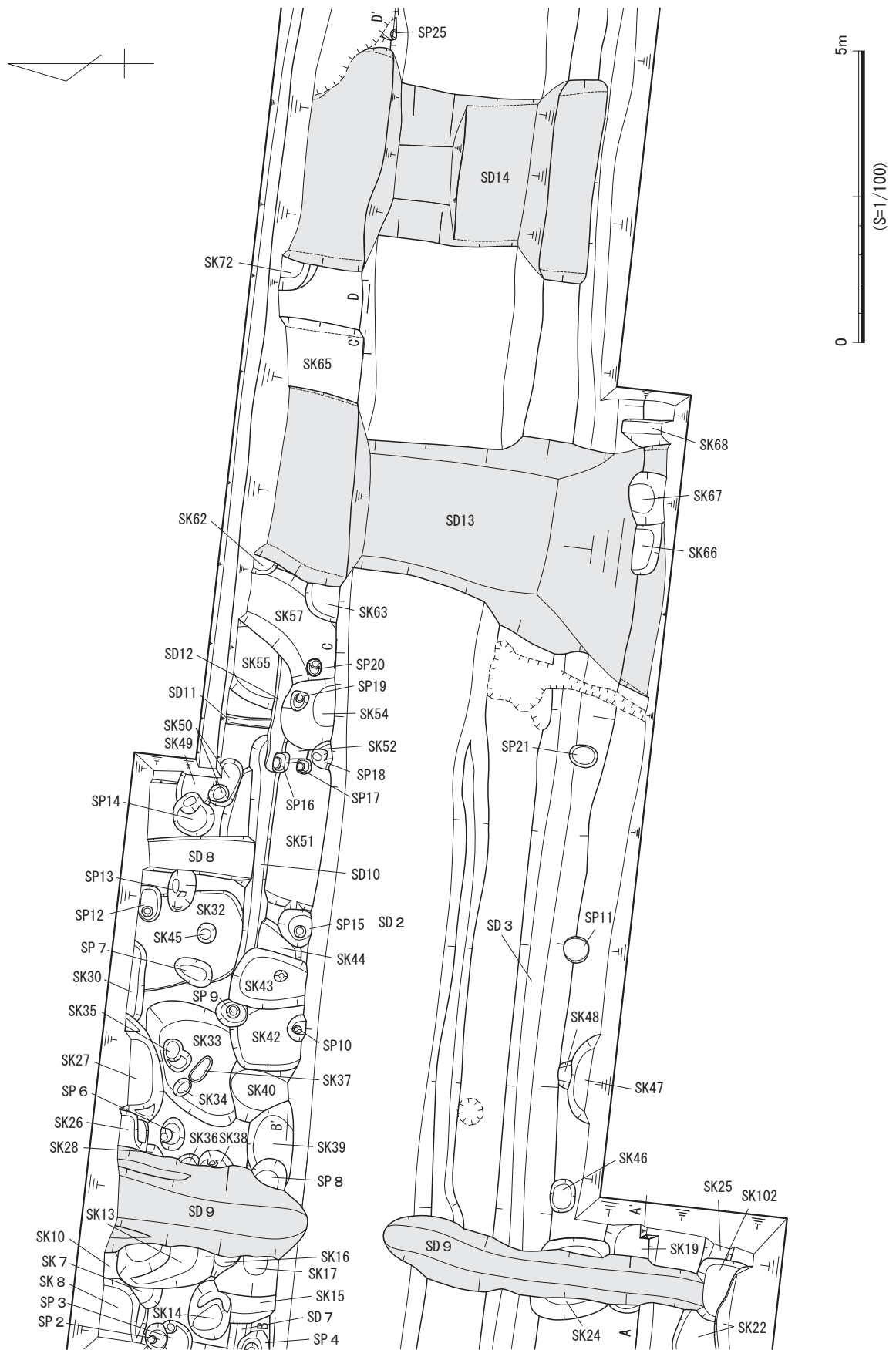
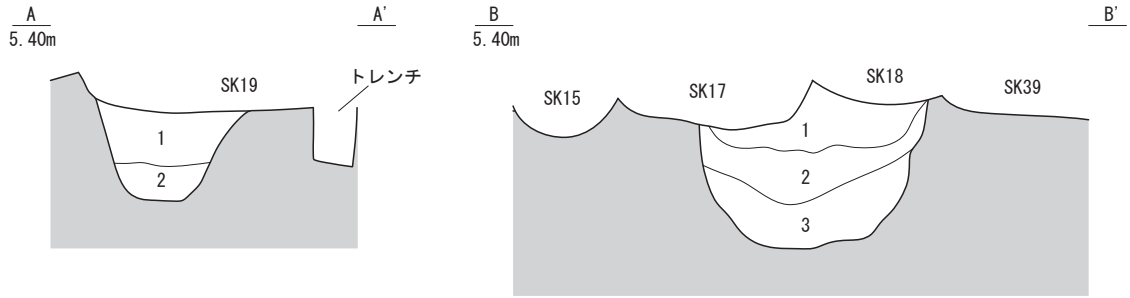


图 13 沟状遺構遺構圖 (5)

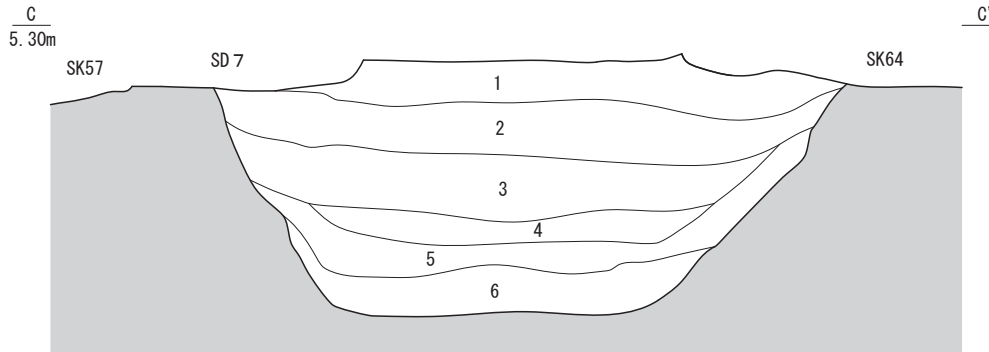
SD9



- 1 10Y4/1 灰色粘質シルト しまりややあり
- 2 7.5Y4/1 灰色粘土 しまりなし

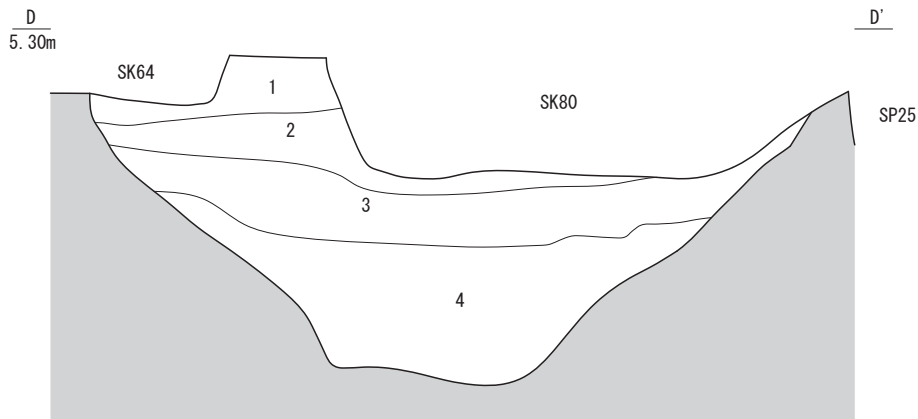
- 1 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性なし 径1cm以下の亜角礫1%含む 炭化物少量含む
- 2 10Y3/1 オリーブ黒色シルト しまりあり 粘性ややあり 炭化物少量含む
- 3 10Y4/1 灰色粘土 しまりなし 炭化物少量含む

SD13



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりあり 粘性なし 径1cm以下の亜円礫3%含む 炭化物少量含む
- 2 5BG4/1 暗青灰色粘質土 しまりややあり
- 3 10GY4/1 暗緑灰色粘土 しまりややあり
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまりなし
- 5 7.5GY3/1 暗緑灰色粘土 しまりなし
- 6 5Y4/1 灰色粘土 しまりなし

SD14



- 1 5Y4/1 灰色シルト しまりあり 粘性なし 2.5Y4/2暗灰黄色土ブロック10%含む 鉄分沈着20%あり
- 2 10GY4/1 暗緑灰色土 しまりあり 粘性ややあり
- 3 7.5GY3/1 暗緑灰色粘質土 しまりややあり
- 4 7.5Y2/1 黒色粘土 しまりなし

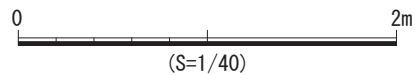
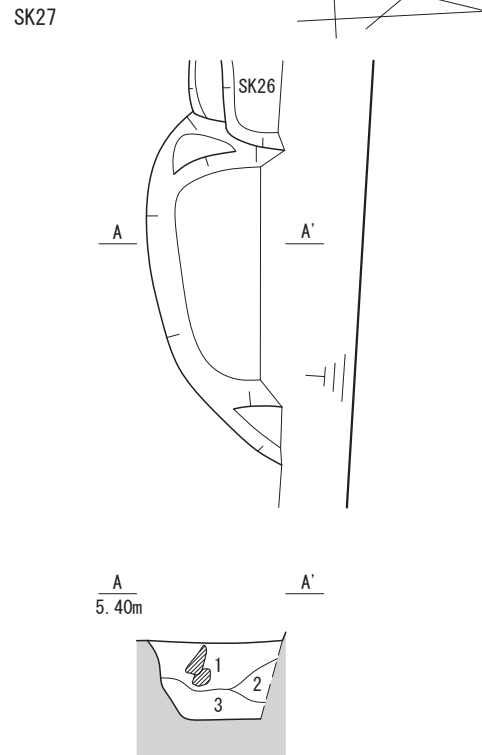
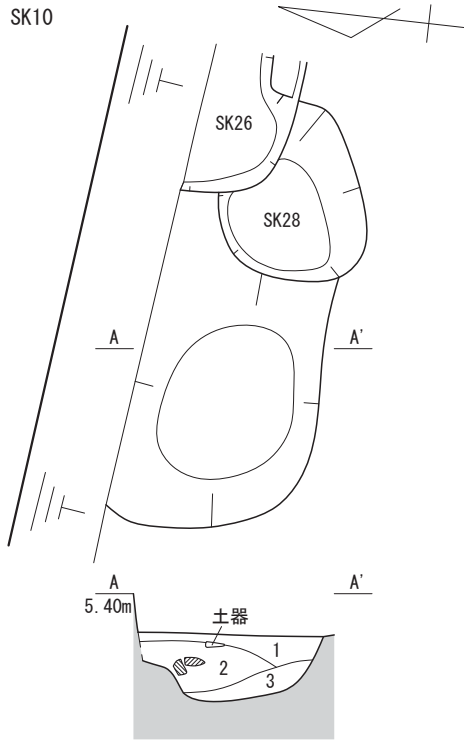


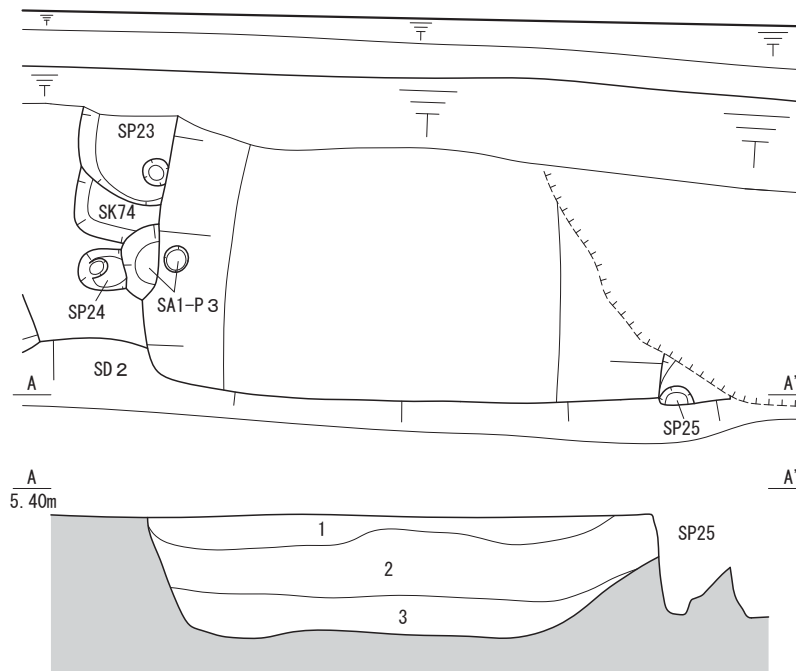
図14 溝状遺構遺構図(6)



- 1 10Y3/1 オリーブ黒色土 しまりなし 粘性ややあり
炭化物・焼土少量含む
- 2 7.5Y2/1 黒色粘質土 しまりなし
径1cm以下の亜角礫3%含む 炭化物少量含む
- 3 10Y4/1 灰色粘質土 しまりなし
径1cm以下の亜角礫5%含む

- 1 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土 しまりややあり
角礫含む 炭化物少量含む
- 2 7.5Y2/1 黒色粘質土 しまりなし 炭化物少量含む
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし
径1cm以下の亜円礫3%含む 炭化物少量含む

SK80



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色土 しまりあり 粘性なし 10YR2/3黒褐色土ブロック3%含む
- 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性なし 5Y4/2灰オリーブ色土ブロック10%含む
植物片少量含む 鉄分沈着40%あり
- 3 10Y4/1 灰色粘質シルト しまりややあり 鉄分沈着40%あり

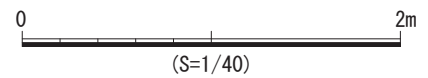


図15 SK10・27・80遺構図

検出状況 A 2～3グリッドに位置する。IV層上面で検出した。炭化物を含む黒褐色土の範囲を検出した。SK26・28に切られる。

規模・形状 長軸長1.81m以上、短軸長0.91m以上、最大深0.38mである。掘方の平面形は、確認できる範囲から楕円形である。底面は北に向かってやや下る。掘方の断面形は、北辺は傾斜が強くわずかに開いた後、緩やかに立ち上がる。南辺は傾斜が強く、わずかに開く。

埋土 3層に分層した。1層には炭化物や焼土、2・3層には全体に垂角礫を含む。

出土遺物 古代以前の遺物1点、中近世遺物11点、近世遺物29点、近代遺物1点、瓦1点が出土した。うち、近代遺物は1層から出土した。埋土の様子や多数の遺物が散在して出土したことから、廃棄土坑と考えられる。

時期 出土遺物の最新型式から、明治時代前期である。

SK27 (図15)

検出状況 A 3グリッドに位置する。III層を掘削後、炭化物や径5cm以下の礫を含む黒色粘質土の範囲を検出した。IV層上面で検出した。SK26に切られる。

規模・形状 長軸長1.91m以上、短軸長0.60m以上、最大深0.47mである。掘方の平面形は、確認できた範囲から楕円形である。掘方の断面形は逆台形であり、底面はほぼ平坦である。底面から0.2m上の掘方西壁に幅0.1m、掘方東壁に幅0.2mの段を持つ。

埋土 3層に分層した。埋土の上部に径0.2m以下の垂角礫を含む。埋土は全体的に粘性があり、炭化物を含む。

出土遺物 古代以前の遺物1点、中世遺物3点、中近世遺物4点、近世27点、近代遺物2点、時期不明1点、その他4点が散在して出土した。近代遺物は、1層と3層から出土した。

時期 出土遺物の最新型式から、明治時代前期である。

SK80 (図15)

検出状況 B 6・7グリッドに位置する。IV層上面で検出した。検出当初は、SD2を跨ぐ溝状遺構の可能性があったが、SD2の南側では本遺構を検出できなかったことから土坑とした。SK77、SP23など多数の遺構に切れ、SD14を切る。

規模・形状 長軸長2.68m以上、短軸長1.33m以上、最大深0.50mである。平面形は、遺構の北端が発掘区外にあり、東側と南側が攪乱やSD2に切られるため不明である。底面はほぼ平坦である。掘方の断面形は逆台形であるが西壁が強く、西壁は緩やかである。

埋土 3層に分層した。1・2層にブロック状の土が混じることから、人為的に埋められた可能性がある。

出土遺物 古代以前の遺物2点、中世遺物2点が散在して出土した。中世遺物は山茶碗1点と大窯第1段階の卸皿1点(133)で、いずれも2層から出土した。

時期 出土遺物の最新型式から、15世紀後葉以降である。

SK78 (図16)

検出状況 C 7グリッドに位置する。SD2の南壁際で検出した。SD2・3、SK81などに切られる。本遺構の埋土は水を含むと脆く、底面が現地表面から2mを超え安全管理上完掘できなかった。

規模・形状 長軸長1.72m、短軸長1.64m、最大深0.81mである。平面形は、円形である。底面は、ほぼ平坦である。東・西・北壁の傾斜は強く、わずかに開く。

埋土 6層に分層した。埋土の上面で、L字状に並ぶ3本の杭を確認した。本遺構が埋没後に打ち込まれたと考えられるが、性格は不明である。埋土は全体的に粘性の高い土であり、水平に堆積する。

遺物出土状況 古代以前の遺物1点、中世遺物25点、中近世遺物9点が出土した。遺物の大半が1層から出土した。遺物の時期がまとまっており、一括性が高い。

時期 出土遺物の時期から、12世紀中葉である。

SK84 (図16)

検出状況 C7・8グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK82(近世)を切る。

規模・形状 長軸長0.33m以上、短軸長0.41m、深さ0.12mである。平面形は楕円形で、底面はほぼ平坦である。壁面の傾斜は強く、わずかに開く。

埋土 灰色粘質土の単層である。

遺物出土状況 遺物は1点のみである。土師器皿C1類1点(134)が、土坑底面に接して正位で出土した。

時期 本遺構はSK82を切るが、直上のIII層も近世と考えられるため所属時期は近世であり、土師器皿は混入と考えたい。

SK88 (図16)

検出状況 C・D8グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK91に切られ、SK87・SP27を切る。

規模・形状 長軸長2.41m、短軸長1.11m以上、最大深0.12mである。本遺構の南北端は発掘区外であるが、平面形は楕円形と考えられる。掘方の断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層であり、植物片を含む。

出土遺物 中世遺物9点、中近世遺物15点が出土した。出土遺物の最新型式は、土師器皿C2類である。

時期 遺構の切り合い関係から、古瀬戸後IV期古段階の卸目付大皿が出土したSP27以降に位置づけられること、土師器皿C2類を含むことから、15世紀中葉以降と考えられる。

SK95 (図17)

検出状況 D9グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK96に切られ、SK92・94を切る。

規模・形状 長軸長1.56m、短軸長1.15m以上、最大深0.11mである。遺構の南北端は発掘区外であるが、平面形は円形と考えられる。底面はほぼ平坦である。西壁の傾斜は、緩やかに立ち上がる。

埋土 単層である。

出土遺物 中世遺物9点、中近世遺物19点が出土した。出土遺物の最新型式は、古瀬戸後IV期古段階の四耳壺(137)である。

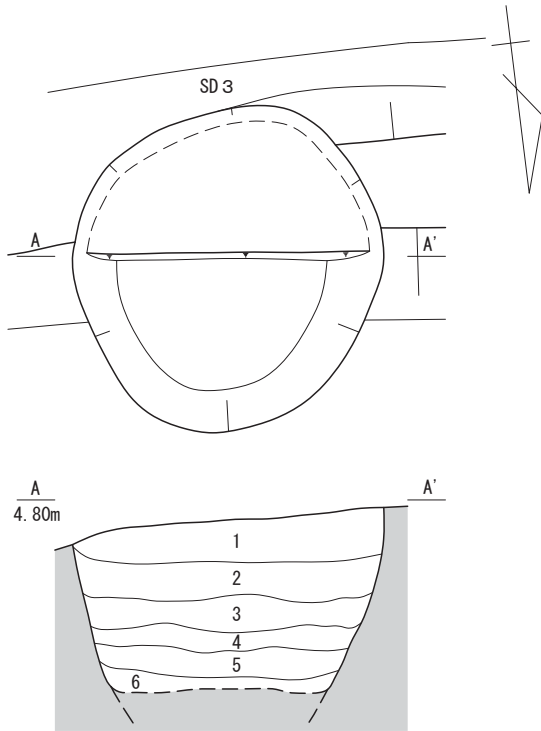
時期 出土遺物の最新型式から、15世紀中葉以降である。

SK97 (図17)

検出状況 D9グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK98に切られる。

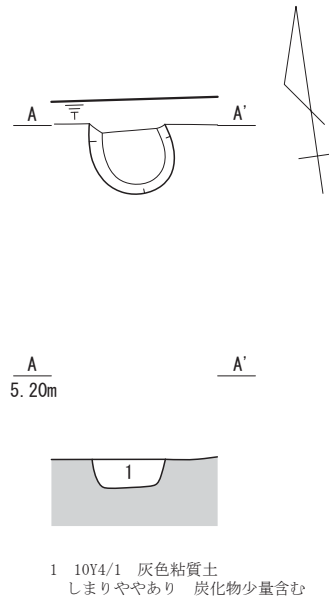
規模・形状 長軸長1.11m以上、短軸長0.81m以上、最大深0.07mである。SK98に切られ、南端は発掘区外であるが、平面形は楕円形である。掘方の断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

SK78



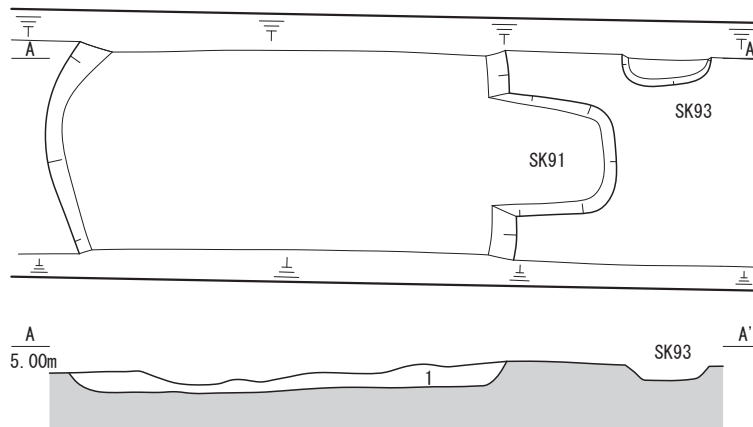
- 1 10BG5/1 青灰色シルト しまりあり 粘性なし
- 2 5BG5/1 青灰色粘質土 しまりややあり
- 3 5Y2/1 黒色粘土 しまりなし
- 4 10G4/1 暗緑灰色粘土 しまりなし
- 5 7.5Y2/1 黒色粘土 しまりなし
- 6 10GY4/1 暗緑灰色粘質シルト しまりなし

SK84



- 1 10Y4/1 灰色粘質土 しまりややあり 炭化物少量含む

SK88



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト しまりややあり 粘性ややあり 炭化物少量含む 植物片少量含む

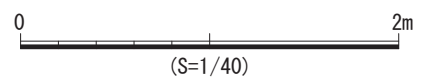


図16 SK78・84・88遺構図

埋土 単層である。

出土遺物 中世遺物4点、中近世遺物4点が出土した。うち時期の判別できる遺物は、山茶碗第5又は6型式と常滑産水瓶である。

時期 出土遺物の時期幅は限られるが点数が少ないため、中世前期に位置付けておきたい。

SK98 (図17)

検出状況 D9・10グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SK97・99を切る。

規模・形状 長軸長2.14m以上、短軸長0.80m以上、最大深0.19mである。確認した範囲から、平面形は楕円形である。掘方の断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層である。

出土遺物 中世遺物6点、中近世遺物11点が出土した。出土遺物の最新型式は、土師器皿C2類である。

時期 出土遺物の最新型式から、15世紀中葉以降と考えられる。

SK100 (図17)

検出状況 D10グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SP30を切る。

規模・形状 長軸長1.04m以上、短軸長1.69m、深さ0.14mである。遺構の南北端は発掘区外のため、平面形は不明である。掘方の断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

埋土 単層であり、下層に植物片を含む。

出土遺物 中世遺物5点、中近世遺物7点、時期不明1点が出土した。出土遺物の最新型式は、古瀬戸後IV期新段階である。

時期 出土遺物の最新型式から、15世紀後葉以降である。

SK101 (図17)

検出状況 D10・11グリッドに位置する。IV層上面で検出した。埋土の上面に炭化物を含み周辺よりも土色が暗いため、明瞭に検出できた。SD4に切られ、SP29を切る。

規模・形状 長軸長1.61m以上、短軸長0.70m以上、最大深0.24mである。遺構の南北・東端は発掘区外のため、平面形は不明である。掘方の断面形は逆台形であるが、西壁の傾斜が強くわずかに開き、東壁は緩やかに立ち上がる。掘方の東側に平坦面をもち、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層の中央部に窪みがある。2層に植物片を含む。

出土遺物 中世遺物6点、中近世遺物11点、土製品1点が出土した。出土遺物の最新型式は、大窯第2段階である。

時期 出土遺物の最新型式から、16世紀前半以降と考えられる。

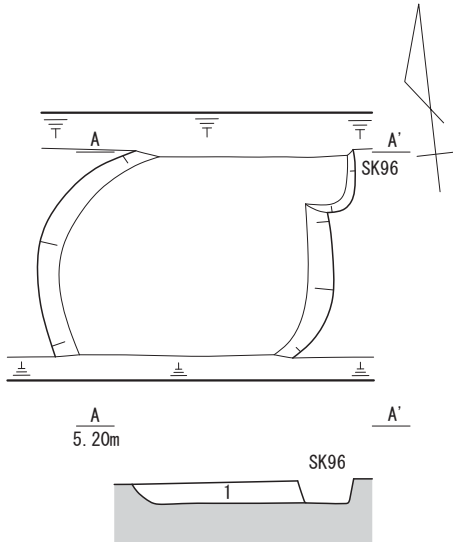
(3) 柱穴

SP21 (図18)

検出状況 C4グリッドに位置する。IV層上面で検出した。SD3を完掘後、SD3の南壁で立ち上がりを確認し、検出した。SD3に切られる。

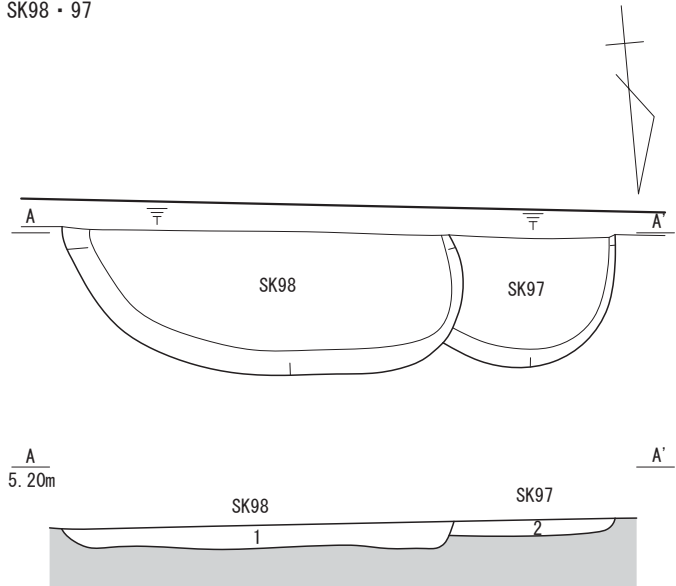
規模・形状 長軸長0.49m、短軸長0.38m、深さ0.55mである。平面形は楕円形である。底面はほぼ平坦である。壁面は、垂直に立ち上がる。

SK95



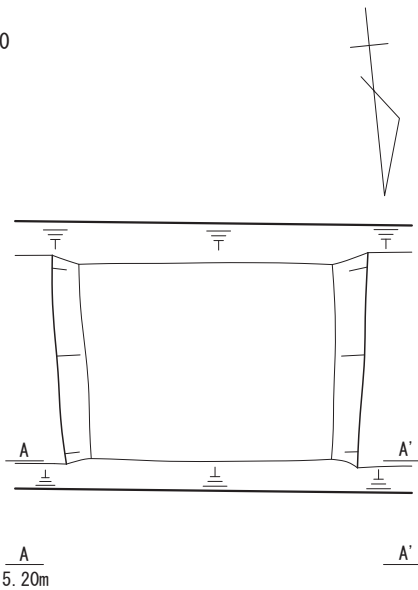
- 1 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
しまりややあり 鉄分沈着20%あり

SK98・97



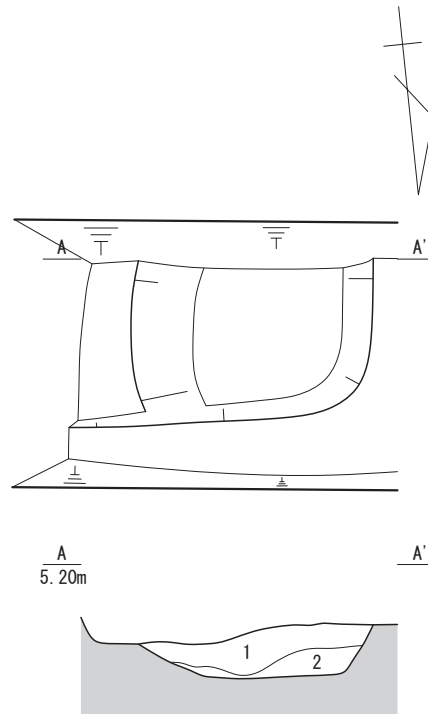
- 1 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土 しまりややあり 鉄分沈着10%あり
2 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 しまりややあり 鉄分沈着5%あり

SK100



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
しまりややあり 植物片少量含む

SK101



- 1 10Y5/1 灰色粘質土 しまりあり 炭化物少量含む
2 5Y4/1 灰色粘土 しまりなし 植物片10%含む

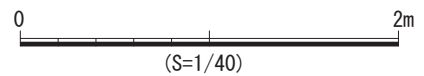


図17 SK95・97・98・100・101遺構図

埋土 3層に分層した。1層は柱痕跡、2・3層は柱掘方埋土である。1層中には直径0.1mの柱根が残存し、その周辺から垂角礫3個と石鉢(58)が出土した。SD3に切られているため判然としないが、これらは基礎を固めるための措置である可能性もある。本遺構は単独で検出し、周囲に柱穴が並ばないことから遺構の性格は不明である。

遺物出土状況 石鉢・柱以外に、遺物は出土しなかった。

時期 SD3との切り合い関係から、近代以前である。

(4) 柵

SA1 (SA1-P1、SA1-P2、SA1-P3、SA1-P4 (図19))

検出状況 B6グリッド、SD12の延長線上(約4m東)に位置する。IV層上面で検出した。P2はSK72、SK73に切られ、P3はSK77に切られる。4基の柱穴が直線上に並び、すべての柱穴において柱痕跡を確認したことから整理段階で柵と判断した。

規模・形状 東西長3.65mで、柱間はP1-P2が1.2m、P2-P3が1.4m、P3-P4が1.0mである。主軸方位はN-85°-Wである。柱穴掘方の平面形は、円形又は楕円形である。P2・4の柱痕跡は、西側にやや傾斜する。柱痕跡の径は、P1・2が0.1m、P3が0.16m、P4が0.18mである。P1・2・4は底面の標高はほぼ同じだが、P3は他の柱穴と比べて標高が低い。

出土遺物 P1から近世遺物1点、P4から中世と近世遺物が各1点出土した。

時期 SD12の主軸方位(N-84°-W)とほぼ一致するため、明治時代前期と考えられる。

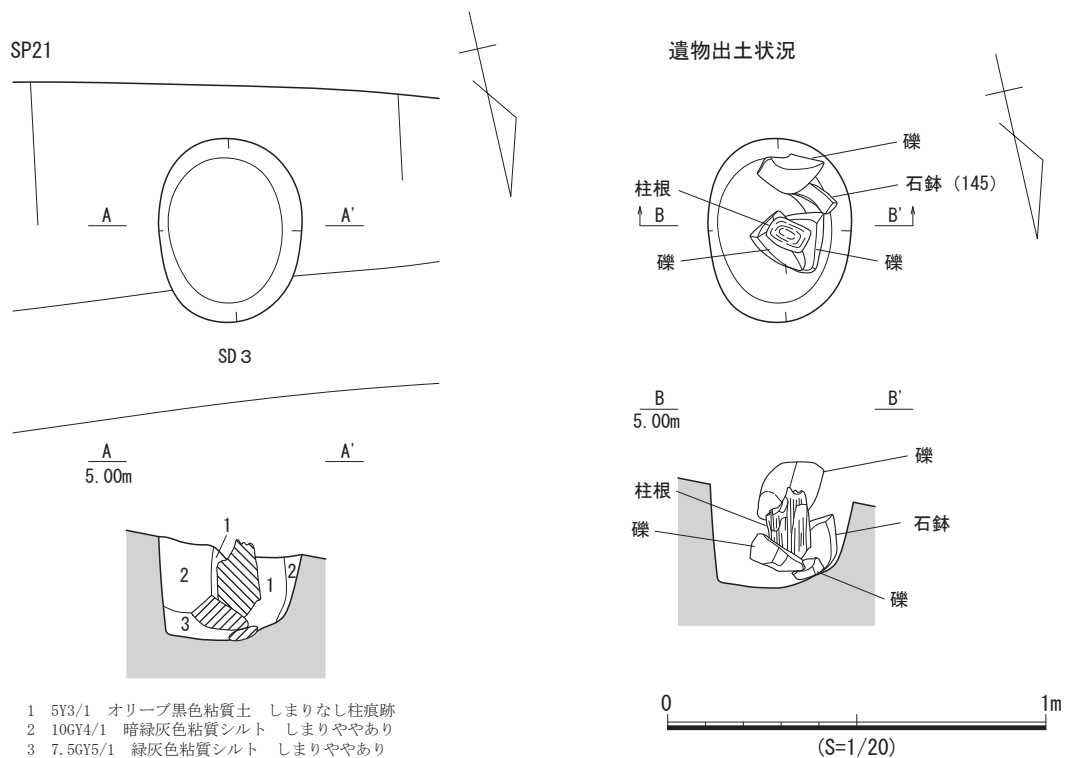


図18 SP21遺構図

SA 1

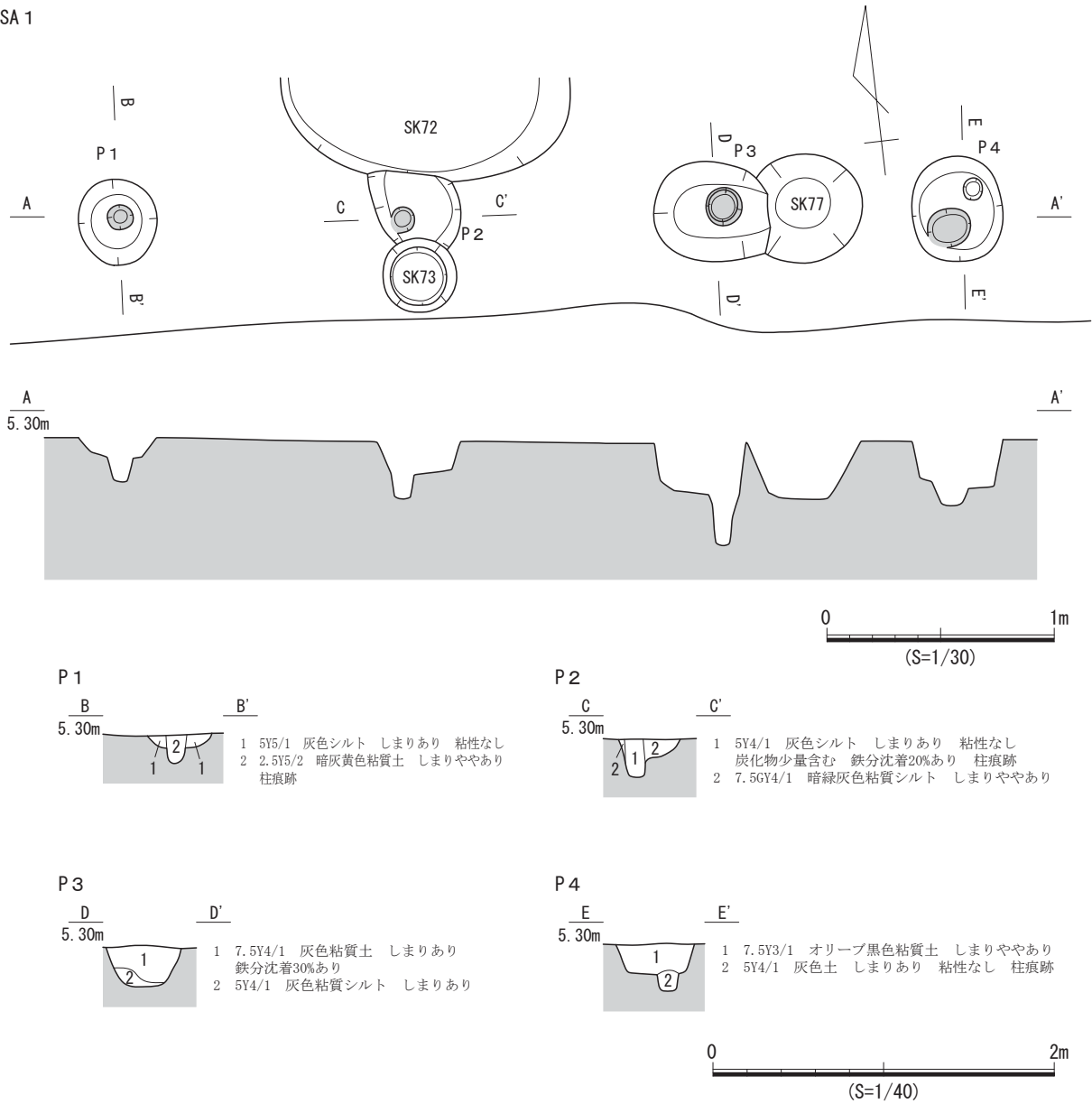
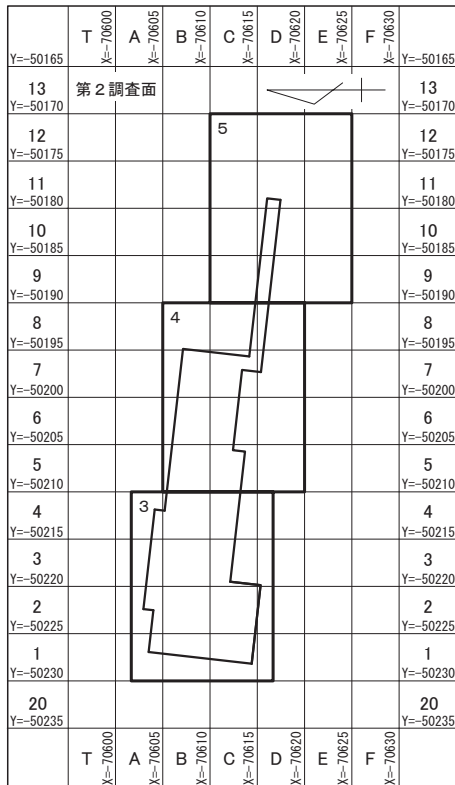
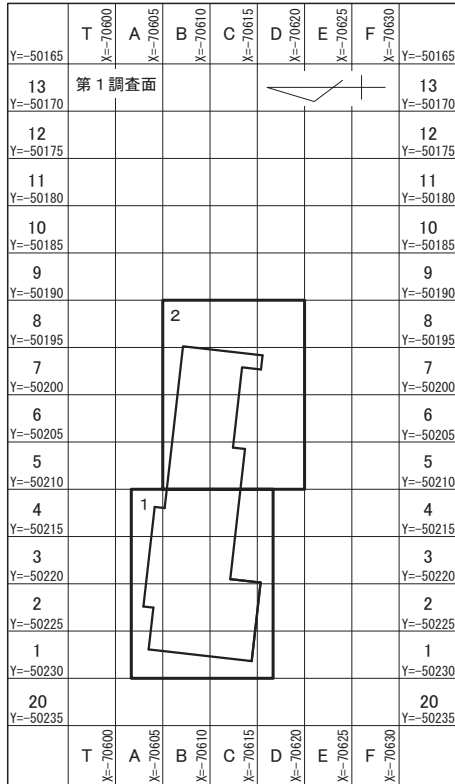


図19 SA 1 遺構図



<図 21 ~ 25 の凡例>

- 遺構上端線・中端線
- 遺構下端線
- 遺構消滅上端線・中端線
- 遺構消滅下端線
- 発掘区法面
トレンチ
- 攪乱
- 計曲線
- 主曲線

<遺構名の表記>

- 灰色
- 発掘区の完掘時までには消滅した遺構名

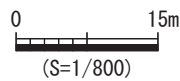


図20 発掘区全域図割付図

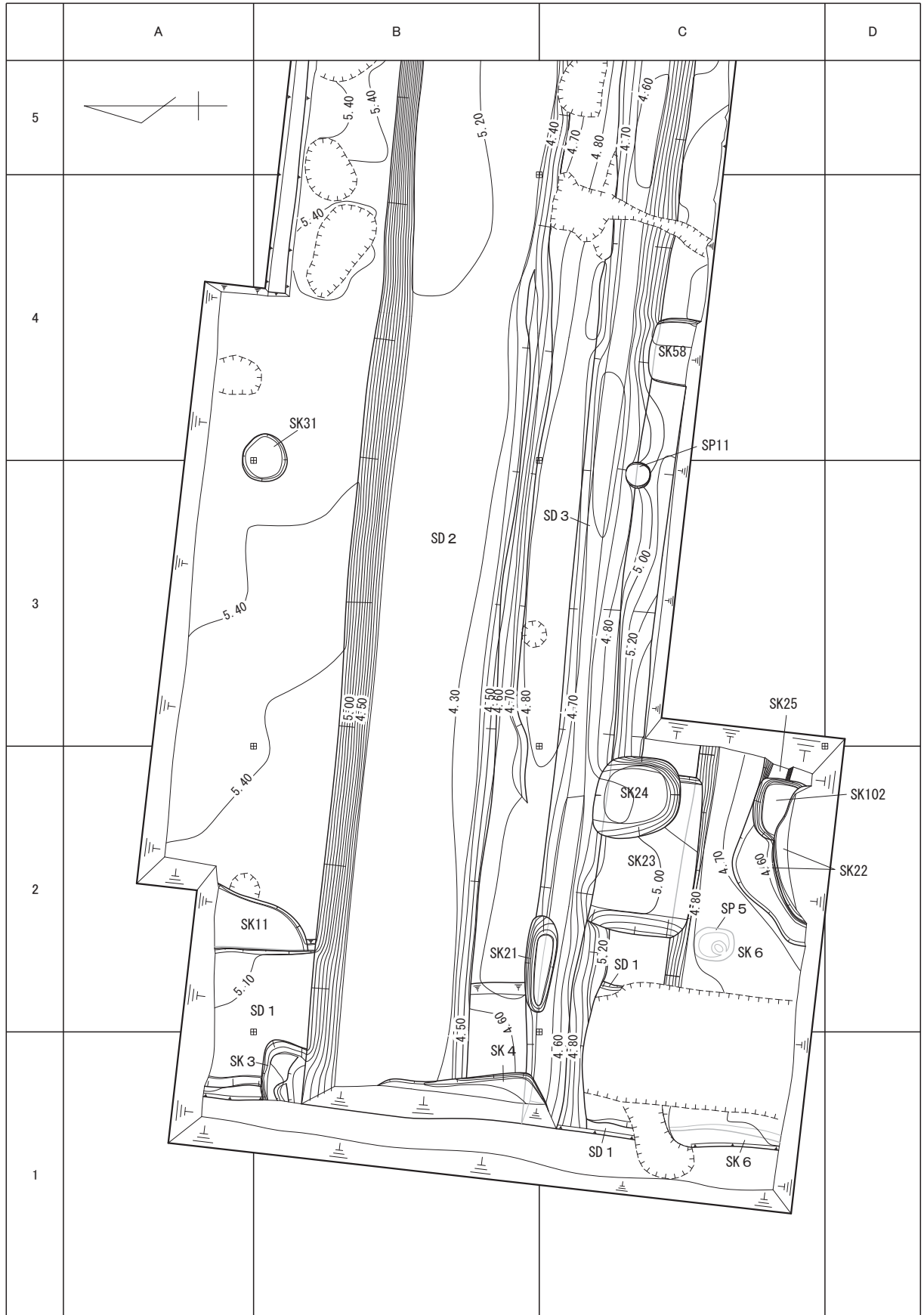


図21 発掘区全域図分割図(1)

(S=1/100)

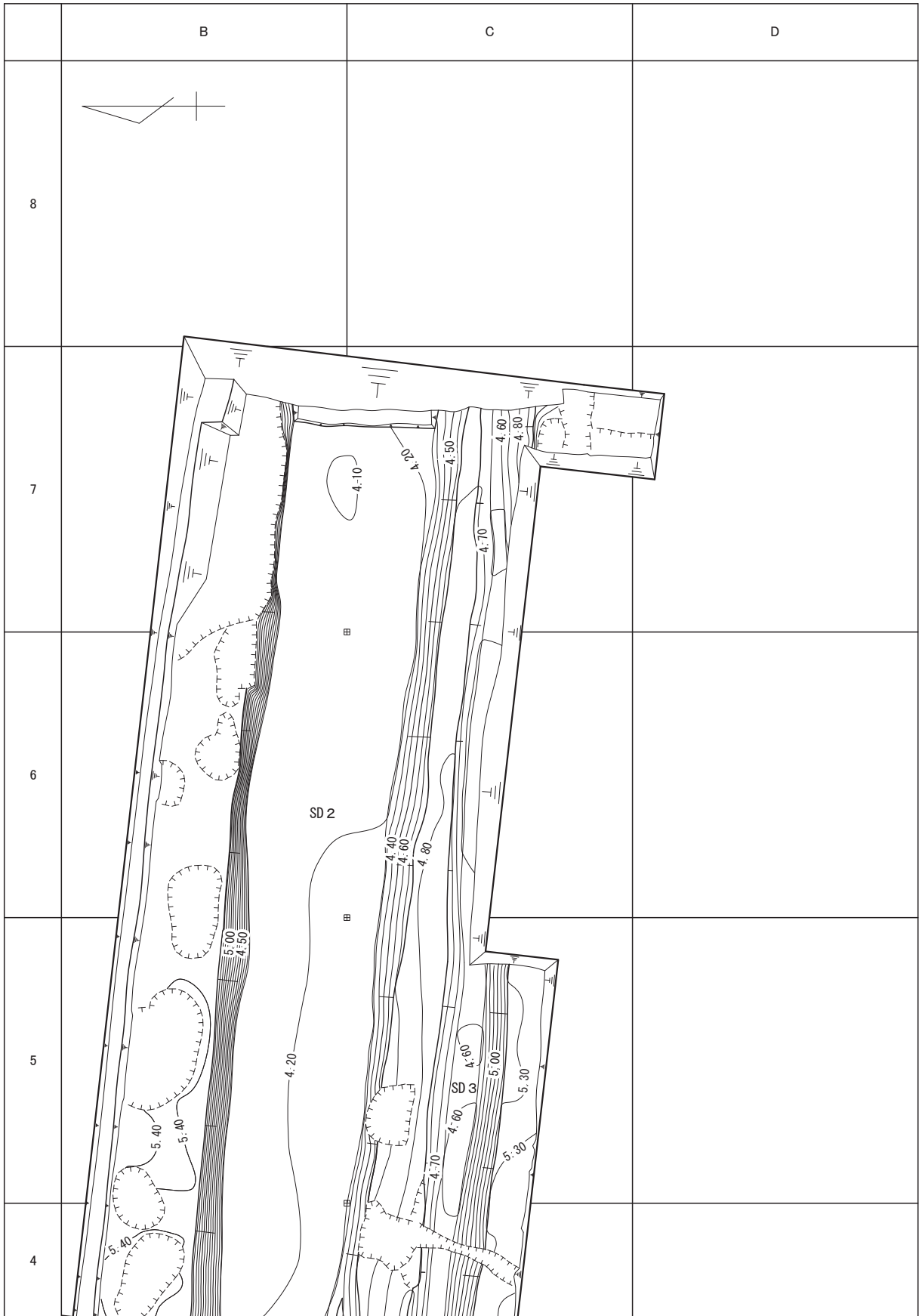


图22 発掘区全域図分割図 (2)

(S=1/100)

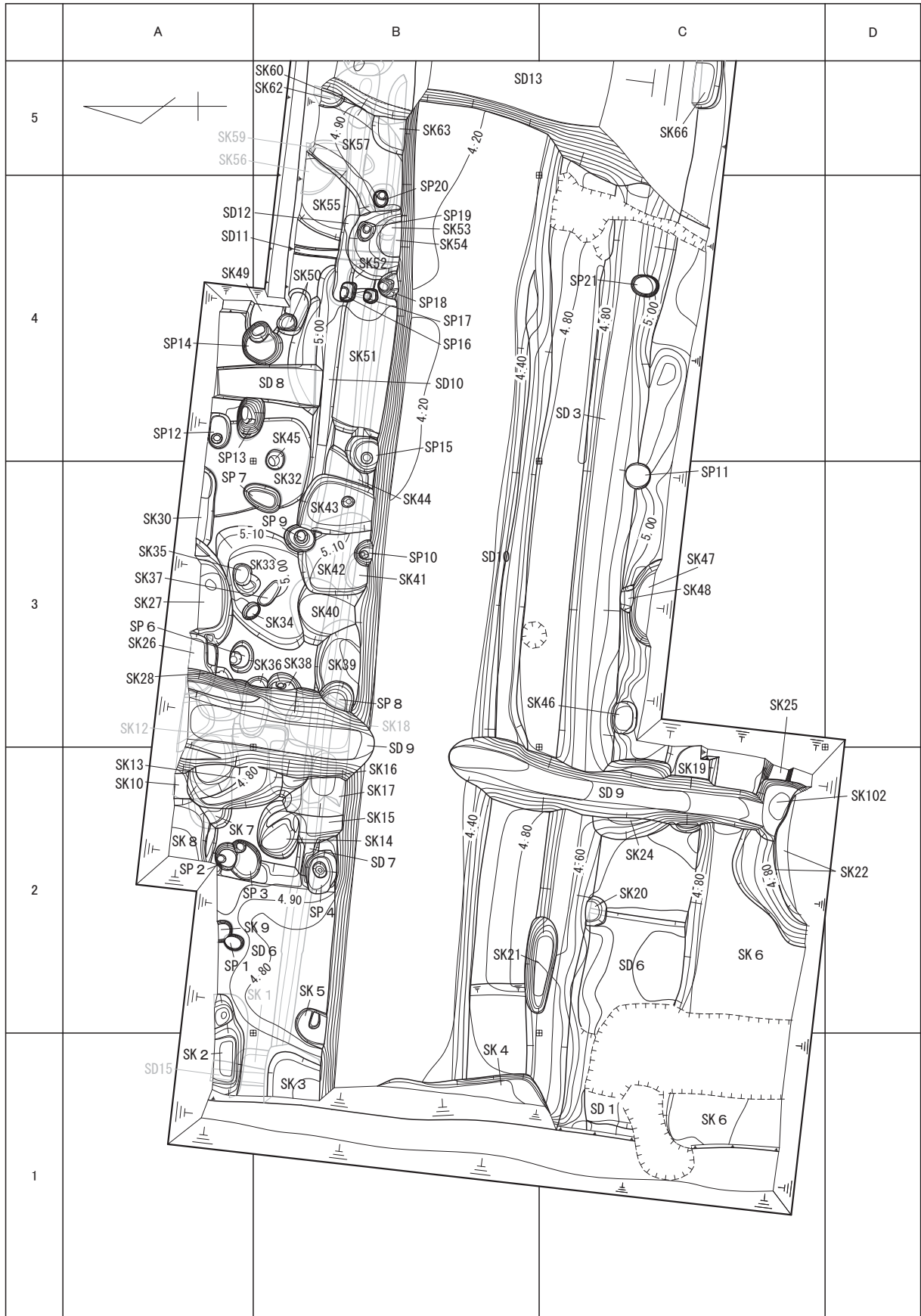


図23 発掘区全域図分割図 (3)

(S=1/100)

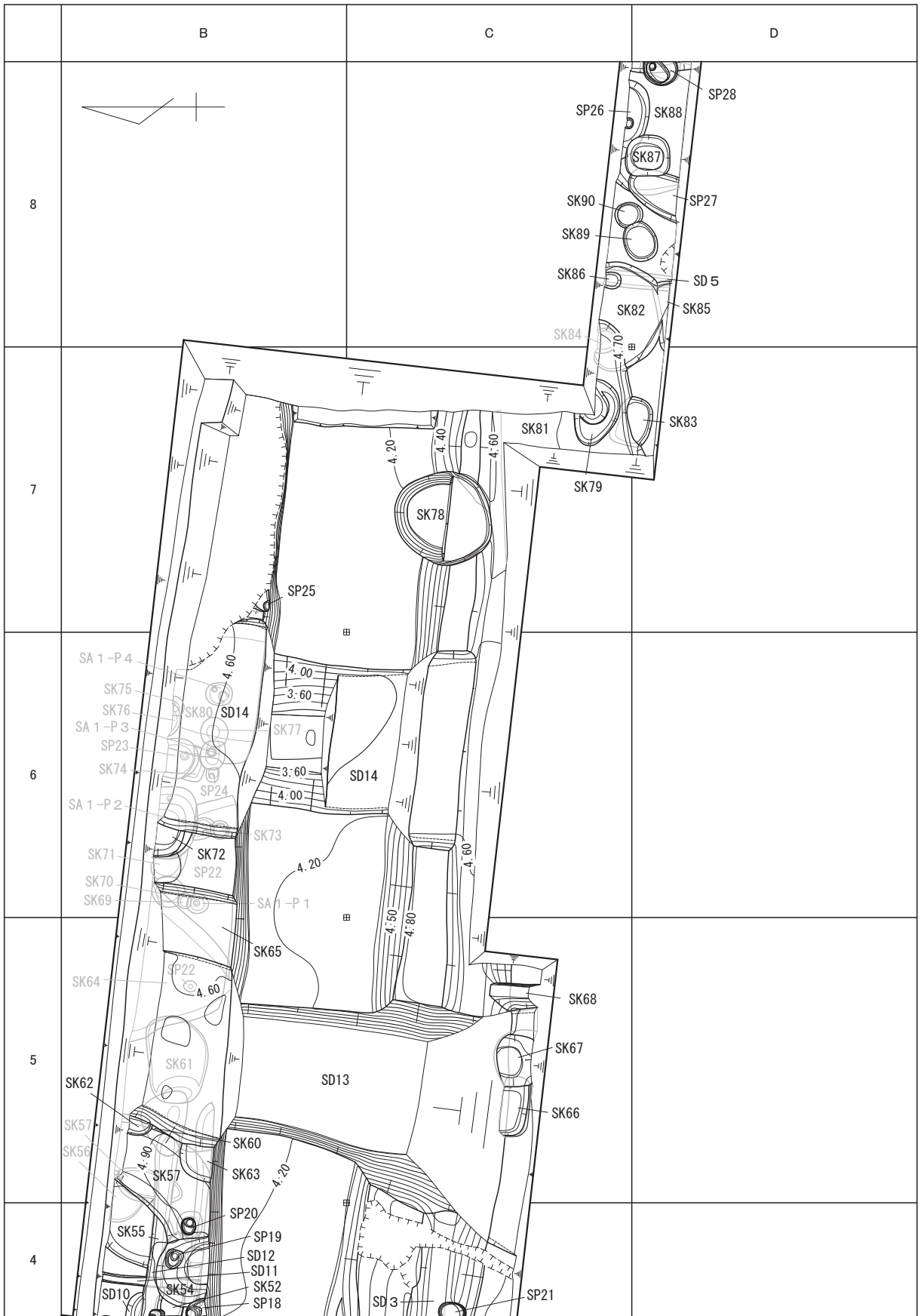
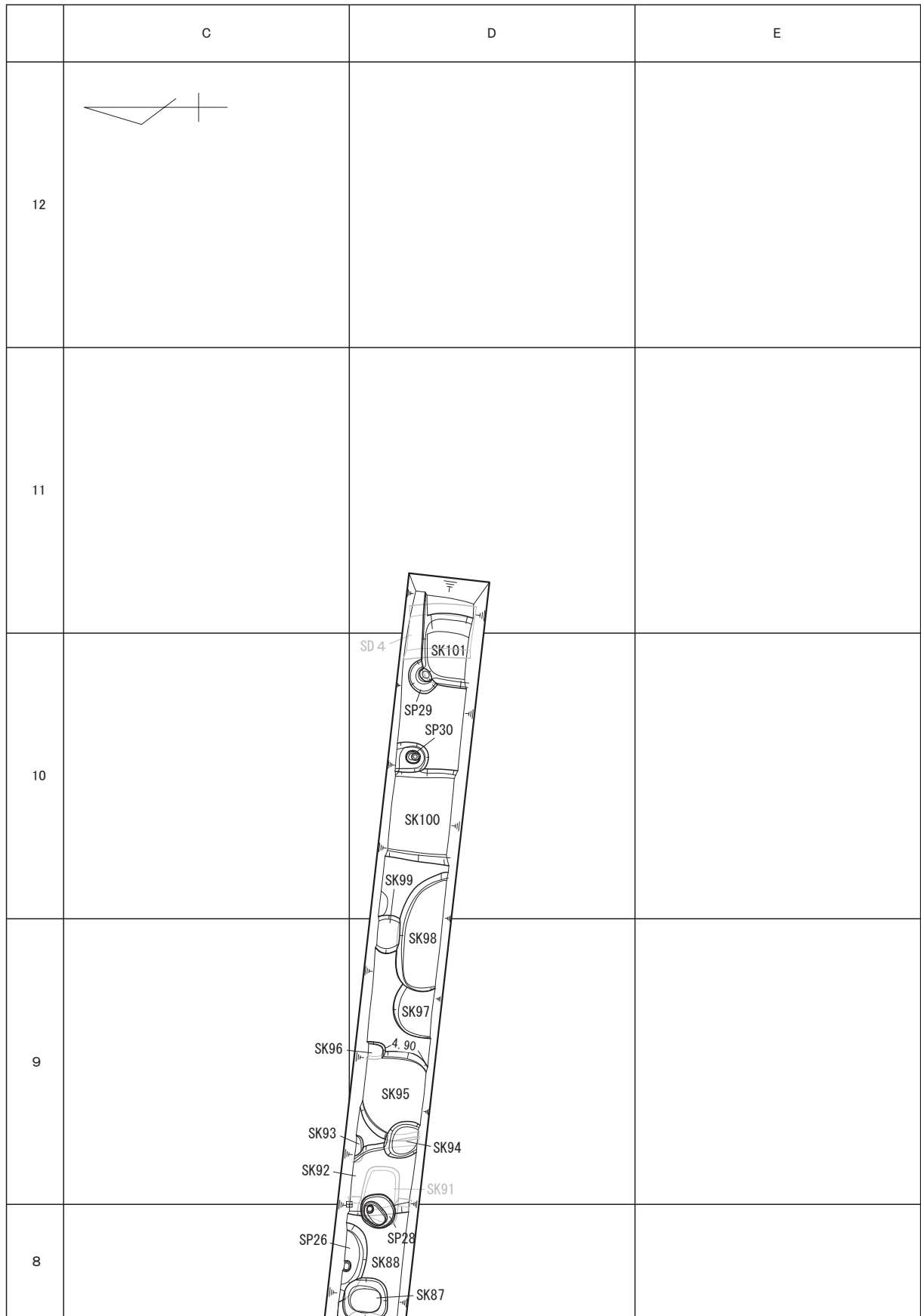


图24 発掘区全域図分割図（4）

(S=1/100)



(S=1/100)

図25 発掘区全体域分割図(5)

第4節 遺物

1 主要遺構出土遺物

第1項では第3節で説明した遺構から出土した遺物、第2項ではその他の遺構から出土した遺物と遺構外出土遺物をまとめて説明する。ただし、各遺物の観察内容を表11～16、主要遺構の遺物出土状況を表17・18に掲載するため、概要を述べるに留める。

(1) 第1調査面

SD2 (図26～29) 中世の遺物には、山茶碗類、古瀬戸、大窯、常滑産陶器、中国産磁器、土師器、土器がある。うち山茶碗は尾張型が主体で、第3型式(1:以下の番号は掲載遺物番号である。)から第6型式まであり、東濃型の大洞東1号窯式1点を含む。古瀬戸は前Ⅱa期の四耳壺(2)・後Ⅲ期の花瓶Ⅲ類(3)・後Ⅳ期新段階の播鉢(4)、大窯は第2段階から第3段階にかけての遺物が認められる。常滑産陶器のうち甕は8型式(5)と12型式(6)である。中国産磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5a類(7)・同5b類、白磁碗Ⅳ類(8)である。土師器皿の口縁部は中世前期4点、中世後期から近世16点である。土器は羽釜A3類1点とA4類(9)、茶釜1点である。近世の遺物には、陶器(瀬戸美濃産、常滑産、京都・信楽産、産地不明)と磁器(瀬戸美濃産、産地不明、肥前産)、土器、瓦がある。瀬戸又は美濃産陶器は登窯期の全時期に渡って認められる。器種には筒形碗(10)、箱形湯呑(11)、輪禿皿(12)、摺絵皿(13)、染付皿(14)、大皿(15)、鉄絵鉢(16)、練鉢(17・18)、植木鉢(19・20)、播鉢(21～27)、半胴(28)、徳利(29)、耳付鍋(31)、蓋及び蓋物(30・32)などがある。うち、登窯第10小期の17は底部外面に「天保六年」と墨書された紀年銘資料である。常滑産陶器には、17世紀前半から19世紀前半までの赤物深鉢(33)・くど(34)・甕(35)・土樋(36)、そのほかに京都・信楽産の碗(37)、産地不明の端反碗(38)と小皿(39)がある。磁器は肥前産が多くⅢ期からⅤ期まで認められ、器種には皿(40・41)、壺(42)、神酒徳利(43)、香炉(44)、蓋(45)などがある。土器には、焼塩壺(46)とホウロクがある。46は輪積み成形によるもので内面が平滑である。近代の遺物には、瀬戸美濃と常滑産の陶磁器があるが、ここでは汽車土瓶(47)を掲載した。底部内面に使用痕跡が認められること、発掘区は大垣駅から直線距離で約600m離れ、販売業者の所有地ではないことから、持ち帰って再利用した可能性がある。48は軒棧瓦。49は杭で、留杭の代表的なものを図示した。枝を切り落とし、末端を水平方向に切断し、先端を3方向から削り出している。

SD3 (図30・31) 中世の遺物には、山茶碗類、古瀬戸、大窯、土師器があり、50は古瀬戸後Ⅳ期新段階の播鉢、51は土師器皿A3類である。近世の遺物には、瀬戸又は美濃産陶器の丸碗(52)、端反碗(53・54)、端反湯呑(55)、摺絵皿(56)、練鉢(58)、火鉢Ⅱ類(59)、盤(60)、灯明皿(57)、筒形香炉(61)があり、登窯第5又は6小期から第11小期までの時期幅がある。なお、59は底部中央を穿孔し、植木鉢に転用している。常滑産陶器は真焼甕、赤物甕・くど(62)・土樋があり、17世紀から19世紀中葉の幅がある。磁器は瀬戸美濃産丸碗(63)、肥前産小碗(64～66)・猪口(67)・小皿(68)・大皿(69)・蓋(70)があり、うち69は色絵製品である。71は軒棧瓦。48よりも巴文の尾がやや長く殊文が1つ多いが、ともにキラコを使用する。

SK4 (図31) 72は中国産の可能性のある天目茶碗であり、注目される。73・74は漆器蓋、75～77は漆器椀。いずれの漆器も内面は赤色漆、外面は黒色漆が塗られている。73～76の文様は草花文・丸紋であるが、77は体部上半が欠損するため文様の全容は不明である。これらの漆器は、近代の遺構から一括出土し

たものの、77は高台内部の削りが高台半ばに達し、腰の張りが弱い器形をもつことから、少なくとも18世紀後半には遡ると考えられる。なお、77について塗膜分析を実施（分析結果は第4章第3節に掲載）した。78～85は白木の片口箸。使用により角がとれて断面円形のもの（78・83）と、箸上部はやや幅広の断面六角形で先端部を断面方形に加工したもの（78・83以外）とが混在する。86は箸よりも幅広で薄いため、棒状木製品とした。

SK22（図32） 87は尾張型の片口鉢の第5型式。88は茶釜。体部内面のハケ調整が顕著なため、鏝を持たない可能性がある。近世の遺物には、瀬戸又は美濃産陶器の丸碗（89）、土瓶（90）、徳利（91）、常滑産陶器の真焼甕（92）がある。うち90は底部中央を穿孔し、植木鉢に転用している。94は産地不明の色絵製品の蓋で、文様の類似性から184とセットになる可能性がある。95は肥前磁器の瓶。96は箱庭道具（五重塔）。型合わせによる中実の陶磁製人形で、赤色顔料が残る。97は全黒・無文の漆器碗で、腰部の張りが強い器形から19世紀前半に位置する。

SK25（図32） 93は常滑産陶器の土樋。最大径が26.6cmを測り、19世紀後半に位置する。

（2）第2調査面

SD4（図33） 99は大窯第2段階の丸皿である。

SD6（図33） 100は尾張型山茶碗の第4型式の小碗、101は古瀬戸後Ⅲ又はⅣ期の壺又は瓶、102は大窯第4段階前半の天目茶碗である。

SD7（図33） 98は瓦当の中心飾りが欠損するが、図示できる軒平瓦は本例のみである。中心飾りは不明であるが、唐草文の内側と外側が同じ方向に巻く。

SD9（図33） 103は常滑産10型式の甕である。

SD13（図33） 中世の遺物には、山茶碗類、古瀬戸、大窯、常滑産陶器、中国産磁器があり、山茶碗の底部は第5型式3点、第6型式1点（104）、大畑大洞4号窯式1点（105）であり、古瀬戸後Ⅲ期の平碗1点、大窯第3段階後半の播鉢（106）2点、常滑産の片口鉢Ⅱ類の10型式（107）がある。中世から近世の遺物には、土師器と土器（ただし、器種不明1点）がある。土師器皿5点のうち口縁部4点を分類すると、B類1点、C2類2点、ロクロ調整1点（108）である。近世の遺物には陶器4点、瓦1点があり、登窯第8小期以降の練鉢1点（109）を図示した。

SD14（図33） 出土遺物10点のうち時期不明な2点を除くと、遺物の所属時期は中世に限られる。山茶碗・古瀬戸中期の壺又は瓶・白磁各1点、土師器4点があり、110は白磁Ⅱ類の碗である。

SK10（図33・34） 灰釉陶器1点を除くと、近世から近代の遺物で占められる。瀬戸美濃産陶器には、丸碗（112）、播鉢（111）、播鉢（113）があり、登窯第5小期から近代までの幅がある。土師器皿10点のうち、口縁部を分類するとC2類2点、ロクロ調整（114・115）6点、分類不明1点である。

SK27（図34） 中世の遺物には古瀬戸後期の祖母懷茶壺（116）がある。近世の遺物には、瀬戸美濃陶器として天目茶碗（117）、丸碗（118）、筒形香炉（119）、汁次の蓋（120）、肥前磁器の碗（121・122）があり、登窯第1又は2小期から近代までの時期幅がある。土師器皿にはC2類（123）3点、ロクロ調整1点（124）、土器には焼塩壺1点（125）がある。125は輪積み成形によるもので、46と比べると体部内面が雑な仕上げである。なお、126は菊丸瓦で、周縁内にポジティブな連弁8枚を配置するもの（以下「菊丸瓦A類」という。）である。127・128は箸。127は使用により断面形が楕円形を呈する。

SK78 (図34) 出土遺物は古代末から中世初頭の遺物である。時期を判別できる遺物には、東濃型山茶碗の第3又は4型式1点及び第4型式1点、尾張型山茶碗の第4型式1点 (129)、土師器は皿A 1 a類1点 (130)。土器は清郷型鍋C 5類1点 (131)、伊勢型鍋A 2類1点、ほか分類不明の鍋類7点である。なお、清郷型鍋は発掘区内で1点のみである。

SK80 (図34) 132は弥生時代中期中葉の壺。丁寧なミガキ調整後、口頸部に直線文を5帯以上施す。大垣市荒尾南遺跡¹⁾の壺A類に相当し、Ⅲ-1期に所属する。弥生土器を除くと、山茶碗1点と大窯第1段階の卸皿 (133) である。

SK84 (図35) 134は土師器皿C 1類である。

SK88 (図35) 出土遺物はいずれも中世の遺物である。時期を判別できる遺物には、東濃型山茶碗の第4型式1点、土師器皿 (口縁部片を分類するとB 1類1点 (135)、B 2類1点、B類4点、C 1類1点、C 2類1点、分類不明4点)、伊勢型鍋A 3類1点がある。

SK95 (図35) 出土遺物はいずれも中世の遺物である。時期を判別できる遺物には、産地不明の山茶碗の第5型式 (136)、尾張型山茶碗の同型式2点、古瀬戸後Ⅲ又はⅣ期の四耳壺 (137)、土師器皿 (口縁部片を分類するとB 2類1点、B類3点、C 1類1点、C 2類1点、分類不明4点) がある。

SK97 (図35) 出土遺物はいずれも中世の遺物である。時期を判別できる遺物には、尾張型山茶碗の第6型式 (138) 2点と産地不明の同型式1点、尾張型山茶碗の第6型式の小皿1点 (139)、12世紀後半から13世紀初頭の常滑産水瓶 (140) がある。

SK98 (図35) 出土遺物はいずれも中世の遺物である。時期を判別できる遺物には、尾張型山茶碗の第5型式1点、産地不明の第4型式又は第5型式の小皿1点、尾張型の片口鉢の第4型式 (141)、尾張型の片口鉢の第10型式 (142)、古瀬戸後Ⅰ又はⅡ期の瓶子ⅠかⅡ類 (143)、土師器皿 (C 2類1点・分類不明4点) がある。

SK101 (図35) 出土遺物はいずれも中世の遺物である。時期を判別できる遺物には、大窯第2段階の丸皿1点、土師器皿 (B類1点・C 2類4点・分類不明4点) がある。144は土鈴で、同種の遺物は発掘区内で他に3点出土した。

SP21 (図35) 145は凝灰角礫岩製の石鉢である。底部外面を平坦に成形し、底部から体部にかけての立ち上がり約60度を測る。ノミによる不定形の敲打痕が全面に及び、体部内面の稜線から上部については、摩滅が顕著に認められる。片口の有無は不明である。なお、類例は富山県梅原胡摩堂遺跡²⁾で出土し、中世後期・近世初頭に位置づけられている。

2 その他の遺物

ここでは図示した遺物の説明と併せて、各種遺物の全体的な傾向も述べる。

(1) 須恵器、灰釉陶器 (図36)

146は8世紀後半の須恵器坏身で、摩耗が著しい。灰釉陶器は、時期の判別が可能な遺物は8点あり、その内訳は、虎溪山1号窯式又は丸石2号窯式1点、丸石2号窯式 (147) 4点、明和27号窯式1点、西坂1号窯式1点 (148) であり、いずれも碗である。このほか、図示していないが、12世紀後葉から13世紀初頭的美濃須衛型の瓶子1点がある。

(2) 山茶碗類、片口鉢 (図36)

山茶碗類 尾張型が主体を占めるが、東濃型も少なくない。美濃須衛型は1点 (149) 出土している。時期

的には東濃型の第3型式から生田2号窯式まで確認できるが、第5型式(150)、第6型式(151)が多い。なお、152は東濃型の明和1号窯式、153は脇之島3号窯式である。

片口鉢 口縁部破片は4点と少なく、154は尾張型の第7又は8型式である。

(3) 古瀬戸、大窯(図36)

古瀬戸 ここで図示した遺物を器種別にみると、碗には天目茶碗(155)、皿類には卸皿(156)・中皿(157)、鉢・盤には卸目付大皿(158)、瓶・壺・甕には花瓶Ⅱ類(159)・四耳壺(160・161)、ほかに大型筒型容器(162)がある。時期的には前Ⅱ期から後Ⅳ期まで認められるが、小片が多く時期を限定できない遺物が多い。前期の遺物は四耳壺の161ほか1点、壺か瓶2点があり、注目される。

大窯 163は筒型碗、164は志野皿で、ともに第4段階後半である。古瀬戸と同様に小片が多いが、時期を把握できる遺物を分類する限り、大窯期の前半が主体である。

(4) 中国産陶磁器(図36)

青磁 龍泉窯系碗Ⅰ-2類(165)、Ⅰ-6類(166)、同安窯系皿Ⅰ-2類(167)がある。

白磁 碗Ⅷ-1類(168)、Ⅷ-2か3類(169)がある。なお、青白磁は確認できなかった。

(5) 近世陶磁器(図36~39)

陶器 瀬戸又は美濃産は全時期に渡って認められ、図示した器種には天目茶碗(170)、湯呑(171)、大皿(172)、火鉢(173)、播鉢(174・175)、甕(176・177)、徳利(178)がある。177には判読が困難な墨書、178にはへら書き(「森田」)が認められる。常滑産も全時期にわたって認められるが、19世紀前半が主体である。赤物が大半で、甕(181・182)、火鉢(179・180)、片口鉢(183)などがある。その他の産地の製品として、鉢(184)、植木鉢(186)、播鉢(185)、土瓶又は雪平(187)があり、187には刻印(「清山」)がある。なお、少量ではあるが肥前産の碗(188)と皿(189・190)が認められる。

磁器 191は登窯第10小期の広東茶碗。全般に、瀬戸又は美濃産は少なく、地元の巨鹿城焼と考えられる製品も確認できなかった。192は産地不明の角手塩皿。肥前産は碗(194)、皿(195)、鉢(193)、猪口(196)、蓋(197)と様々な器種がある。

(6) 土師器、土器(図39)

皿 全般に、中世前期よりも中世後期から近世にかけての皿が多い。後者の口縁部を分類・集計するとC2類(199・200)が圧倒的に多く、B2類(198)とロクロ調整(202)がそれに続く。なお、201はその他の分類(D類)である。口径別の傾向は、第5章第1節で述べる。

鍋・釜類 伊勢型鍋は7点出土し、A2類1点、A3類・A4類・分類不明が各2点である。内耳鍋は、半球形の体部をもつB類1点(203)のみを確認した。茶釜は3点、ホウロクは36点確認し、うち遺存状況の良いJ4類1点(204)を図示した。他にA類1点、B類点2点、D類3点、G類1点、M類1点を確認した。

焼塩壺 205は蓋。身は2点(46・125)確認したが、蓋は発掘区内で1点のみ出土した。

(7) 土製品(図39)

人形11点、型1点、土鈴4点、土錘2点、陶錘2点、種別不明2点が出土した。206は型合わせによる中実の陶磁製人形で、施釉されている。型(207)は精良な粘土で成形し、型の内側は各種の工具を押し付けて恵比寿を表わし、外側は無調整のままである。土錘(208)は完存するものを図示した。破損のため図示していない他の土錘1点は最大径3.0cm以上・最小径2.6cmを測る。また、陶錘も最大径3.5cm以上・

最小径2.2cm以上を測り、材質は異なるものの大きさは類似する。

(8) 瓦 (図40)

丸瓦16点 (うち軒丸瓦1点、菊丸瓦14点、飾瓦1点)、平瓦5点 (うち軒平瓦1点、袖瓦1点)、棧瓦13点 (軒棧瓦8点)、種別不明57点が出土した。214は大型の軒丸瓦で、右巻きの三ツ巴文である。殊文の数や細部の寸法が異なるものの、岐阜市加納城跡³⁾の軒丸瓦R14-2類と類似する。菊丸瓦は2種類(A・B類)認められる。A類は合計8点出土した。B類(215)はネガティブな連弁を12枚重ねるもので、合計6点出土した。B類は加納城跡出土の菊丸瓦B類と類似する。216は飾り瓦。文様は七曜紋で、瓦当の上表面は平坦である。瓦を固定するための穿孔は認められないため、鬼瓦の一部(家紋瓦)と断定できない⁴⁾。なお、七曜紋は伊勢志摩地方の九鬼家紋で、戸田家の家紋(九曜紋)とは異なる。217は軒平瓦。中心飾りの左右下端は二又に分かれ、加納城跡の軒平瓦K7類に類似するが、桐文の中央が円形を呈する点が大きく異なる。218は軒棧瓦。巴文の尾の長さや殊文の数などから近代に下がる可能性がある。

(9) 石器 (図39)

砥石3点、石鉢1点、硯点1点、種別不明1点が出土した。砥石は、209を含む3点ともに粘板岩製の仕上げである。なお、硯は攪乱から出土し、時期が不明なため図示しなかった。

(10) 木製品 (図39)

本章第3節で説明したS014・S037の構造材、S028の杭、S203の柱、S024出土木製品を除くと、漆器6点、箸13点(210・211・213ほか)、棒状木製品2点(212)である。212は断面方形で、一方を鋭利に削り出す。用途が不明なため棒状木製品とした。

(11) 金属製品、銭貨 (図40)

銭貨 寛永通寶4枚が出土し、3点図示した。219・220は古寛永、221は新寛永である。

金属製品 222は雁首で、火皿と脂反しの形状から18世紀後半に位置する。223・224は吸口。223は222と同一遺構で出土しており、セットになる可能性がある。225は簪で、髪に指す二股の一部である。

注

1) 岐阜県文化財保護センター2012『荒尾南遺跡A地区I』

2) 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『梅原梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告—東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II—』

3) 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団 2003年『史跡加納城跡』

4) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所林正憲氏、岐阜市教育委員会井川祥子氏から御教示を得た。

SD2 (1~18)

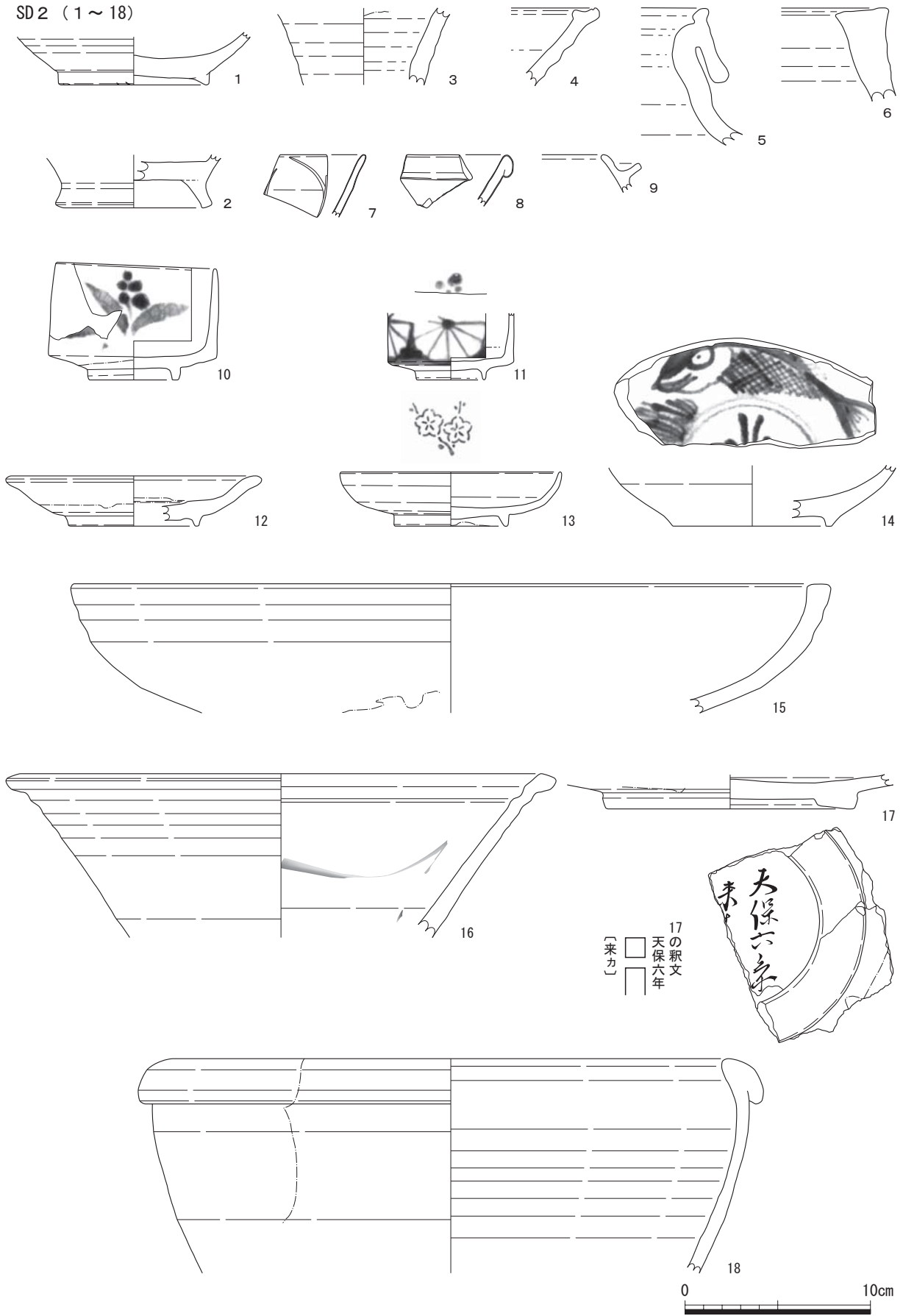


図26 出土遺物 (1)

(S=1/3)

SD 2 (19 ~ 27)

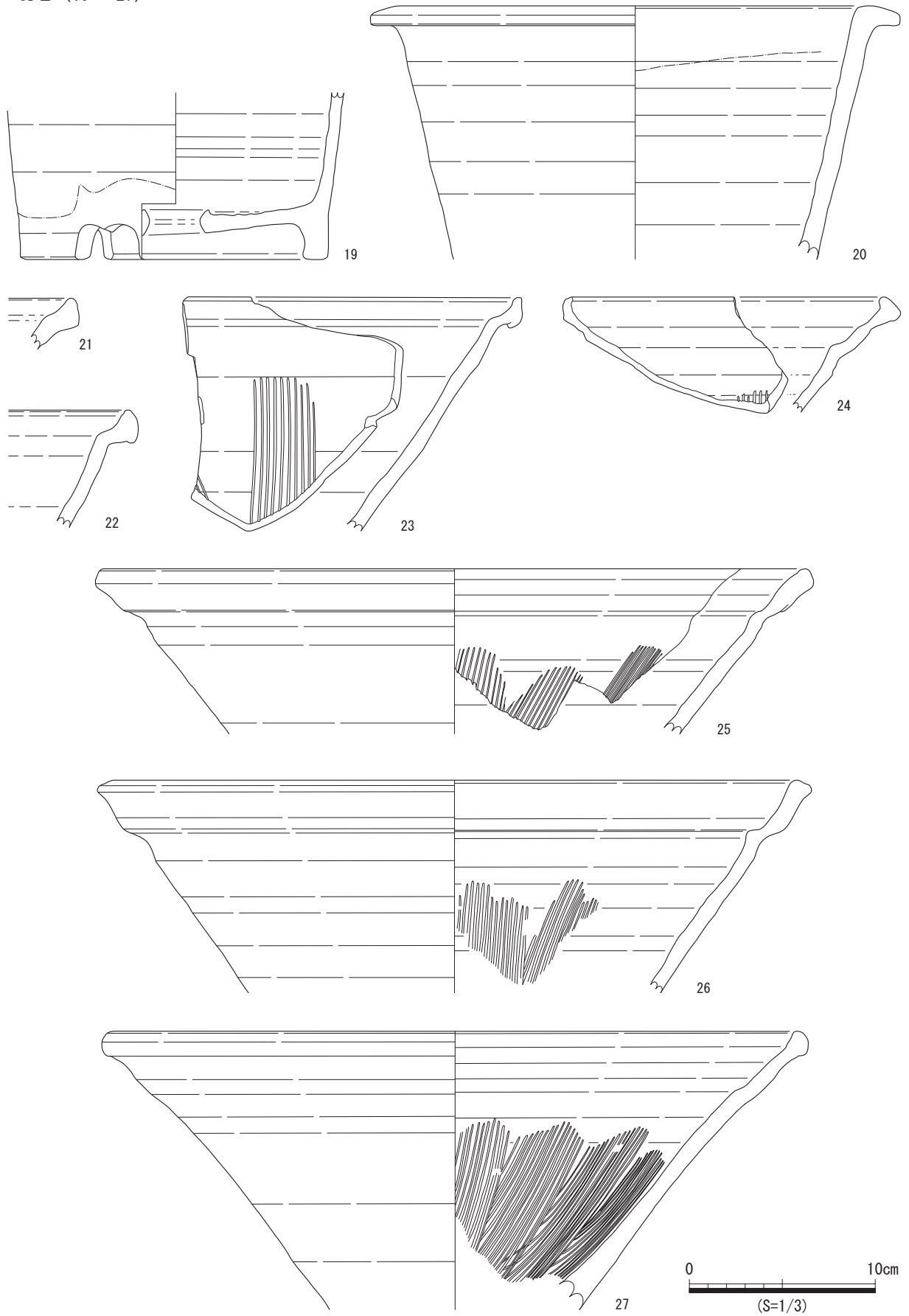


图27 出土遺物 (2)

SD 2 (28 ~ 35)

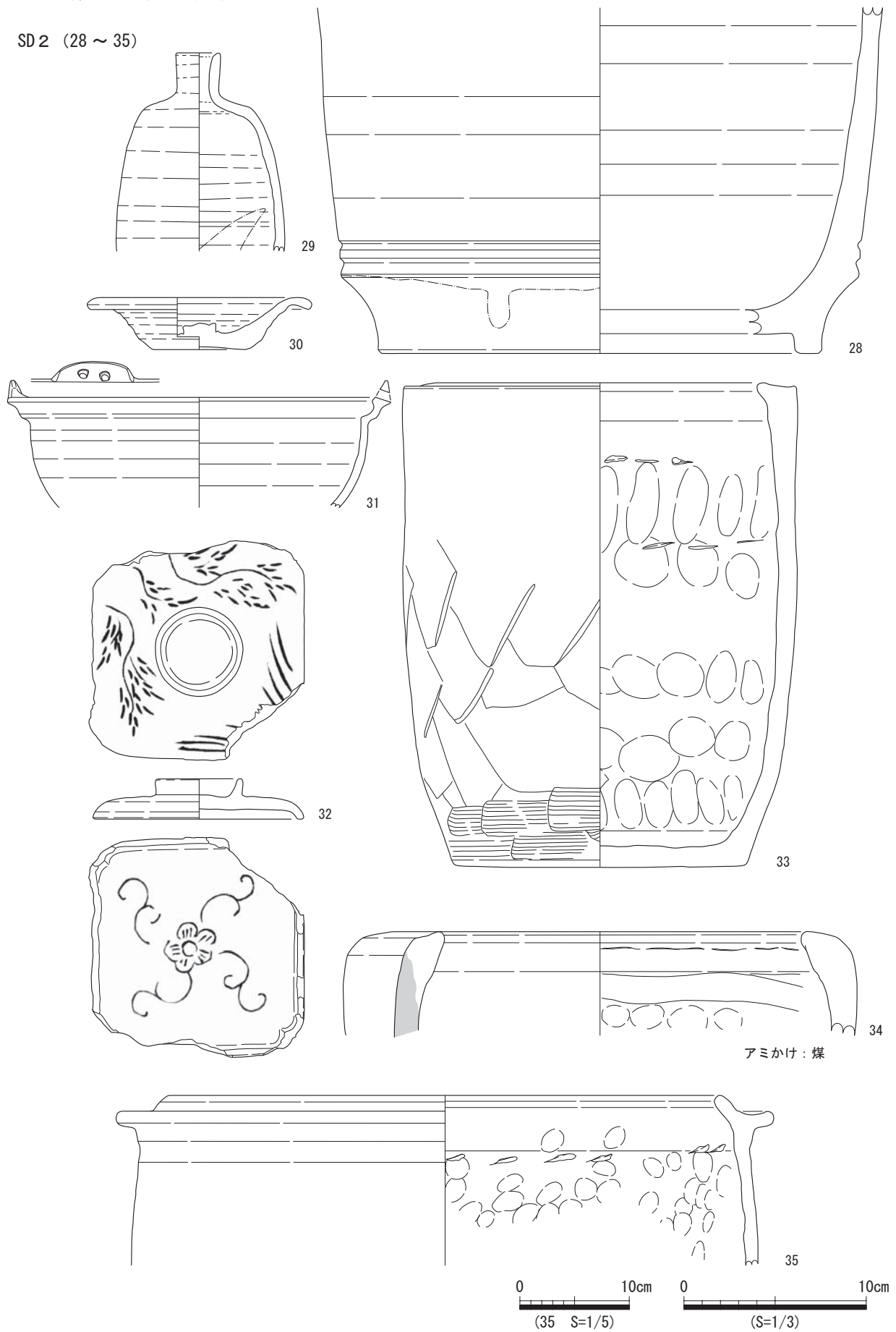


図28 出土遺物 (3)

SD 2 (36 ~ 49)

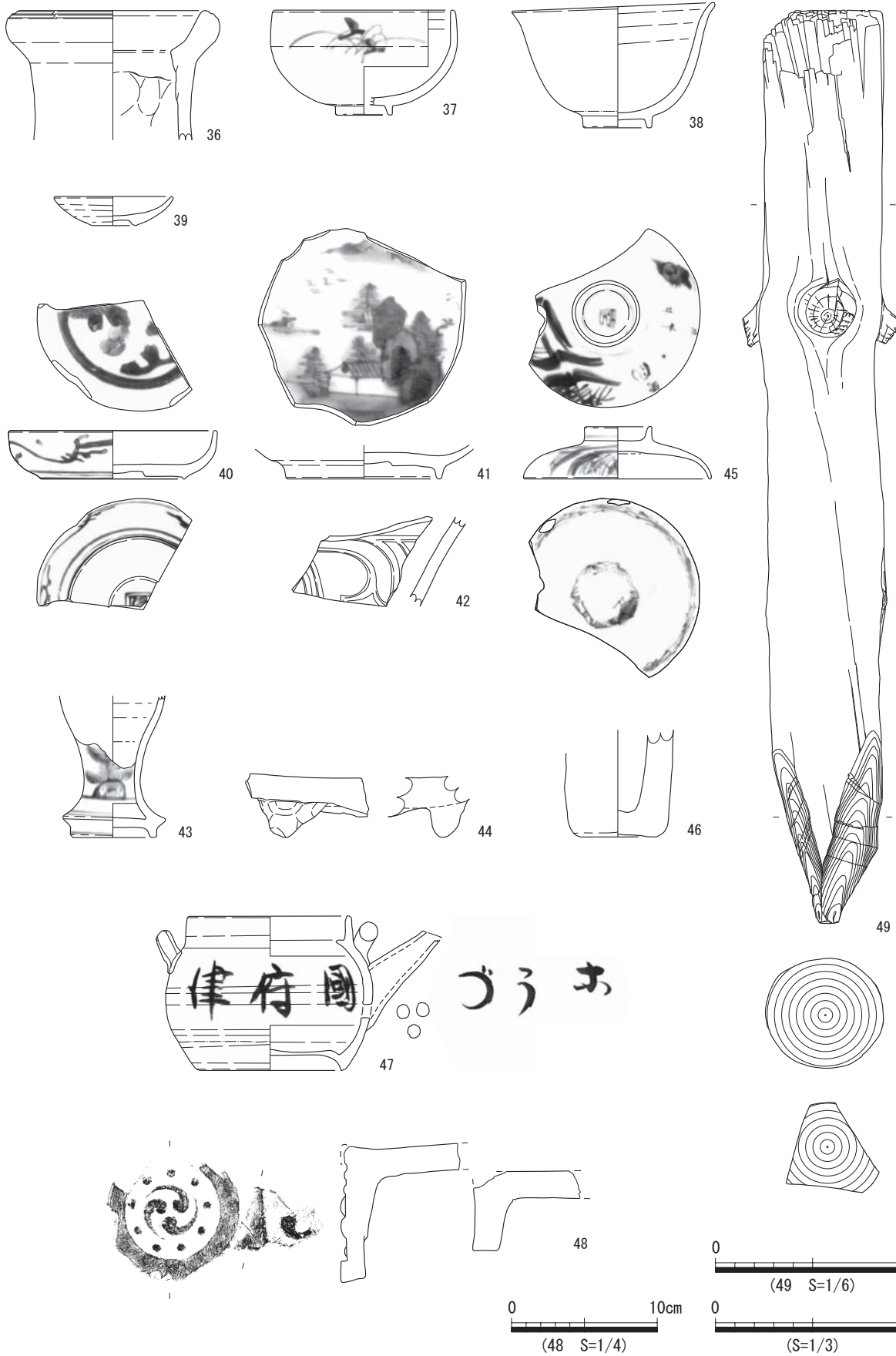


図29 出土遺物 (4)

SD3 (50 ~ 67)

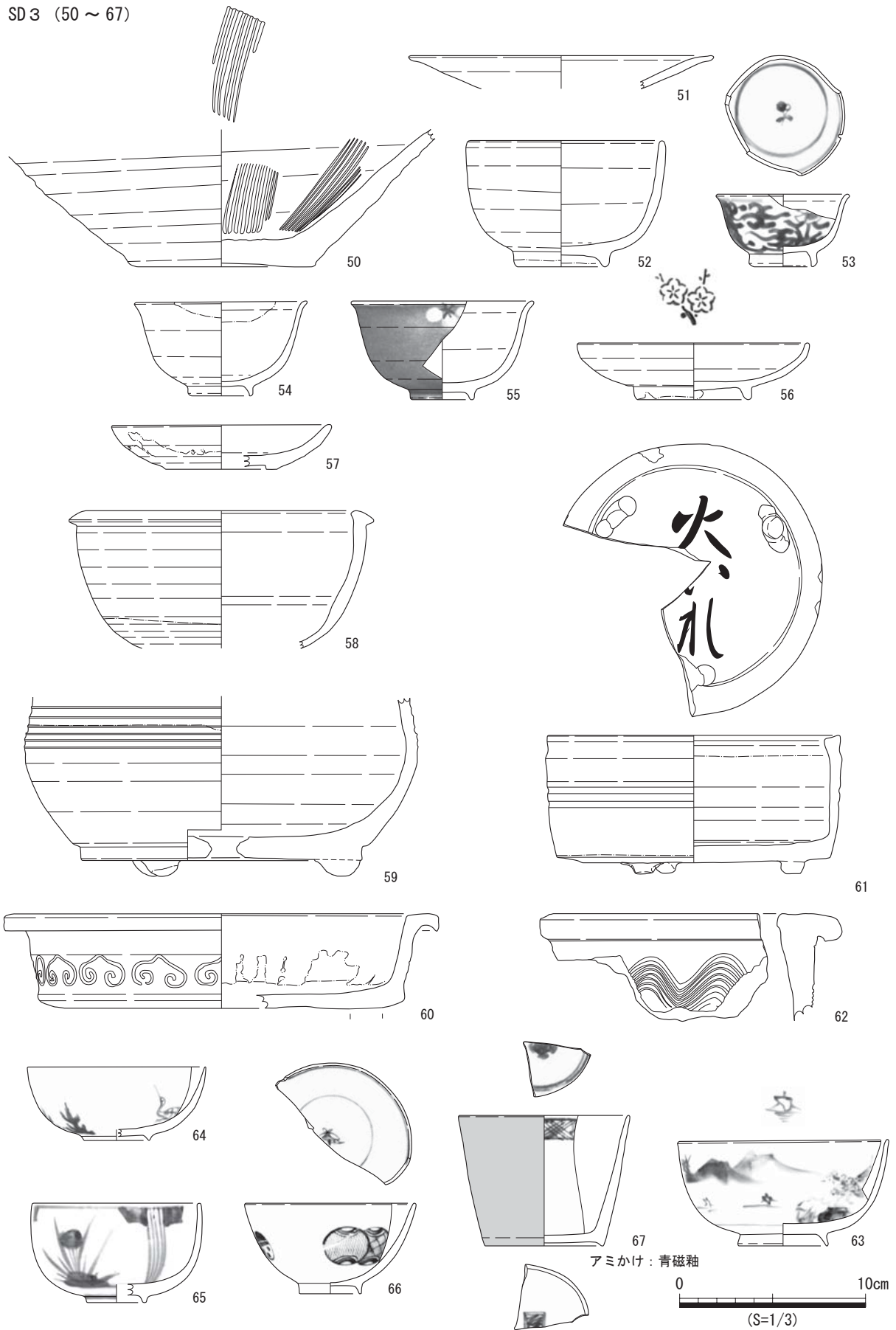
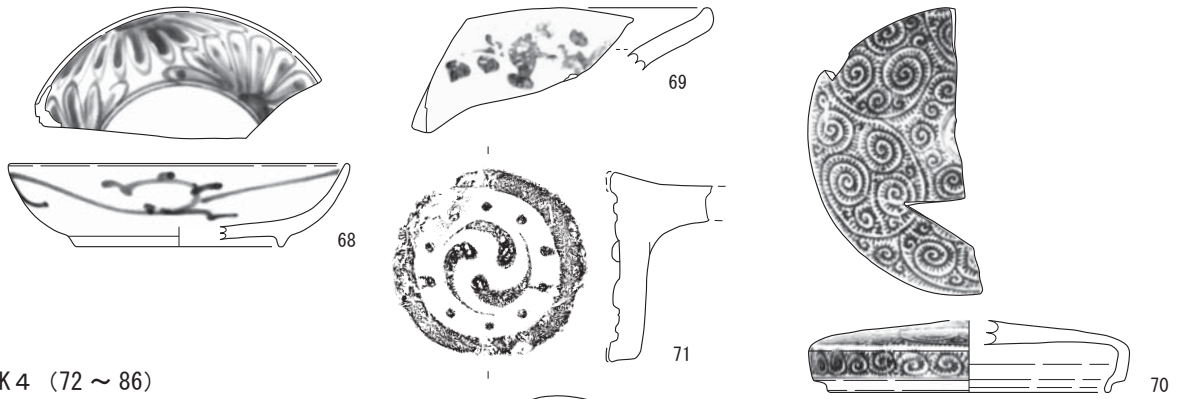
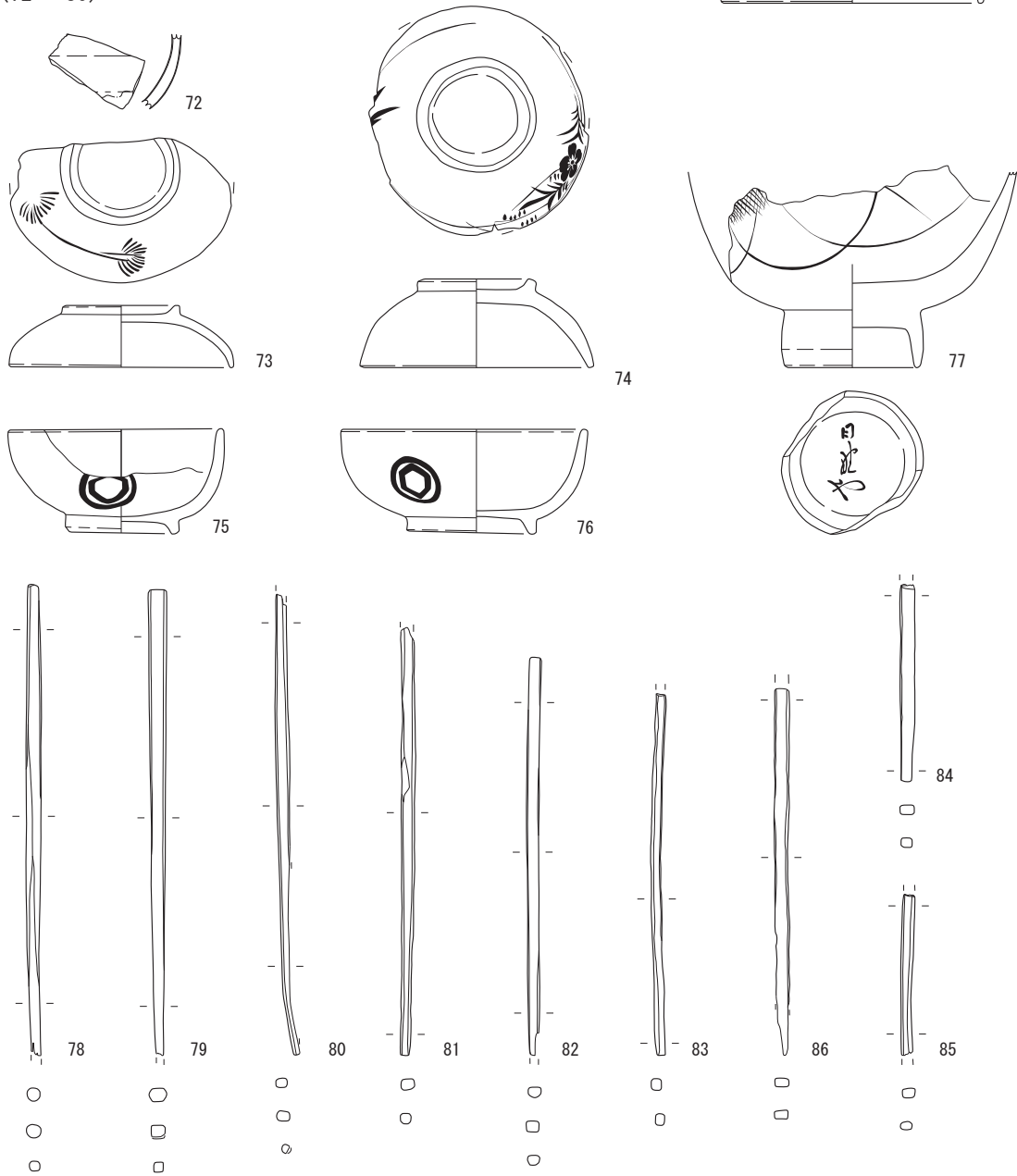


図30 出土遺物 (5)

SD 3 (68 ~ 71)



SK 4 (72 ~ 86)

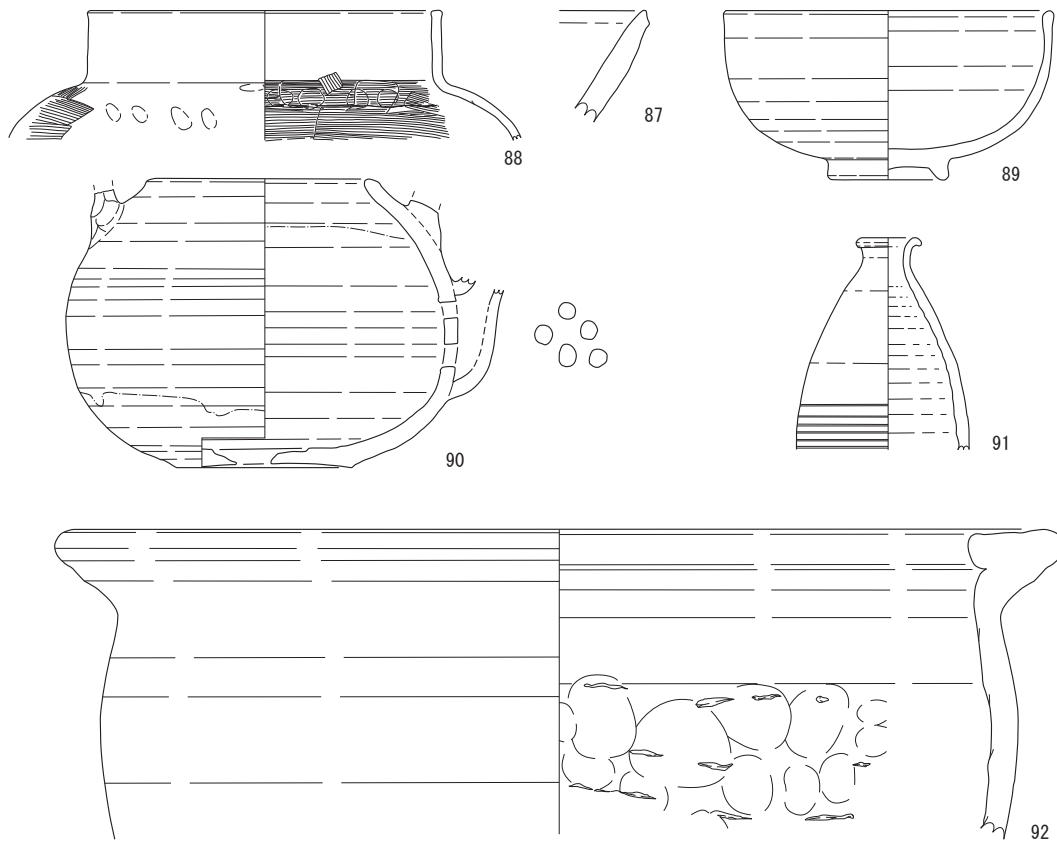


0 10cm
(71 S=1/4)

0 10cm
(S=1/3)

図31 出土遺物 (6)

SK22 (87 ~ 97)



SK25 (93)

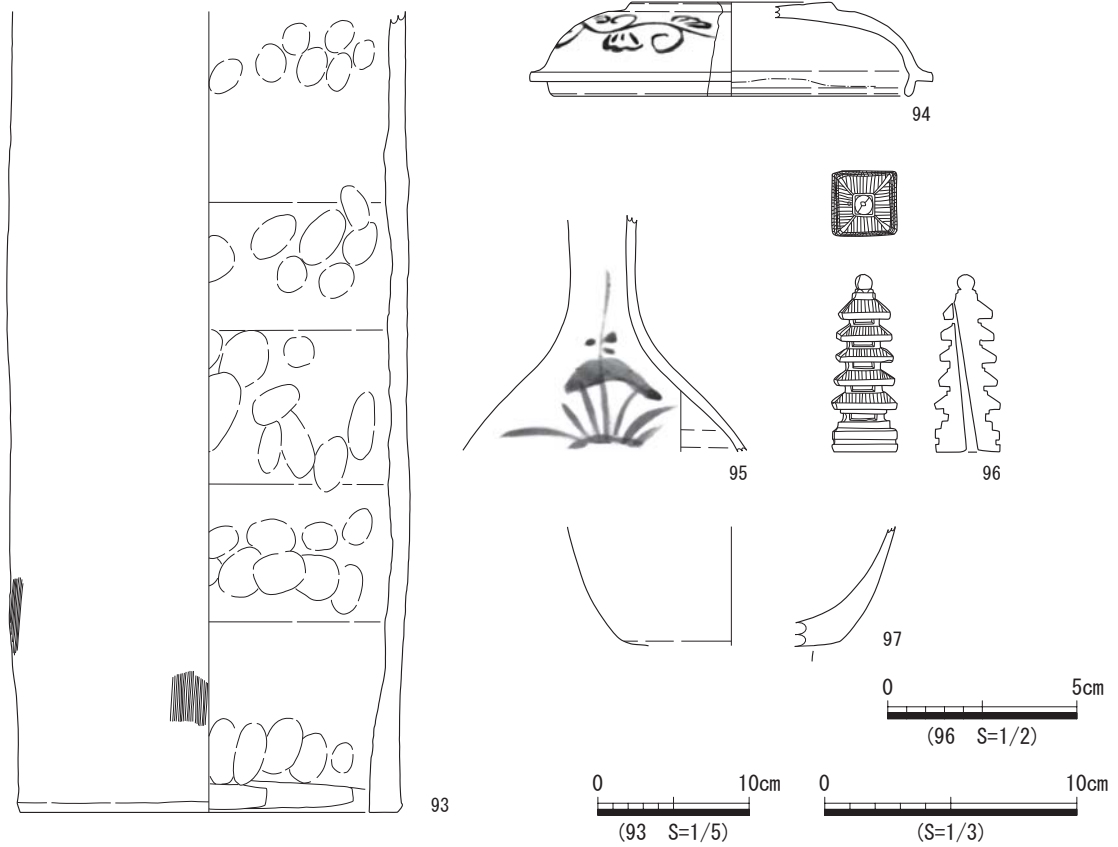
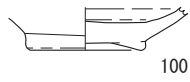


图32 出土遺物 (7)

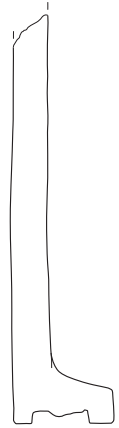
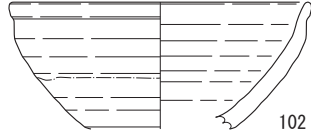
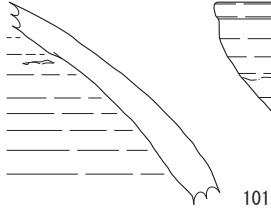
SD 4 (99)



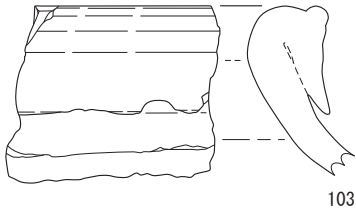
SD 6 (100 ~ 102)



SD 7 (98)

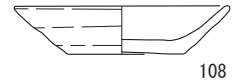
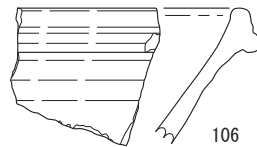
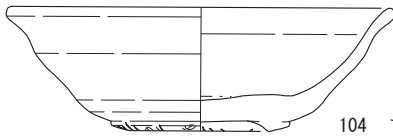


SD 9 (103)

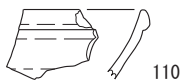


98

SD13 (104 ~ 109)



SD14 (110)



SK10(111)

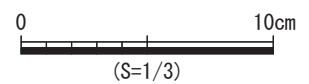
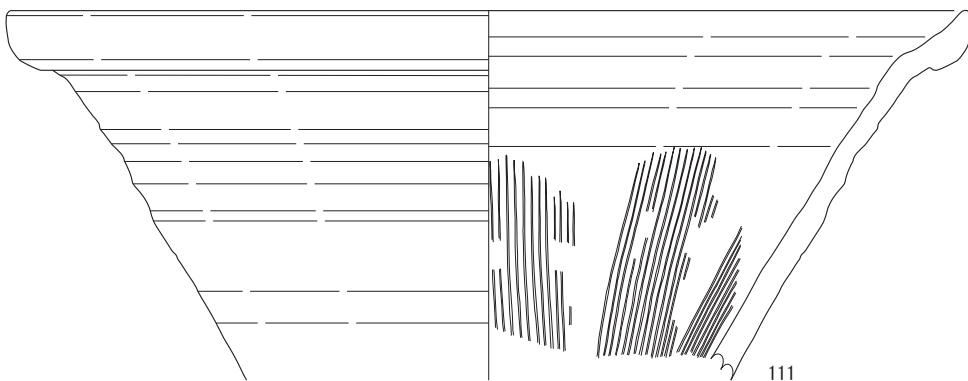
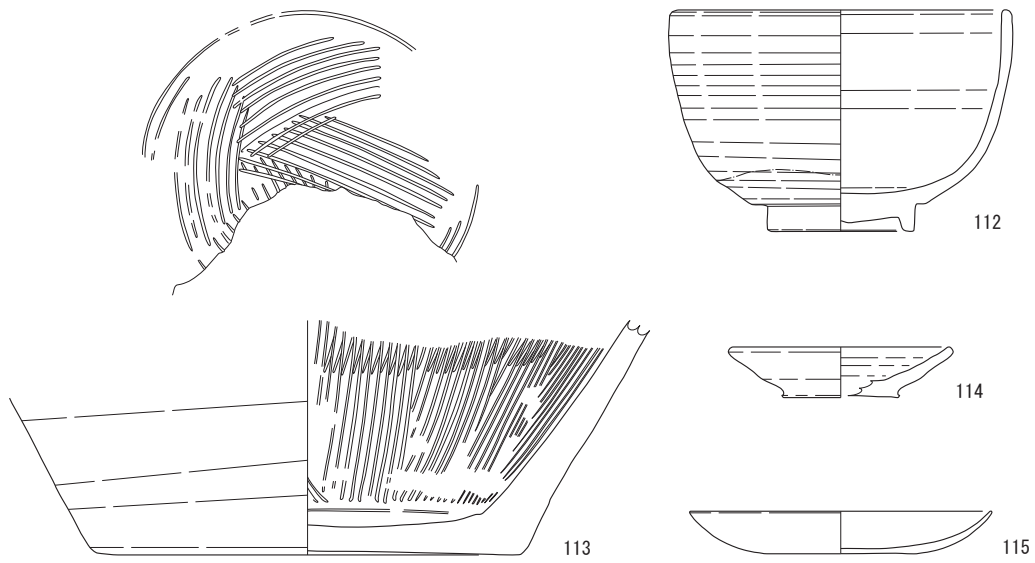
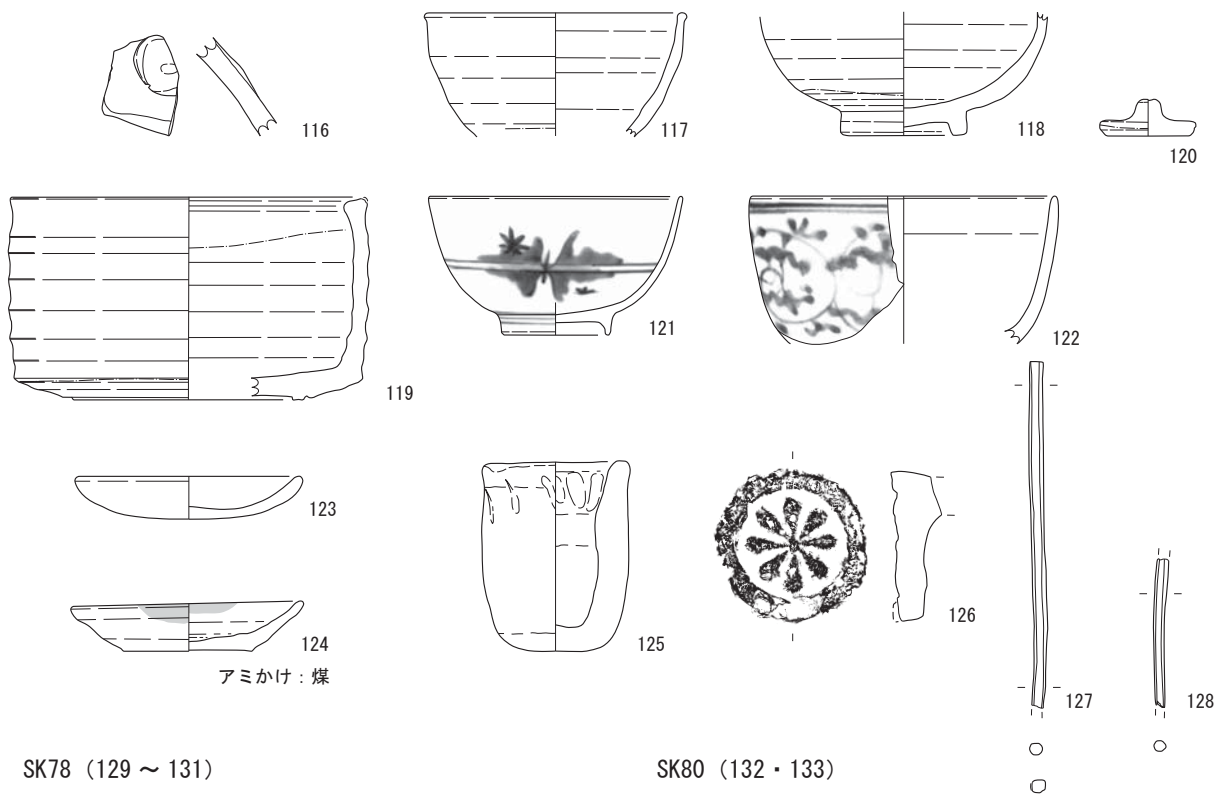


図33 出土遺物 (8)

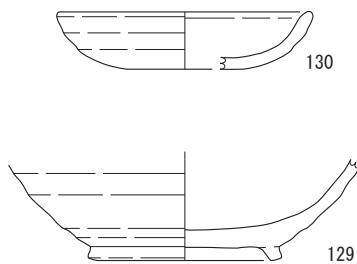
SK10 (112 ~ 115)



SK27 (116 ~ 128)



SK78 (129 ~ 131)



SK80 (132 ~ 133)

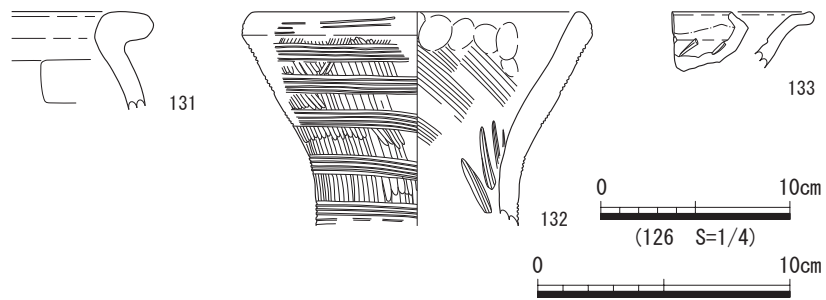
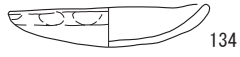
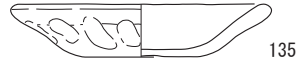


図34 出土遺物 (9)

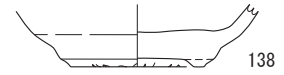
SK84 (134)



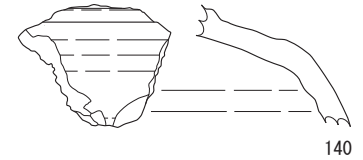
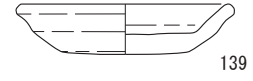
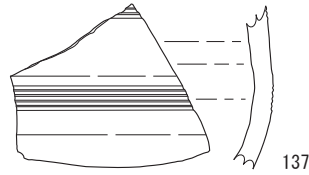
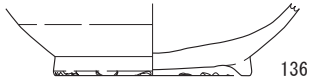
SK88 (135)



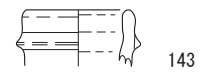
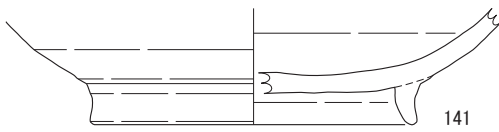
SK97 (138 ~ 140)



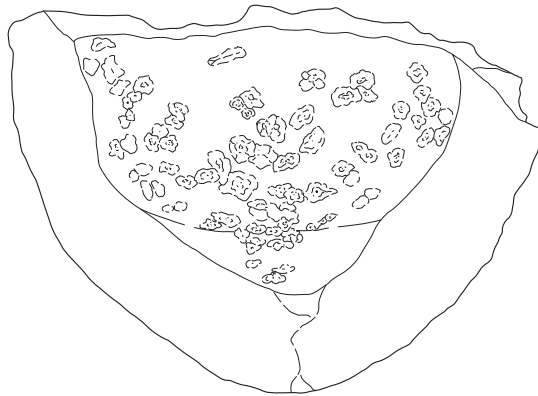
SK95 (136 ~ 137)



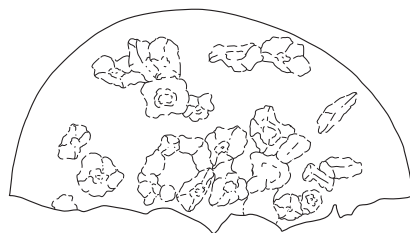
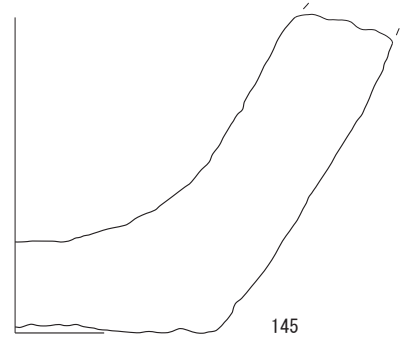
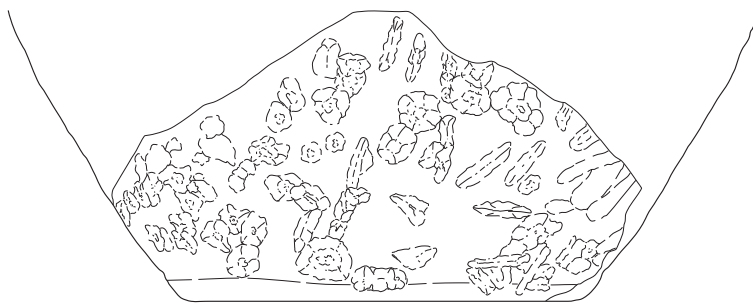
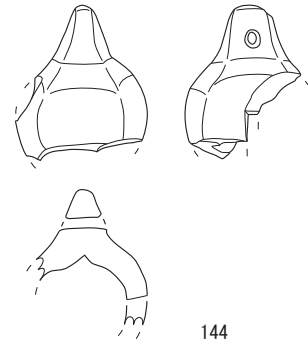
SK98 (141 ~ 143)



SP21 (145)



SK101 (144)



0 5cm

(144 S=1/2)

0 10cm

(S=1/3)

図35 出土遺物 (10)

その他の遺構及び遺構外 (146 ~ 225)

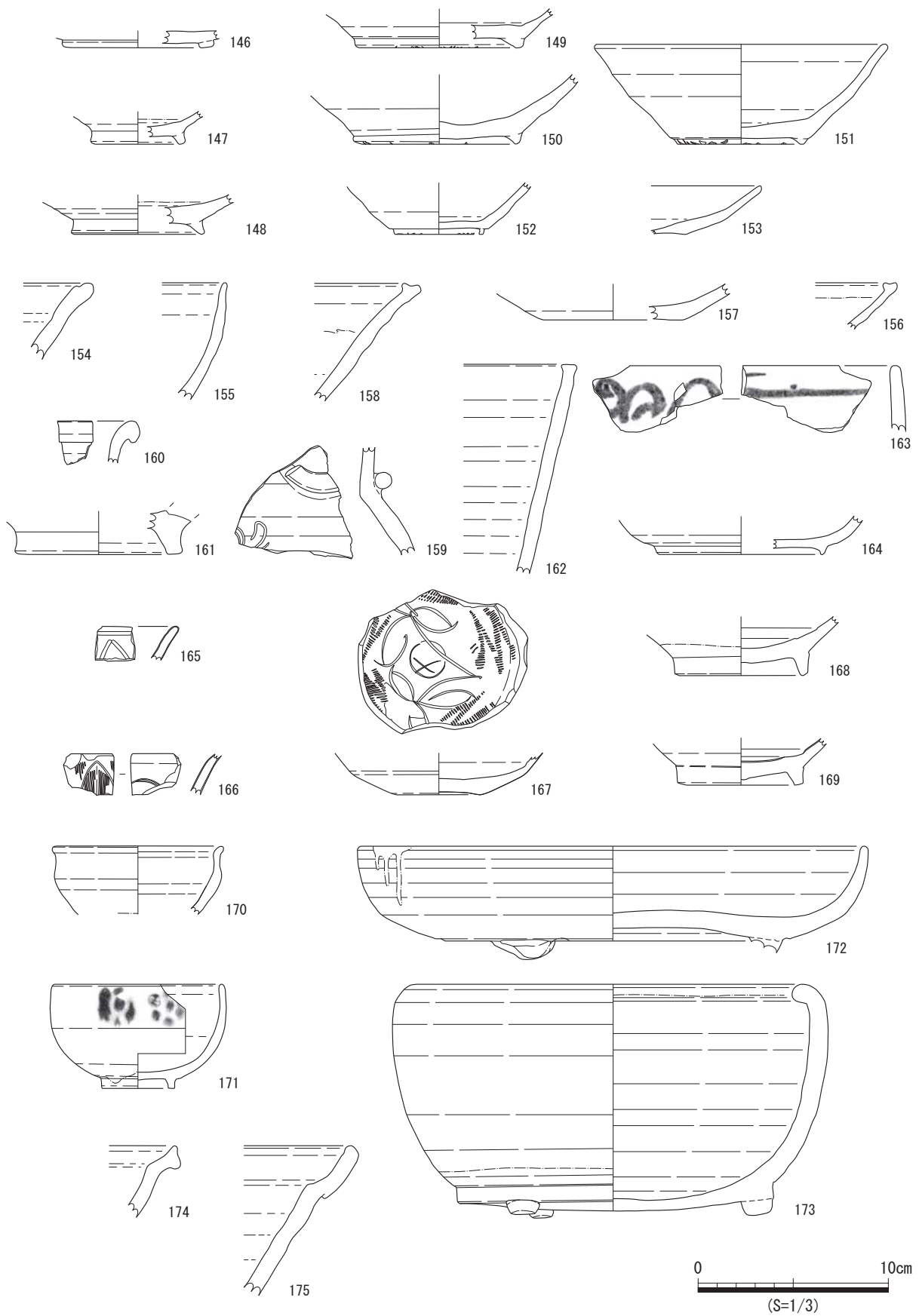


図36 出土遺物 (11)

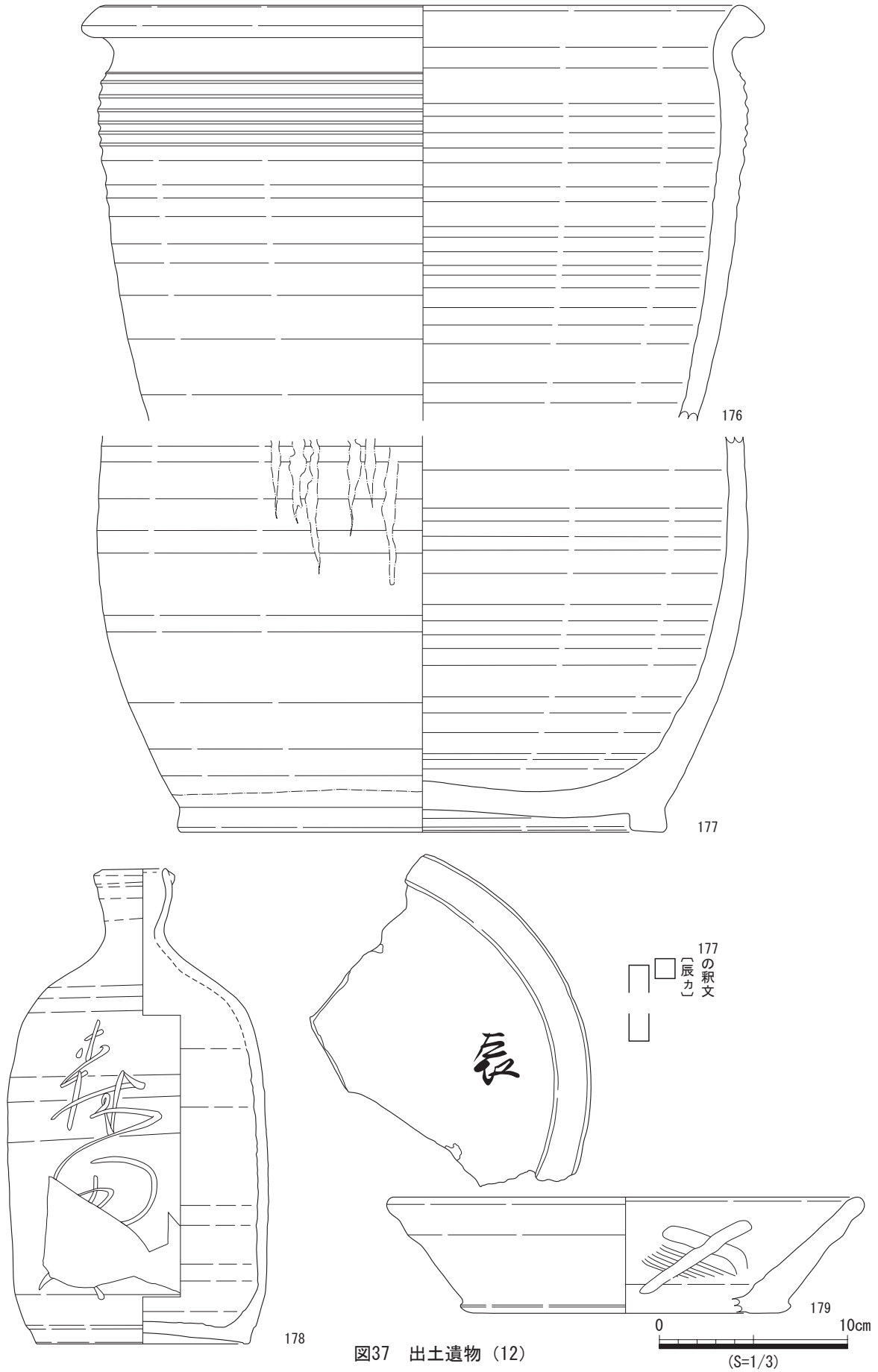


図37 出土遺物 (12)

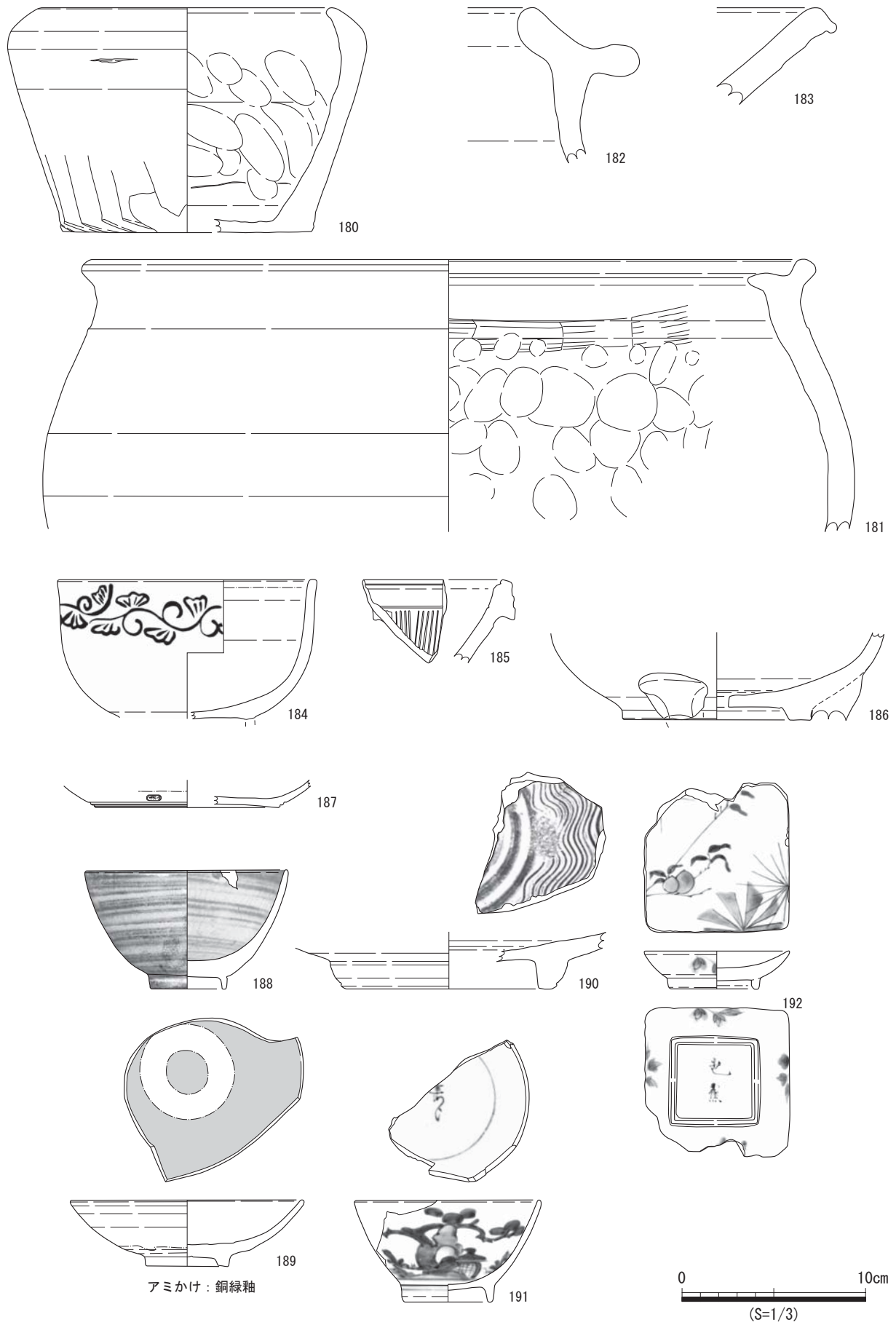


図38 出土遺物 (13)

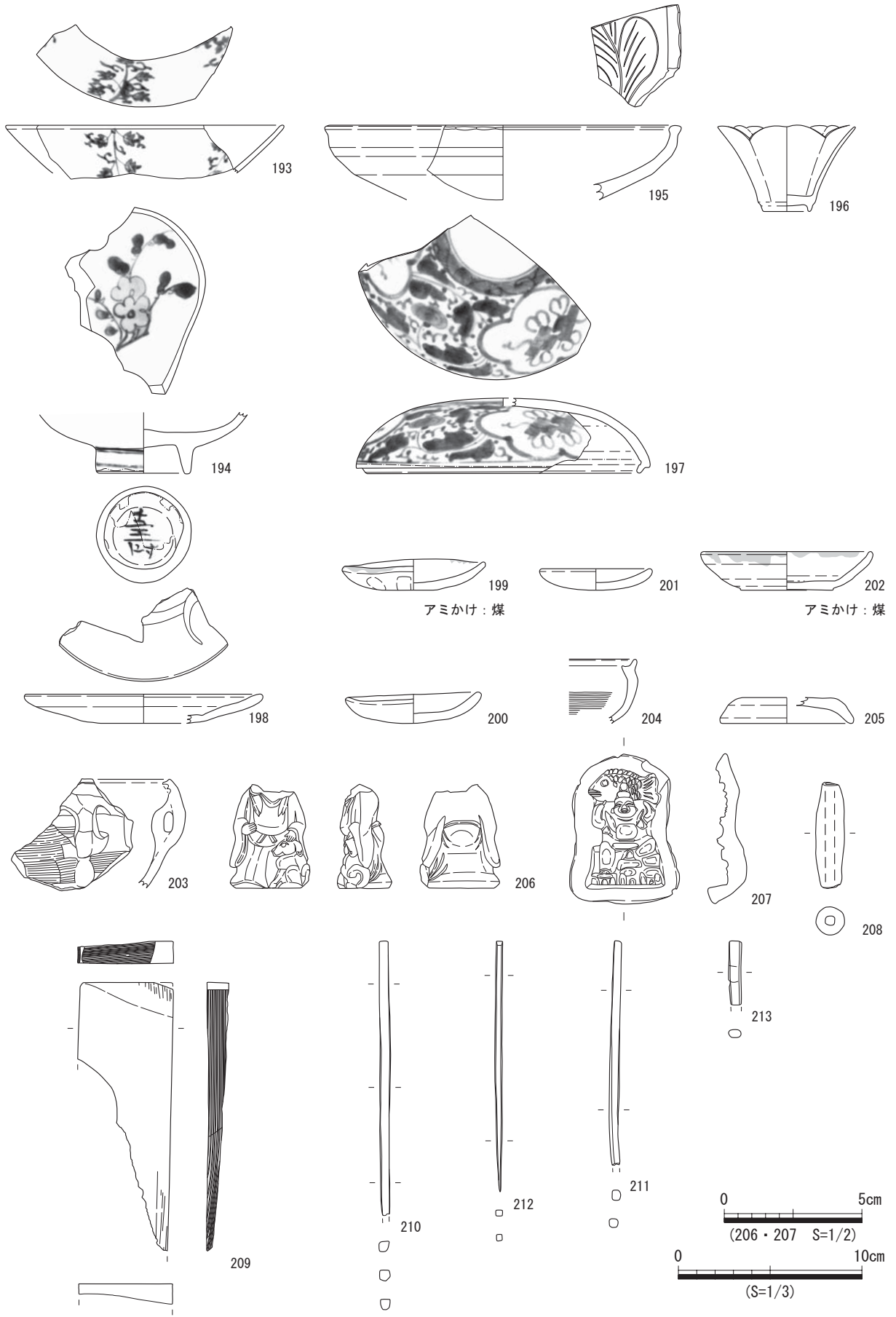


図39 出土遺物 (14)

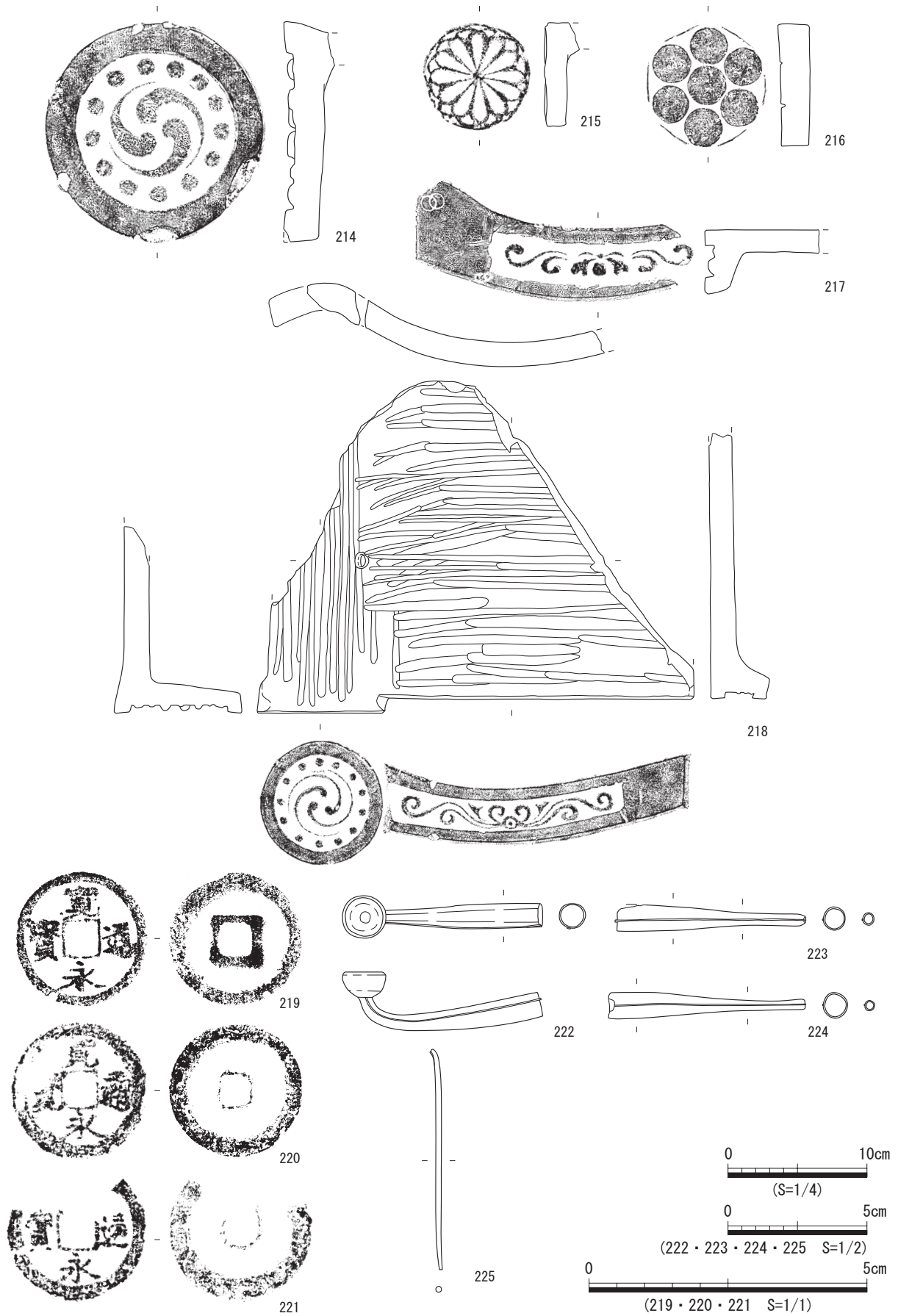


図40 出土遺物 (15)

表4 溝状遺構一覧表

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	<(切られる)	>(切る)	挿図	図版
SD1	S011 S029	A-B1-2 C1-2	II層上面	B A	D D	- -	(10.13)	2.45	(10.11)	2.28	0.14	SD2 SK3	SK6 SK11		
SD2	S013 SD14	B-C1-7	II層上面	F	D	-	(30.30)	5.42	(30.00)	4.20	1.28	SD3	SD1 SD6 SD7 SD9 SD11 SD13 SD14 SK3 SK5 SK15 SK17 SK18 SK20 SK23 SK24 SK39 SK40 SK41 SK42 SK43 SK51 SK52 SK53 SK54 SK57 SK58 SK63 SK64 SK65 SK78 SK80 SK81 SP4 SP8 SP10 SP15 SP18 SP25	7, 8	1, 2
SD3	S028	B1-2 C1-7	II層上面	C	D	-	(30.70)	1.40	(30.20)	0.28	0.85		SD2 SD9 SD13 SD14 SK4 SK20 SK21 SK23 SK24 SK46 SK48 SK58 SK66 SK67 SK68 SK78 SK81 SP11 SP21	7, 9	2
SD4	S155	D10-11	IV層上面	A	D	-	(1.18)	0.93	(1.11)	0.59	0.12		SK101	12	
SD5	S154	C-D8	IV層上面	A	D	-	(1.20)	0.29	(1.14)	0.16	0.09		SK82 SK85 SK86	12	
SD6	S071 S094	A-B1-2 C2	IV層上面	F	F	-	(8.31)	(3.91)	(8.19)	(3.62)	0.44	SD1 SD2 SD3 SD7 SD15 SK1 SK2 SK3 SK6 SK8 SK9 SK23 SP1 SP2 SP3	SK5 SK20 SP4	12	3
SD7	S047	B1-5	IV層上面	C	A	-	(16.82)	0.41	(16.81)	0.13	0.25	SD2 SD11 SK3 SK53	SD6 SD9 SD13 SK14 SK15 SK16 SK17 SK18 SK39 SK40 SK41 SK42 SK43 SK44 SK51 SK52 SK54 SK57 SK63 SP4 SP8 SP10 SP15 SP17 SP18 SP20	12	3
SD8	S082	A-B4	IV層上面	A	D	-	(2.86)	0.74	(2.74)	0.61	0.15	SD10 SK51	SP13 SP14	12	3
SD9	S096 S097	A-C2-3	IV層上面	B C	D A	- -	(10.11)	1.85	(10.21)	0.71	1.03	SD2 SD3 SD7 SK6 SK10 SK12 SK13 SK16 SK17 SK18 SK19 SK24 SK25 SK26 SK28 SK29 SK36 SK38 SK39	SP8	13, 14	4
SD10	S051	B3-4	IV層上面	C	A	-	(4.58)	0.56	(4.56)	0.24	0.22	SD12 SK52 SP9	SD8 SK32 SK42 SK43 SK44 SK51 SP16	12	
SD11	S127	B4	IV層上面	A	D	-	(1.53)	0.18	(1.52)	0.13	0.13	SD2	SD7 SD12 SK54	12	
SD12	S128	B4-5	IV層上面	A	A	-	3.54	0.38	3.38	0.21	0.16	SD11 SK52	SD10 SK51 SK54 SK55 SK57 SK59 SK60 SP16	12	
SD13	S159	B5 C4-5	IV層上面	B	D	-	(7.11)	4.31	(3.10)	2.11	1.50	SD2 SD3 SD7 SK57 SK60 SK61 SK64 SK66 SK67 SK68	SK62 SK63 SK65	13, 14	5
SD14	S158	B-C6	IV層上面	B	D	-	(5.20)	3.71	(1.11)	0.95	1.65	SD2 SD3 SK64 SK72 SK80 SP23 SP24		13, 14	5
SD15	S048	A-B1	IV層上面	A	A	-	(0.96)	0.37	(0.96)	0.14	0.11	SK3	SD6 SK1 SK2	12	

表5 土坑一覧表(1)

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	<(切られる)	>(切る)	挿図	図版
SK1	S074	A-B1	IV層上面	A	A	F	(0.93)	(0.58)	(0.73)	(0.47)	0.19	SD15 SK3	SD6 SK2		4
SK2	S075	A1-2	IV層上面	B	D	B	(1.76)	(0.55)	1.38	(0.37)	0.58	SD15 SK1	SD6		
SK3	S012	B1	II層上面	F	F	F	(1.04)	(0.74)	(0.83)	(0.62)	0.31	SD2	SD1 SD6 SD7 SD15 SK1		
SK4	S024	B1	II層上面	F	D	F	(2.91)	(0.51)	(2.91)	(0.39)	0.46	SD3		10	3
SK5	S098	B1-2	IV層上面	A	D	F	(0.56)	0.59	(0.51)	0.48	0.13	SD2 SD6			
SK6	S023	C1-2	II層上面	F	D	D	(3.50)	(1.18)	(3.47)	(1.04)	0.15	SD1 SK22 SK25 SK102 SP5	SD9 SK19 SK23		
SK7	S043	A2	IV層上面	C	A	B	(0.72)	0.75	(0.61)	0.49	0.24	SK10	SK8 SK13		
SK8	S044	A2	IV層上面	C	D	F	(1.06)	(0.80)	(0.88)	(0.76)	0.28	SK7 SK10 SK13	SD6		
SK9	S088	A2	IV層上面	D	B	F	(0.40)	(0.25)	(0.27)	(0.20)	0.32	SP1	SD6		
SK10	S042	A2-3	IV層上面	F	F	B	(1.81)	(0.91)	(0.73)	(0.70)	0.38	SK26 SK28	SD9 SK7 SK8 SK12 SK13 SK29	15	
SK11	S010	A-B2	II層上面	A	F	F	1.65	0.84	1.65	0.76	0.13	SD1			
SK12	S062	A-B2-3	IV層上面	A	D	D	(0.96)	0.46	(0.92)	0.40	0.09	SK10 SK36	SD9 SK13 SK16 SK18		
SK13	S067	A-B2-3	IV層上面	F	D	D	1.62	1.39	1.25	1.15	0.62	SK7 SK10 SK12 SK16 SK36	SD9 SK8		

表6 土坑一覧表(2)

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	< (切られる)	> (切る)	挿図	図版
SK14	S065	B2	IV層上面	B	F	B	1.01	0.73	0.67	0.55	0.41	SD7	SK15 SK17		
SK15	S069	B2	IV層上面	C	D	B	(0.87)	0.77	(0.98)	0.44	0.36	SD2 SD7 SK14	SK17		
SK16	S068	B2	IV層上面	C	D	B	1.03	0.73	0.59	0.47	0.36	SD7 SK12	SD9 SK13 SK17 SK18		
SK17	S070	B2	IV層上面	B	D	F	(1.15)	(1.03)	0.72	0.42	0.22	SD2 SD7 SK14 SK15 SK16 SK18	SD9		
SK18	S063	B2-3	IV層上面	B	A	B	(1.12)	0.88	1.05	0.75	0.22	SD2 SD7 SK12 SK16 SK39	SD9 SK17 SK38		
SK19	S095	C2	IV層上面	A	D	F	(1.52)	(0.78)	1.45	(0.58)	0.16	SK6 SK24	SD9		
SK20	S101	C2	IV層上面	F	A	F	(0.37)	0.52	(0.25)	0.32	0.14	SD3 SK20			
SK21	S030	C2	II層上面	C	A	B	1.68	0.51	1.23	0.24	0.58	SD3			
SK22	S037	C2	II層上面	B	D	F	(2.77)	(0.98)	(2.68)	(0.90)	(0.73)		SD9 SK6 SK102	11	
SK23	S032	C2	II層上面	C	D	B	(1.71)	2.83	(1.71)	2.35	0.41	SD2 SD3 SK6 SK24	SK22		
SK24	S035	C2	II層上面	C	D	B	1.48	1.41	1.09	0.96	0.78	SD2 SD3	SD9 SK19 SK23		
SK25	S037	C2	II層上面	F	D	F	(0.52)	0.50	(0.27)	0.29	(0.69)	SK102	SK6	11	3
SK26	S039	A3	IV層上面	B	D	B	(1.15)	(0.49)	(0.98)	(0.45)	0.25		SD9 SK10 SK27 SK28 SK29		
SK27	S040	A3	IV層上面	F	D	B	(1.91)	(0.60)	1.22	(0.44)	0.47	SK26	SK30 SK33	15	4
SK28	S041	A3	IV層上面	B	D	B	(0.93)	0.75	(0.60)	0.49	0.24	SK26	SD9 SK10 SK29		
SK29	S090	A3	IV層上面	A	D	F	(1.30)	(0.58)	(1.02)	(0.49)	0.25	SK10 SK26 SK28	SD9		
SK30	S076	A3	IV層上面	C	D	A	(1.25)	(0.27)	(1.15)	(0.14)	0.18	SK27	SK32		
SK31	S019	A-B3-4	II層上面	F	D	A	0.84	0.78	0.72	0.64	0.17				
SK32	S083	A-B3-4	IV層上面	A	D	F	(1.92)	1.56	(1.85)	1.49	0.06	SD10 SK30 SK45 SP7 SP12 SP13			
SK33	S054	A-B3	IV層上面	F	D	B	2.44	1.65	1.85	1.32	0.22	SK27 SK40 SP9	SK34 SK35 SK37 SK42		
SK34	S091	A-B3	IV層上面	D	B	B	0.34	0.27	0.24	0.14	0.30	SK33			
SK35	S092	A-B3	IV層上面	A	D	B	0.59	0.38	0.46	(0.35)	0.18	SK33			
SK36	S046	A-B3	IV層上面	A	D	B	1.07	0.48	0.92	0.33	0.15		SD9 SK12 SK13 SK38		
SK37	S093	B3	IV層上面	A	D	E	0.52	0.23	0.46	0.17	0.07	SK33			
SK38	S064	B3	IV層上面	E	D	B	0.90	(0.65)	0.72	0.45	0.32	SK18 SK36	SD9		
SK39	S059	B3	IV層上面	A	D	B	1.55	(0.79)	1.11	(0.68)	0.31	SD2 SD7	SD9 SK18 SK40 SP8		
SK40	S060	B3	IV層上面	D	D	F	(1.18)	1.12	(0.95)	0.64	0.24	SD2 SD7 SK39	SK33 SK42		
SK41	S058	B3	IV層上面	C	D	B	0.68	(0.40)	0.53	0.33	0.21	SD2 SD7	SK42 SP10		
SK42	S056	B3	IV層上面	F	F	E	1.42	(1.22)	1.08	(1.09)	0.25	SD2 SD7 SD10 SK33 SK40 SK41 SP9	SK43 SP10		
SK43	S066	B3	IV層上面	D	D	B	(1.27)	1.03	(1.13)	0.73	0.42	SD2 SD7 SD10	SK44		
SK44	S061	B3-4	IV層上面	B	F	F	(1.29)	1.01	(1.12)	0.73	0.41	SD7 SD10 SK43	SP15		
SK45	S052	B3-4	IV層上面	B	A	A	0.39	0.35	0.19	0.19	0.21		SK32		
SK46	S102	C3	IV層上面	A	F	B	0.57	0.43	0.42	0.31	0.16	SD3			
SK47	S025	C3	IV層上面	C	D	F	(1.55)	(0.35)	(1.10)	(0.24)	0.55		SK48		
SK48	S103	C3	IV層上面	A	D	F	(0.50)	(0.18)	(0.28)	(0.19)	0.15	SD3 SK47			
SK49	S079	A-B4	IV層上面	B	D	B	(0.67)	0.73	(0.56)	0.51	0.25		SK50 SP14		
SK50	S081	B4	IV層上面	B	E	B	0.83	0.41	0.70	0.32	0.12	SK49 SK51			
SK51	S078	B4	IV層上面	B	D	F	2.53	(1.80)	2.34	(1.65)	0.26	SD2 SD7 SD10 SD12 SK52	SD8 SK50 SP16 SP17 SP18		
SK52	S126	B4	IV層上面	A	D	B	(0.49)	0.60	(0.43)	0.50	0.13	SD2 SD7	SD10 SD12 SK51 SK54 SP16 SP17 SP18		
SK53	S151	B4	IV層上面	D	A	F	(0.32)	0.35	(0.28)	0.22	0.12	SD2	SD7 SK54		
SK54	S152	B4	IV層上面	B	A	B	(1.32)	(0.91)	(0.67)	(0.37)	0.48	SD2 SD7 SD11 SD12 SK52 SK53 SP20	SK55 SK57 SP18 SP19		
SK55	S190	B4-5	IV層上面	A	D	F	(1.47)	(1.15)	(1.33)	0.88	0.11	SD12 SK54 SK56 SK59	SK57		
SK56	S130	B4-5	IV層上面	F	D	F	0.88	(0.55)	0.72	(0.51)	0.13	SK59	SK55 SK57		
SK57	S162	B4-5	IV層上面	A	D	F	(1.81)	1.27	(1.65)	0.69	0.14	SD2 SD7 SD12 SK54 SK55 SK56 SK59 SK60 SP20	SD13 SK62 SK63		
SK58	S033	C4	II層上面	B	D	F	(1.17)	(0.72)	(1.08)	(0.66)	0.34	SD2 SD3			
SK59	S129	B5	IV層上面	A	D	B	1.18	0.57	1.04	0.41	0.15	SD12	SK55 SK56 SK57		
SK60	S131	B5	IV層上面	C	C	E	1.15	0.79	0.31	0.20	0.39	SD12	SD13 SK57 SK61 SK62		
SK61	S132	B5	IV層上面	A	D	B	1.54	1.03	1.51	0.94	0.08	SK60	SD13 SK64		
SK62	S202	B5	IV層上面	B	F	F	(0.40)	(0.40)	(0.35)	(0.32)	(0.32)	SD13 SK57 SK60			
SK63	S192	B5	IV層上面	A	F	F	(0.62)	(0.58)	(0.53)	(0.46)	0.11	SD2 SD7 SD13 SK57			
SK64	S157	B5-6	IV層上面	A	F	F	(3.83)	(1.65)	(3.52)	(1.63)	0.15	SD2 SK61 SK69 SK70 SK71 SK72 SK73 SP22 SA1-P1 SA1-P2	SD13 SD14 SK65		
SK65	S188	B5-6	IV層上面	B	F	F	(1.41)	(1.30)	(1.32)	(1.18)	(0.35)	SD2 SD13 SK64			

表7 土坑一覧表(3)

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	< (切られる)	> (切る)	挿図	図版
SK66	S193	C5	IV層上面	B	D	F	1.09	(0.50)	0.71	(0.34)	0.28	SD3	SD13 SK67		
SK67	S194	C5	IV層上面	B	A	F	(0.94)	(0.65)	0.50	0.48	0.27	SD3 SK66	SD13		
SK68	S195	C5	IV層上面	B	F	F	(0.81)	(0.50)	(0.67)	(0.20)	0.39	SD3	SD13		
SK69	S135	B6	IV層上面	A	A	A	0.27	(0.25)	0.17	0.13	0.24	SA1-P1	SK64 SK70		
SK70	S136	B6	IV層上面	C	D	A	0.59	0.54	0.40	0.33	0.18	SK69	SK64 SK71		
SK71	S137	B6	IV層上面	A	D	F	(0.36)	0.57	(0.29)	0.47	0.10	SK70 SK72	SK64		
SK72	S141	B6	IV層上面	D	D	B	1.25	(0.59)	1.10	(0.37)	0.33		SD14 SK64 SK71 SA1-P2		
SK73	S138	B6	IV層上面	C	A	A	0.33	0.33	0.22	0.22	0.28		SK64 SA1-P2		
SK74	S150	B6	IV層上面	C	D	F	0.61	(0.25)	0.42	(0.16)	0.10	SP23 SA1-P3	SK80		
SK75	S145	B6	IV層上面	C	D	F	0.34	(0.17)	0.15	(0.09)	0.20	SK76	SK80		
SK76	S146	B6	IV層上面	C	D	F	(0.57)	(0.13)	(0.35)	(0.07)	0.10		SK75 SK80		
SK77	S142	B6	IV層上面	C	A	A	0.52	0.48	0.24	0.22	0.28		SK80 SA1-P3		
SK78	S189	C7	IV層上面	B	D	A	1.72	1.64	-	1.11	0.81	SD2 SD3 SK81		16	5
SK79	S201	C7	IV層上面	F	A	B	1.17	(1.00)	0.77	0.55	0.14		SK81		
SK80	S148	B6-7	IV層上面	B	D	F	(2.68)	(1.33)	(1.74)	(1.31)	0.50	SD2 SK74 SK75 SK76 SK77 SP23 SP25 SA1-P3 SA1-P4	SD14	15	
SK81	S199	C7-8・D7	IV層上面	F	F	E	(3.37)	(2.30)	(3.05)	(2.05)	0.14	SD3 SK79 SK82 SK83 SK84	SK78		
SK82	S184	C-D7-8	IV層上面	F	D	B	1.90	(1.10)	1.77	(1.05)	0.11	SD5 SK84 SK85 SK86	SK81		
SK83	S185	C-D7	IV層上面	F	D	B	0.85	0.72	0.66	0.49	0.11		SK81		
SK84	S183	C7-8	IV層上面	A	D	B	(0.33)	0.41	(0.31)	0.30	0.12		SK81 SK82	16	4
SK85	S181	D7-8	IV層上面	A	D	F	(0.60)	(0.30)	(0.50)	(0.20)	0.08	SD5	SK82		
SK86	S182	C8	IV層上面	A	A	B	(0.28)	0.29	(0.23)	0.20	0.21	SD5	SK82		
SK87	S200	C-D8	IV層上面	C	A	C	0.78	0.72	0.55	0.46	0.19	SK88 SP26 SP27			
SK88	S173	C-D8	IV層上面	A	D	B	2.41	(1.11)	2.32	(1.05)	0.12	SK91	SK87 SK92 SP26 SP27 SP28	16	
SK89	S178	D8	IV層上面	A	D	B	0.68	0.57	0.54	0.46	0.10	SK90			
SK90	S177	D8	IV層上面	A	D	A	0.49	0.45	0.36	0.34	0.09		SK89		
SK91	S171	D8-9	IV層上面	F	D	D	0.97	0.69	0.84	0.58	0.09		SK88 SK92 SP28		
SK92	S172	D8-9	IV層上面	A	F	F	(1.05)	1.28	1.03	0.99	0.14	SK88 SK91 SK93 SK95	SK94 SP28		
SK93	S170	D9	IV層上面	A	B	B	0.47	(0.14)	0.42	(0.10)	0.16		SK92		
SK94	S196	D9	IV層上面	B	A	B	(0.63)	0.61	(0.48)	0.44	0.14	SK92 SK95			
SK95	S169	D9	IV層上面	A	D	A	1.56	(1.15)	1.29	(1.12)	0.11	SK96	SK92 SK94	17	
SK96	S168	D9	IV層上面	A	D	B	(0.32)	0.30	(0.28)	0.22	0.14		SK95		
SK97	S166	D9	IV層上面	A	D	B	(1.11)	(0.81)	(0.82)	(0.69)	0.07	SK98		17	
SK98	S165	D9-10	IV層上面	A	D	B	(2.14)	(0.80)	(1.91)	(0.64)	0.19		SK97 SK99	17	
SK99	S167	D9-10	IV層上面	A	B	A	(0.67)	(0.37)	(0.52)	(0.37)	0.09	SK98			
SK100	S164	D10	IV層上面	A	D	F	(1.04)	1.69	(1.02)	1.36	0.14		SP30	17	
SK101	S163	D10-11	IV層上面	C	D	F	(1.61)	(0.70)	(0.79)	(0.72)	0.24	SD4	SP29	17	
SK102	S037	C2	II層上面	A	D	B	(1.08)	(0.61)	(0.89)	(0.44)	0.35	SK22	SK6 SK25	11	

表8 柱穴一覧表(1)

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	< (切られる)	> (切る)	挿図	図版
SP1	S087	A2	IV層上面	E	B	B	0.37	0.30	0.28	0.20	0.28		SD6 SK9		
SP2	S089	A2	IV層上面	E	A	A	0.48	0.43	0.30	0.29	0.45		SD6 SP3		
SP3	S086	A-B2	IV層上面	E	B	B	0.72	0.58	0.58	0.43	0.37	SP2	SD6		
SP4	S055	B2	IV層上面	A	E	E	0.77	0.55	0.58	0.37	0.56	SD2 SD6 SD7			
SP5	S022	C2	II層上面	E	E	B	(0.72)	0.59	0.53	0.42	0.50		SK6		
SP6	S057	A3	IV層上面	E	E	B	0.56	0.42	0.36	0.28	0.35				
SP7	S050	A-B3	IV層上面	E	E	B	0.71	0.48	0.46	0.22	0.42		SK32		
SP8	S099	B3	IV層上面	E	D	F	(0.46)	(0.63)	(0.26)	(0.43)	0.41	SD2 SD7 SD9 SK39			
SP9	S085	B3	IV層上面	E	F	A	0.57	0.49	0.44	0.35	0.35		SD10 SK33 SK42 SK43		
SP10	S100	B3	IV層上面	E	A	F	(0.33)	0.46	(0.24)	0.22	0.55	SD2 SD7 SK41 SK42			
SP11	S034	C3	II層上面	E	B	A	0.47	0.43	0.42	0.39	0.24	SD3			
SP12	S053	A4	IV層上面	E	E	B	0.62	(0.37)	0.52	(0.30)	0.26		SK32		
SP13	S084	A-B4	IV層上面	E	E	B	(0.75)	0.48	(0.52)	(0.25)	0.72	SD8	SK32		
SP14	S080	A-B4	IV層上面	E	F	E	0.73	0.62	0.52	0.48	0.36	SD8 SK49			

表9 柱穴一覧表(2)

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	< (切られる)	> (切る)	挿図	図版
SP15	S077	B3-4	IV層上面	E	E	A	(0.69)	0.63	(0.40)	0.41	0.35	SD2 SD7 SK44			
SP16	S174	B4	IV層上面	E	B	B	0.35	0.27	0.29	0.19	0.51	SD10 SD12 SK51 SK52			
SP17	S175	B4	IV層上面	E	E	A	0.25	0.25	0.22	0.2	0.36	SD7 SK51 SK52			
SP18	S161	B4	IV層上面	E	A	F	0.48	(0.35)	0.27	(0.33)	0.32	SD2 SD7 SK51 SK52 SK54			
SP19	S191	B4	IV層上面	E	E	E	0.34	(0.30)	0.24	0.18	0.27	SK54			
SP20	S153	B4	IV層上面	E	E	A	0.53	0.44	0.37	0.31	0.44	SD7	SK54 SK57		
SP21	S203	C4	IV層上面	E	D	B	0.49	0.38	0.39	0.30	0.55	SD3		18	5
SP22	S133	B5	IV層上面	E	F	A	0.22	0.19	0.08	0.08	0.15		SK64		
SP23	S140	B6	IV層上面	C	D	A	0.71	(0.55)	0.51	(0.45)	0.23		SD14 SK74 SK80		
SP24	S144	B6	IV層上面	E	E	B	(0.24)	0.22	(0.19)	0.16	0.22	SA1-P3	SD14		
SP25	S156	B7	IV層上面	E	E	F	(0.40)	(0.26)	(0.12)	(0.05)	0.53	SD2			
SP26	S198	C-D8	IV層上面	E	E	B	(1.39)	(0.37)	(0.94)	(0.25)	0.20	SK88	SK87		
SP27	S179	D8	IV層上面	E	D	B	(0.95)	0.75	(0.85)	0.54	0.26	SK88	SK87		
SP28	S197	D8-9	IV層上面	E	E	A	0.62	0.59	0.55	0.49	0.27	SK88 SK91 SK92			
SP29	S186	D10	IV層上面	E	A	A	0.56	(0.40)	0.29	(0.26)	0.21	SK101			
SP30	S187	D10	IV層上面	A	D	B	(0.57)	0.54	(0.49)	0.37	0.29	SK100			

表10 柵付属遺構一覧表

遺構番号	旧番号	地区割り	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	上端長軸長(m)	上端短軸長(m)	下端長軸長(m)	下端短軸長(m)	深さ(m)	< (切られる)	> (切る)	挿図	図版
SA1-P1	S134	B6	IV層上面	E	E	A	0.38	0.34	0.25	0.23	0.16		SK64 SK69	19	
SA1-P2	S139	B6	IV層上面	E	E	B	(0.33)	0.37	(0.32)	0.28	0.22	SK72 SK73	SK64	19	
SA1-P3	S143	B6	IV層上面	E	D	B	(0.50)	0.44	(0.41)	0.24	0.45	SK77	SK74 SP24 SK80	19	
SA1-P4	S147	B6	IV層上面	E	E	A	0.46	0.40	0.34	0.33	0.28		SK80	19	

表11 遺物観察表(1)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
1	尾張型山茶碗	山茶碗	第3型式	SD2		(8.2)	(2.8)	底部外面板目圧痕、高台わずかに靱殻痕、底部内面摩減・墨痕	26	6
2	陶器(瀬戸美濃)	四耳壺	古瀬戸前Ⅱa期	SD2		(8.4)	(2.9)	幅広の高台、外面に灰釉	26	7
3	陶器(瀬戸美濃)	花瓶Ⅲ類(尊式)	古瀬戸後Ⅲ期	SD2			(4.2)	頸部外面に灰釉	26	7
4	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	古瀬戸後Ⅳ期新	SD2			(4.2)	内外面錆釉	26	7
5	陶器(常滑)	甕	8型式	SD2			(7.4)	口縁部の縁帯部の幅4.1cm	26	6
6	陶器(常滑)	甕	12型式	SD2			(5.3)	口縁部の縁帯部(幅3.8cm)、口縁端部が内外にやや張り出す	26	6
7	青磁(中国)	碗	龍泉窯系碗Ⅰ-5a類	SD2			(3.2)	錆のない連弁文	26	7
8	白磁(中国)	碗	Ⅳ類	SD2			(2.8)	玉縁状の口縁部(幅1.2cm)	26	7
9	土器	羽釜	A4類	SD2			(2.0)	鏝は短く上方を向く、鏝以下に煤付着	26	
10	陶器(瀬戸)	筒形碗	登窯第8小期	SD2	8.7	4.8	6.4	削り出し高台、高台周辺を除き長石釉、体部外面に呉須による花文	26	8
11	陶器(美濃)	箱形湯呑	登窯第10小期	SD2		3.6	(3.6)	全面透明釉、呉須による文様(体部外面に菊文と斜格子文、底部内面に五弁花文)	26	8
12	陶器(瀬戸美濃)	輪禿皿	登窯第4小期	SD2	(13.8)	(7.1)	2.7	削り出し高台、底部内面の中央に窪み、断面三角形の付高台、底部周辺を除いて灰釉、底部内面周縁の釉を拭い取る	26	8
13	陶器(美濃)	摺絵皿	登窯第7小期	SD2+SD3	12.0	6.1	3.0	高台を除き灰釉、底部内面に鉄絵の梅文	26	8
14	陶器(瀬戸)	染付皿	登窯第10又は11小期	SD2		(8.6)	(3.3)	削り出し高台、畳付を除き灰釉、呉須による文様(底部内面に魚文、外面は不明)	26	8
15	陶器(瀬戸)	大皿	登窯第8小期	SD2	(41.0)		(7.0)	口縁部外面の轆轤目顕著、底部外面周辺を除き灰釉	26	
16	陶器(美濃)	鉄絵鉢	登窯第7小期	SD2	(29.6)		(8.9)	口縁部内面の窪みが一周、内外面に長石釉を施し内面に鉄絵	26	
17	陶器(瀬戸)	練鉢	登窯第10小期	SD2		(13.4)	(1.9)	底部周辺を除き灰釉、底部外面に天保六年銘の墨書	26	7
18	陶器(瀬戸)	練鉢	登窯第11小期	SD2	(33.8)		(11.6)	折返口縁が体部に密着、内外面に灰釉を施し口縁部外面に緑釉を流し掛け	26	
19	陶器(瀬戸美濃)	植木鉢	登窯第8小期以降	SD2		16.6	(9.0)	輪高台の3箇所に切り込み、高台周辺を除き柿釉	27	8
20	陶器(瀬戸)	植木鉢	登窯第8小期	SD2	(28.4)		(13.7)	体部は直線的に立ち上がり口縁部が水平に開く、体部外面から内面にかけて灰釉	27	
21	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	登窯第3小期	SD2			(2.7)	口縁部の縁帯部(幅1.6cm)、内外面鉄釉	27	
22	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	登窯第9小期	SD2			(6.3)	口縁部の縁帯部(幅1.8cm)、内外面鉄釉	27	
23	陶器(瀬戸)	播鉢	登窯第5小期	SD2			(12.6)	口縁部の縁帯部(幅1.7cm)、摺目一単位10本、内外面鉄釉	27	
24	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	登窯第4小期	SD2			(6.2)	口縁部の縁帯部(幅1.4cm)、内外面鉄釉	27	
25	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	登窯第7小期	SD2	(38.6)		(18.9)	口縁部の縁帯部(幅2.7cm)、摺目一単位13本、内外面鉄釉	27	
26	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	登窯第8小期	SD2	(38.4)		(11.5)	口縁部の縁帯部(幅3.1cm)、摺目一単位14本、内外面鉄釉	27	
27	陶器(瀬戸)	播鉢	登窯第10小期	SD2	(38.0)		(15.0)	口縁部の縁帯部(幅1.3cm)、摺目一単位15本、内外面鉄釉	27	
28	陶器(瀬戸)	半胴	登窯第5~7小期	SD2		(24.4)	(19.0)	削り出し高台、体部下端に2条沈線、高台周辺を除き柿釉	28	
29	陶器(美濃)	徳利	登窯第10又は11小期	SD2+SD3	2.5		(10.8)	短い頸部が直線的に伸びる、外面に灰釉	28	
30	陶器(美濃)	蓋	登窯第5又は6小期	SD2	(12.4)	5.1	2.8	中央に紐、外面底部に回転糸切痕、底部を除き内外面全体に薄い灰釉	28	8
31	陶器(美濃)	耳付鍋	登窯第8~11小期	SD2	(21.0)		(6.0)	受口状口縁、端部を内外に突出させ一對の耳(2箇所穿孔)を付ける、全面柿釉	28	
32	陶器(瀬戸)	蓋物	登窯第8小期	SD2	(12.6)	4.8	2.2	平面四角形の笠部、笠部の中央に環状の窪み、全面に鉄釉、外面に草文・内面に花唐草文を印刻し長石釉	28	8
33	陶器(常滑)	赤物深鉢	19世紀	SD2	(21.6)	16.0	26.5	口縁部内外面に横ナデ、体部外面と口縁端部を板状工具でナデ、体部内面指頭圧痕	28	9
34	陶器(常滑)	赤物くど	17世紀前半	SD2	(22.6)		(5.7)	口縁端部から窓部が空く、口縁部を短く内湾、口縁端部を面取り、窓部に煤付着	28	
35	陶器(常滑)	赤物甕	18世紀前半	SD2	(50.6)		(15.6)	体部上半は直線的、口縁部の縁帯部は短く水平方向に伸びる、外面摩減、体部内面の上半に指頭圧痕、板状工具でナデ	28	9
36	陶器(常滑)	土樋	19世紀前半	SD2+SD3	(11.0)		(6.7)	横断面は不整形、受部の端部は板状工具でナデ	29	9

表12 遺物観察表(2)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
37	陶器(京信)	小碗		SD2	(9.5)	(2.9)	5.4	削り出し高台、高台周辺を除き透明釉、体部外面に 錆絵(草花文)	29	8
38	陶器(産地不明)	端反碗		SD2+SD3	10.4	3.5	6.4	削り出し輪高台、高台周辺を除き長石釉	29	8
39	陶器(産地不明)	小皿		SD2	6.2	2.2	1.5	底部基筋底、体部下半ケズリ、内外面露胎	29	
40	磁器(肥前)	皿	IV期	SD2	10.8	7.4	2.5	蛇ノ目凹形高台、高台内に二重方形枠内渦「福」銘、 内側面は青磁釉、見込みに菊文、裏文様は唐草文	29	8
41	磁器(肥前)	皿		SD2		8.1	(1.7)	蛇ノ目凹形高台、見込みに山水文、焼継痕跡	29	8
42	磁器(肥前?)	壺	III期	SD2			(4.2)	篋形(文様意匠不明)、内外面青磁釉	29	
43	磁器(肥前)	神酒徳利	V期	SD2		4.5	(7.3)	瓶小型、内面と壘付を除き透明釉、体部外面に若杉 文	29	
44	磁器(肥前?)	香炉		SD2			(3.3)	三足、外面白磁釉、内面露胎	29	
45	磁器(肥前)	蓋(碗)	V期	SD2	9.7	3.5	1.7	口縁部内側に四方襷文、天井部内面の中央に環状の 松竹梅文、外面に竹林雀文、摘みに銘款(判読不明)	29	8
46	土器	焼塩壺(身)		SD2		4.7	(5.5)	底部外面から体部にかけて凹凸顕著	29	
47	陶器(益子?)	汽車土瓶	明治時代後半	SD2	8.5	7.7	7.9	茶漉し穴3箇所、内面と底部周辺露胎、体部に筆書 き(「國府津」「古うづ」)、底部内面に炭化物が付着 しており灰皿又は灰落としとして再利用したものか	29	
48	瓦	軒棧瓦		SD2				瓦当径9.3cm、巴文は左巻きで尾は短い、珠文9個・ 珠文径0.7cm、文様区径6.4cm、キラコを使用	29	10
49	木製品	杭		SD2				長さ94.0cm、径13.0~16.0cm、断面円形、表面は炭 化、図8のA-A'断面箇所から出土	29	
50	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	古瀬戸後IV期新	SD3		9.8	(7.4)	底部外面回転糸切痕、摺目一単位9本、内外面錆釉	30	
51	土師器	皿	A3類	SD3	(16.4)		(1.8)	体部直線的、体部内外面ナデ	30	
52	陶器(瀬戸)	丸碗	登窯第6又は7小 期	SD3	10.6	4.7	6.8	高台は丸味を帯び、口縁部は直線的に立ち上がる、 壘付を除いて内外面灰釉	30	8
53	陶器(瀬戸)	端反碗	登窯第10小期	SD3	(7.2)	3.7	3.9	体部外面に花唐草文、体部内面の中央に折枝花文、 高台内に銘款(判読不明)	30	8
54	陶器(瀬戸)	端反碗	登窯第11小期	SD3	9.3	3.5	5.1	壘付を除き灰釉、口縁部内外に貝具の付け掛け	30	8
55	陶器(瀬戸)	端反湯呑	登窯第11小期	SD3	9.8	3.4	5.3	外面全体に透明釉、口縁部外面に鉄・白化粧土で梅 花文、口縁部から内面にかけて白化粧	30	8
56	陶器(瀬戸)	摺絵皿	登窯第7小期	SD3	(12.6)	(6.3)	3.5	壘付を除き灰釉、底部内面の中央に鉄による摺絵(梅 花文)	30	8
57	陶器(瀬戸)	灯明皿	登窯第5又は6小 期	SD3	(11.8)	(6.0)	2.4	削り込み高台、口縁部外面から内面にかけて錆釉、体 部外面に煤付着	30	
58	陶器(瀬戸)	練鉢	登窯第8小期	SD3	(16.4)		(9.4)	口縁部を外折し断面三角形、底部周辺を除き灰釉	30	8
59	陶器(瀬戸)	火鉢Ⅱ類 (瓶掛)	登窯第8小期	SD3		15.1	(9.6)	三足、内外面に錆釉、体部外面上半に緑釉、植木鉢 に転用	30	8
60	陶器(瀬戸)	盤	登窯第8小期	SD3	(23.4)	(19.8)	(5.1)	底部に三足の剥離痕跡、体部外面に押印文、底部を 除き灰釉を施し口縁部内外面に緑釉を漬け掛け	30	8
61	陶器(美濃)	筒形香炉	登窯第7小期	SD3	(15.8)	14.8	7.5	体部下端に三足、体部外面から口縁部内面にかけて 鉛釉、底部外面に墨書(「火入れ」)	30	8
62	陶器(常滑)	赤物くど	19世紀中葉	SD3			(5.8)	口縁部を外側に張り出す、体部外面の上半に櫛状 工具で波状文、内面は板状工具でナデ	30	9
63	磁器(瀬戸美濃)	丸碗	登窯第10又は11小 期	SD3	11.4	4.9	5.7	内外面透明釉、体部外面に風景文様、底部内面の中 心に帆掛船	30	8
64	磁器(肥前)	小碗		SD3	(9.6)	(3.5)	4.0	体部外面に鶴若松文	30	8
65	磁器(肥前)	小碗		SD3	(9.1)	(3.3)	5.4	体部外面に燕子花文、焼継痕跡	30	8
66	磁器(肥前)	小碗		SD3	(9.2)	(3.3)	4.9	体部外面丸文、底部内面中央に昆虫文	30	
67	磁器(肥前)	猪口	IV期	SD3	(9.3)	(6.2)	7.1	高台内に高台内に二重方形枠内渦「福」銘、口縁部 内側に四方襷文、見込みにコンニャク印判による五弁 花文、外面青磁釉	30	
68	磁器(肥前)	小皿		SD3	(13.6)	(8.2)	2.3	内側面に半菊花文、裏文様は唐草文、高台内中央に 施文がわずかに残る	31	8
69	磁器(肥前)	大皿		SD3			(2.0)	口縁部を短く内折させ丸く収める、白磁を素地とし 口縁部内面に上絵(赤色の圏線内に緑色の唐草 文)、上絵は部分的に剥離	31	8

表13 遺物観察表(3)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合 関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
70	磁器(肥前)	蓋	V期	SD3	11.3		(2.9)	天井部外面に蛸唐草文、焼継痕跡	31	8
71	瓦	軒棧瓦		SD3				瓦当径10.0cm、巴文は左巻きで尾は短い、珠文10個・珠文径0.6cm、文様区径7.9cm、キラコを使用	31	10
72	陶器(中国?)	天目茶碗		SK4			(3.2)	内外面黒釉	31	7
73	木製品	漆器蓋		SK4	9.4	4.5	2.7	外面黒色漆(草花文の蒔絵:銀か錫)、内面赤色漆	31	9
74	木製品	漆器蓋		SK4	(9.6)	4.4	3.8	外面黒色漆(草花文の蒔絵2単位:銀か錫)、内面赤色漆	31	9
75	木製品	漆器椀		SK4	9.1	(4.4)	4.4	外面黒色漆(丸紋の蒔絵3単位:石黄か)、内面赤色漆	31	9
76	木製品	漆器椀		SK4	(10.2)	(5.1)	4.4	外面黒色漆(丸紋の蒔絵3単位:銀か錫)、内面赤色漆	31	9
77	木製品	漆器椀		SK4-3層		5.6	(8.6)	外面黒色漆(丸紋内に斜格子文?の蒔絵:石黄か)、内面赤色漆、高台内に文字(「日口や」)	31	9
78	木製品	箸		SK4				長さ20.2cm、幅0.5~0.7cm、白木、断面円形、下部欠損	31	
79	木製品	箸		SK4				長さ20.0cm、幅0.4~0.8cm、白木、上部は断面長方形・下部は断面楕円形、下端欠損	31	
80	木製品	箸		SK4				長さ19.8cm、幅0.6~0.8cm、白木、上部は楕円形・下部は円形、上部欠損・下部折損	31	
81	木製品	箸		SK4				長さ18.4cm、幅0.5~0.6cm、白木、断面八角形、上部欠損	31	
82	木製品	箸		SK4-4層				長さ17.1cm、幅0.5~0.6cm、白木、上部は断面方形・下部は断面円形、下部欠損	31	
83	木製品	箸		SK4				長さ15.5cm、幅0.4~0.5cm、白木、断面楕円形、下部欠損	31	
84	木製品	箸		SK4				長さ8.5cm、幅0.5~0.6cm、白木、断面楕円形、上下欠損	31	
85	木製品	箸		SK4				長さ6.9cm、幅0.5~0.6cm、白木、上部は長方形、上下欠損	31	
86	木製品	棒状木製品		SK4-4層				長さ17.7cm、幅0.6~0.7cm、断面短冊状、一方の端部を斜めに切断、上部欠損	31	
87	陶器(尾張型)	片口鉢	第5型式	SK22			(4.5)	口縁外面取り	32	
88	土器	茶釜		SK22	(14.2)		(5.2)	肩部は丸味を帯びる、体部内外面ハケ調整後、指頭圧痕、内外面煤付着	32	6
89	陶器(瀬戸)	丸碗	登窯第6又は7小期	SK22	(13.1)	4.8	6.7	畳付を除き灰釉	32	
90	陶器(瀬戸)	土瓶	登窯第10又は11小期	SK22	9.3	7.0	11.5	濾し穴5箇所、底部周辺を除き柿釉、注口部と板状の耳が欠損、植木鉢に転用(底部中央の穿孔直径1.4cm)	32	8
91	陶器(美濃)	徳利	登窯第5又は6小期	SK22	2.6		(8.4)	撫で肩部だが頸部は短い、頸部に櫛描沈線、体部外面から口縁部内面にかけて鉛釉	32	
92	陶器(常滑)	真焼甕	18世紀後半	SK22	(40.0)		(12.3)	焼成不良、口縁端部は内側に折り返して水平、胴部上半から口縁部にかけて横ナデ、体部内面指頭圧痕	32	9
93	陶器(常滑)	土樋	19世紀後半	SK25		25.5	(53.0)	体部外面丁寧なナデ、体部内面指頭圧痕顕著、基部内面ケズリ	32	9
94	陶器(産地不明)	蓋		SK22	(14.4)		3.7	天井部外面に色絵(緑色)により唐草文	32	
95	磁器(肥前)	瓶		SK22			(9.4)	体部外面に燕子花文、頸部に針金を固定	32	
96	土製品	箱庭道具	五重塔	SK22				高さ4.7cm、幅1.7cm、奥行1.7cm、陶製、底面から直径0.3cmの穴が最上層に貫通、各屋根と基壇に赤色顔料付着	32	10
97	木製品	漆器椀		SK22			(4.8)	腰部の張りが強い、内外面黒色漆、高台剥離	32	
98	瓦	軒平瓦		SD7				焼成不良、平瓦厚1.8cm、顎高3.3cm、瓦当厚1.8cm、瓦当高5.3cm、文様区高3.1cm、中心飾り欠損、唐草文は幅広で短く勾玉状を呈する	33	10
99	陶器(瀬戸美濃)	丸皿	大窯第2段階	SD4			(2.0)	内外面鉄釉、口縁部に灰釉流し掛け	33	7
100	尾張型山茶碗	小碗	第4型式	SD6		4.8	(1.8)	底部外面回転糸切痕、高台に靱殻痕なし、底面摩滅	33	
101	陶器(瀬戸美濃)	壺か瓶	古瀬戸後Ⅲ又はⅣ期	SD6			(8.0)	内外面鉄釉、肩部から口縁部にかけて灰釉流し掛け	33	7
102	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	大窯第4段階前半	SD6	(12.0)		(5.1)	体部上半から内面にかけて鉄釉	33	7
103	陶器(常滑)	甕	10型式	SD9			(6.7)	口縁部の縁帯部(幅4.3cm)が頸部まで垂下	33	6
104	尾張型山茶碗	山茶碗	第6型式	SD13-6層	(15.4)	7.1	4.9	高台は低く幅広い	33	6

表14 遺物観察表(4)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
105	東濃型山茶碗	山茶碗	大畑大洞4号窯式	SD13		(4.5)	(0.8)	底部外面回転糸切痕、内面底部静止指ナデ	33	
106	陶器(瀬戸美濃)	播鉢	大窯第3段階後半	SD13			(5.4)	口縁部の縁帯部(幅1.9cm)の下端が水平方向にやや伸びる、内外面錆蝕	33	7
107	陶器(常滑)	片口鉢Ⅱ類	10型式	SD13			(3.4)	口縁端部を内外に拡張	33	
108	土師器	皿	ロクロ調整	SD13	8.6	4.5	1.9	底部外面に回転糸切痕、内面摩滅	33	
109	陶器(瀬戸)	練鉢	登窯第8小期以降	SD13		(18.0)	(2.6)	底部周辺を除き灰釉	33	
110	白磁(中国)	碗	Ⅱ類	SD14			(2.8)	玉縁状の口縁部(幅0.8cm)	33	7
111	陶器(美濃)	播鉢	登窯第5小期	SK10	(38.3)		(14.7)	口縁部の縁帯部(幅2.8cm)、摺目一単位15本、内外面鉄釉	33	
112	陶器(美濃)	丸碗	登窯第5又は6小期	SK10	(13.6)	5.8	8.8	高台周辺を除き灰釉	34	
113	陶器(瀬戸)	播鉢	登窯第8～11小期	SK10		16.8	(9.3)	摺目一単位12本、内外面鉄釉、底部内面摩滅	34	8
114	土師器	皿	ロクロ調整	SK10	(8.9)	(4.6)	2.0	底部外面に回転糸切痕、口縁端部に煤付着、器面剥離	34	
115	土師器	皿	ロクロ調整	SK10+SK28	(12.0)	(6.0)	1.7	器壁薄い(最小厚0.2cm)、底部外面に回転糸切痕	34	6
116	陶器(瀬戸美濃)	祖母懷茶壺	古瀬戸後期	SK27			(4.0)	外面鉄釉	34	7
117	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	登窯第1小期	SK27	(10.4)		(4.9)	高台周辺を除き鉄釉	34	
118	陶器(美濃)	丸碗	登窯第5又は6小期	SK27		5.0	(4.9)	高台周辺を除き灰釉	34	
119	陶器(瀬戸美濃)	筒形香炉	登窯第5又は6小期	SK27	(14.2)	(9.2)	(8.0)	三足剥離痕なし、体部外面から口縁部内面にかけて灰釉・縁袖掛け流し、口縁端部に敲打・被熱痕	34	8
120	陶器(瀬戸美濃)	蓋(汁次)	登窯第1又は2小期	SK27	3.3		1.5	天井部に突起状の紐、外面鉛釉	34	
121	磁器(肥前)	碗		SK27	10.1	4.3	5.5	体部外面に蝶文	34	8
122	磁器(肥前)	碗		SK27	(12.3)		(5.9)	体部外面に唐草文	34	
123	土師器	皿	C2類	SK27-d層	(9.0)	(6.0)	1.7	外面無調整、内面摩滅	34	
124	土師器	皿	ロクロ調整	SK27	9.3	5.1	2.0	底部外面に回転糸切痕、口縁端部に煤付着	34	6
125	土器	焼塩壺(身)		SK27	5.9	2.0	7.5	輪積み成形、体部内外面に指頭圧痕、外面体部に被熱痕跡	34	6
126	瓦	菊丸瓦A類		SK27				連弁は8弁、瓦当径7.8cm、周縁幅0.9cm、離れ砂を使用	34	10
127	木製品	箸		SK27-d層				長さ13.8cm、幅0.6cm、断面楕円形、下部欠損	34	
128	木製品	箸		SK27-d層				長さ5.9cm、幅0.5cm、断面楕円形、上下欠損	34	
129	尾張型山茶碗	山茶碗	第4型式	SK78		(7.7)	(4.0)	底部外面回転糸切痕、高台に初殻痕なし、底面摩滅、見込みに墨痕	34	6
130	土師器	皿	A1a類	SK78	(10.2)	(4.6)	2.3	体部外面2段ナデ、内面に有機物付着・摩滅のため調整不明	34	
131	土器	清郷型鍋	C5類	SK78			(3.9)	体部外面ナデ、内面板ナデが残る	34	6
132	弥生土器	壺	中期中葉	SK80	(13.9)		(8.5)	口縁端部をわずかに内湾、外面はミガキ調整後に口頭部に直線文(1単位5条・0.8cm)を施す、口縁部内面はハケ調整後に指頭圧痕	34	6
133	陶器(瀬戸美濃)	卸皿	大窯第1段階	SK80			(2.0)	体部外面から口縁部内面に掛けて灰釉	34	7
134	土師器	皿	C1類	SK84	8.0	4.2	1.7	体部外面指頭圧痕、内面摩滅	35	6
135	土師器	皿	B1類	SK88	(10.4)	4.4	2.1	体部外面指頭圧痕、内面摩滅	35	6
136	山茶碗(産地不明)	山茶碗	第5型式	SK95		(7.9)	(2.9)	底部外面回転糸切痕、底部内面摩滅	35	
137	陶器(瀬戸美濃)	四耳壺	古瀬戸後Ⅲ又はⅣ期	SK95			(6.4)	胴部最大径の直下に平行沈線(5条)、内外面灰釉	35	7
138	尾張型山茶碗	山茶碗	第6型式	SK97		5.3	(2.2)	底部外面回転糸切痕	35	
139	尾張型山茶碗	小皿	第6型式	SK97	(8.6)	5.0	2.0	底部外面回転糸切痕、底部内面摩滅	35	
140	陶器(常滑)	水瓶	12世紀後半～13世紀初頭	SK97			(4.9)	肩部外面及び体部内面ロクロ目顕著	35	6

表15 遺物観察表(5)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
141	陶器(尾張型)	片口鉢	第4型式	SK98-1層		(13.0)	(4.6)	外面体部下ケズリ、底部内面摩滅	35	
142	陶器(尾張型)	片口鉢	第10型式	SK98			(2.2)	口縁部外反し鏝状	35	
143	陶器(瀬戸美濃)	瓶子 I か II 類 (梅瓶)	古瀬戸後 I 又は II 期	SK98	(4.1)		(2.2)	頸部は直立し中央に突帯、内外面灰釉	35	7
144	土製品	土鈴		SK101				現存長4.1cm、現存幅3.5cm、穿孔径0.3cm	35	10
145	石器	石鉢		SP21	(29.8)	(16.0)	(11.5)	凝灰角礫岩、底面平坦、全面にノミによる敲打痕、内面摩滅	35	10
146	須恵器	坏身	8世紀後半	SP28		(8.0)	(0.9)	高台低く丸味を帯びる、底部外面静止ヘラ削り、断面が摩滅	36	
147	灰釉陶器	碗A	丸石2号窯式	B5-II層		(5.0)	(1.7)	高台低く丸味を帯びる	36	
148	灰釉陶器	碗C	西坂1号窯式	SP9		(7.0)	(2.1)	高台の断面台形を呈し、やや外側に開く	36	
149	美濃須衛型山茶碗	山茶碗	第5型式	攪乱		(8.8)	(2.1)	底部外面回転糸切痕、底部内面摩滅	36	6
150	尾張型山茶碗	山茶碗	第5型式	攪乱		(8.8)	(3.6)	底部外面回転糸切痕、底部内面摩滅・墨痕	36	
151	尾張型山茶碗	山茶碗	第6型式	SK81	(15.4)	6.6	5.3	底部外面回転糸切痕、底部内面静止指ナデ	36	
152	東濃型山茶碗	山茶碗	明和1号窯式	C1-I b層		(4.7)	(2.7)	外面底部板目圧痕、底部内面静止指ナデ	36	6
153	東濃型山茶碗	山茶碗	脇之島3号窯式	D10-II層			(2.6)	底部外面回転糸切痕、高台が痕跡的に残る、底部内面静止指ナデ	36	6
154	陶器(尾張型)	片口鉢	第7又は8型式	B6-II層			(4.0)	口縁端部に溝が一周	36	
155	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	古瀬戸後IV期新	SK64			(6.1)	高台周辺は錆釉、体部下半から内面に掛けて鉄釉	36	7
156	陶器(瀬戸美濃)	卸皿	古瀬戸後III期	D8-III層			(2.4)	体部下半を除く内外面に灰釉	36	7
157	陶器(瀬戸美濃)	中皿	古瀬戸後I期又はII期	SK58		(7.4)	(1.9)	底部外面に回転糸切痕、底部周辺露胎、内面灰釉	36	7
158	陶器(瀬戸美濃)	卸目付大皿	古瀬戸後III期	D8-III層			(6.9)	体部下半を除く内外面に灰釉	36	7
159	陶器(瀬戸美濃)	花瓶II類(仏花瓶)	古瀬戸中I又はII期	SK6+SK25			(5.7)	頸部に耳輪貼付、体部外面に印花文、鉄釉	36	7
160	陶器(瀬戸美濃)	四耳壺	古瀬戸中I又はII期	SK33			(2.2)	玉縁状の口縁部(幅1.1cm)、内外面灰釉	36	
161	陶器(瀬戸美濃)	四耳壺	古瀬戸前II期	C1-I b層		(8.8)	(2.3)	幅広の高台、外面に灰釉	36	
162	陶器(瀬戸美濃)	大型筒型容器	古瀬戸後III期	D9-III層			(10.4)	口縁端部を内側に折り返す、内外面灰釉	36	7
163	陶器(瀬戸美濃)	筒型碗(志野茶碗)	大窯第4段階後半	B3・4-I c層			(3.5)	内外面長石釉・鉄絵	36	7
164	陶器(瀬戸美濃)	志野皿	大窯第4段階後半	SK3		(8.6)	(2.0)	高台内を除き長石釉	36	7
165	青磁(中国)	碗	龍泉窯系I-2類	D11-III層			(1.8)	内面劃花文	36	7
166	青磁(中国)	碗	龍泉窯系碗I-6類	SK6			(2.2)	外面は連弁文上の縦方向櫛目、内面はヘラ状工具で施文	36	7
167	青磁(中国)	皿	同安窯系I-2類	C1-I b層		4.5	2.2	底部内面に櫛掻文、底部外面露胎	36	7
168	白磁(中国)	碗	VII-1類	SK31		7.0	(3.1)	底部内面の釉を掻き取っている、見込みの段はなし	36	7
169	白磁(中国)	碗	VII-2又は3類	D9-III層		6.6	(2.5)	見込みに段をもち、見込みの白磁釉を輪状に掻き取る	36	7
170	陶器(瀬戸美濃)	天目茶碗	登窯第5小期	攪乱	(9.0)		(3.6)	内外面鉄釉	36	
171	陶器(瀬戸)	湯呑	登窯第10小期	攪乱	(9.1)	3.9	5.5	口縁部外面に呉須絵(花文)、高台周辺を除き灰釉	36	8
172	陶器(瀬戸美濃)	大皿	登窯第1又は2小期	SK1	(26.8)		(5.0)	三足欠損、底部を除き鉄釉	36	8
173	陶器(瀬戸美濃)	火鉢	登窯第9小期	SK6+攪乱	(22.4)	16.8	12.3	三足、底部周辺を除き体部下半から口縁部内面にかけて鉄釉	36	8
174	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	登窯第2小期	B3-I d層			(3.8)	口縁部の縁帯部(幅1.3cm)、内外面鉄釉	36	
175	陶器(瀬戸美濃)	搦鉢	登窯第6小期	SK28			(7.9)	口縁部の縁帯部(幅3.2cm)、内外面鉄釉	36	
176	陶器(瀬戸)	甕	登窯第9小期	攪乱	(36.3)		(22.2)	胴上部に沈線(7条)、内外面に柿釉	37	8
177	陶器(瀬戸)	甕	登窯第11小期	SK33		26.0	(21.1)	高台周辺を除き柿釉、体部上半から口縁部にかけて鉄釉流し掛け、高台内に墨書	37	7
178	陶器(美濃)	徳利	登窯第11小期	SK6	3.4	11.4	25.3	体部外面から口縁部内面に掛けて灰釉、頸部はやや外反し口縁端部を内傾、体部外面に焼成前のヘラ書き(「森田」)	37	8
179	陶器(常滑)	火鉢	18世紀後半	攪乱	(25.4)	(17.6)	(6.2)	内外面ナデ、体部内面に指頭により「×」	37	9
180	陶器(常滑)	火鉢	19世紀後半	攪乱	(16.2)	(13.5)	12.3	体部下半はヘラによるナデ、体部上半は横ナデ、体部内面指頭圧痕顕著、口縁端部と底部内面被熱痕	38	9
181	陶器(常滑)	赤物甕	17世紀前半	SK3	(40.0)		(14.9)	口縁部内側の突出は短く水平方向に伸びる、縁帯部は斜め上に短く伸びる、体部内面に煤付着	38	9
182	陶器(常滑)	赤物甕	19世紀前半	攪乱			(8.5)	口縁部内側の突出と縁帯部の断面が丸味を帯びる	38	9
183	陶器(常滑)	片口鉢	17世紀	SK13			(5.0)	口縁端部を下方に拡張、体部内外面ともに板状工具で縦ナデ、口縁部内外面ともに横ナデ	38	

表16 遺物観察表(6)

掲載番号	種類	器種	時期、分類名	出土地点 (+は接合関係)	口径 (cm)	底径 台径 (cm)	器高 (cm)	備考	挿 図 番 号	図 版 番 号
184	陶器(産地不明)	鉢		SK6	(14.2)		(7.6)	色絵(緑色)により唐草文	38	8
185	陶器(関西系)	播鉢		B3-I d層			(4.6)	赤褐色の胎土、口縁部の縁帯部(幅2.3cm)、焼締陶器	38	
186	陶器(産地不明)	植木鉢		攪乱		(10.2)	(4.8)	削り出し輪高台、体部下端に三足、高台を除き長石釉	38	
187	陶器(産地不明)	土瓶か雪平	江戸後期	攪乱		(10.0)	(2.1)	底部周辺を除き長石釉、体部下端に刻印(「清山」)	38	
188	陶器(肥前)	碗	III又はIV期	SK13+SK10	(11.1)	4.3	6.5	体部外面に白化粧土を刷毛塗り	38	8
189	陶器(肥前)	皿	III又はIV期	SK29	(12.8)	4.6	3.6	内面銅緑釉、見込みを蛇ノ目釉剥ぎ	38	8
190	陶器(肥前)	皿	IV又はV期	攪乱		(13.0)	(3.1)	褐色の胎土、高台周辺露胎、内面に白化粧を掛け刷毛目模様、見込みに砂目	38	8
191	磁器(瀬戸)	広東茶碗	登窯第10小期	攪乱	(10.2)	(4.8)	5.6	体部外面に呉須絵(庭園)、底部内面中央に銘款(「壽」)	38	
192	磁器(産地不明)	角手塩皿		A3-I層	8.0	4.9	2.1	貼付け輪高台、高台内に銘款(「芭蕉」カ)、見込みに栗文、口縁端部に敲打・被熱痕	38	8
193	磁器(肥前)	鉢		SK6	(15.1)		(2.6)	体部内外面唐草文	39	
194	磁器(肥前)	碗		B-C1・2-I層		5.2	(3.3)	底部内面に折枝梅文、高台内に銘款(「壽」)	39	
195	磁器(肥前)	皿	III期	攪乱	(19.4)		(4.1)	体部内面篋彫(葉文)、口縁端部ベベラ、内外面青磁釉	39	8
196	磁器(肥前)	猪口	III期	SK13+SK7	(7.9)	2.5	4.6	花卉5単位、内外面白磁釉	39	8
197	磁器(肥前)	蓋(鉢)	III期?	攪乱	(15.2)		(4.1)	天井部外面に窓宝文・牡丹唐草文	39	8
198	土師器	皿	B2類	SK6	(13.0)	(7.0)	1.6	体部は直線的に立ち上がる、口縁端部は無調整、底部内面から体部にかけて「の」字状にナデ上げ	39	6
199	土師器	皿	C2類	SP11	7.8	3.0	1.7	外面無調整、口縁端部に煤付着	39	
200	土師器	皿	C2類	SK30	7.4	5.1	1.7	外面無調整、内面摩滅	39	
201	土師器	皿	D類	SK29	(6.1)	(2.8)	1.1	内外面無調整	39	
202	土師器	皿	ロクロ調整	SK28	(9.4)	(5.0)	2.1	底部外面に回転糸切痕、口縁端部に煤付着	39	
203	土器	内耳鍋	B類	攪乱			(6.0)	口縁部が内傾し端部は平坦、体部外面ナデ調整、内面ハケ調整	39	6
204	土器	ホウロク	J4類	SP23			(3.5)	体部外面上半部にナデと指押え、口縁部内側にハケ調整	39	
205	土器	焼塩壺(蓋)		攪乱	(7.3)	(5.4)	1.4	125と胎土・焼成・色調が類似、外面天井部に板目圧痕	39	6
206	土製品	人形		SK51				高さ3.8cm以上、幅2.9cm、奥行2.0cm、陶製、左側に犬を従える、頭部欠損、黄褐色の施釉	39	10
207	土製品	型		攪乱				長さ5.4cm、幅4.0cm、奥行1.5cm、恵比寿(豊富な腹部、頭に鯛を抱える所作)	39	10
208	土製品	土錘		攪乱				長さ5.7cm、最大径1.5cm、最小径0.9cm、孔径0.5cm	39	
209	石器	砥石		SK8				粘板岩製、仕上砥、長さ14.6cm、幅5.1cm、厚さ1.2cm	39	
210	木製品	箸		SK29-b層				長さ14.8cm、幅0.5~0.6cm、部位によって断面形が異なり整っていない、下部欠損	39	
211	木製品	箸		SK29-b層				長さ12.3cm、幅0.6cm、断面隅丸方形、下部欠損	39	
212	木製品	棒状木製品		SK29-b層				長さ13.7cm、幅0.4cm、断面方形、先端を鋭利に尖らせ末端を斜めに切断	39	
213	木製品	箸		SK13-c層				長さ3.5cm、幅0.7cm、断面楕円形、上下欠損	39	
214	瓦	軒丸瓦		I層				瓦当径15.9cm、巴文は右巻きで尾は短い、珠文13個・珠文径1.6cm、文様区径11.5cm、周縁幅2.4cm、離れ砂を使用	40	10
215	瓦	菊丸瓦B類		B4-II層				焼成不良、連弁は12弁、瓦当径7.5cm、離れ砂を使用	40	10
216	瓦	飾り瓦(家紋瓦?)		SK6				瓦当径8.8cm、厚さ2.1cm、七曜紋、離れ砂を使用	40	10
217	瓦	軒平瓦		B2-I層				平瓦厚1.6cm、顎高3.0cm、瓦当厚1.8cm、瓦当高4.6cm、文様区高2.3cm、中心飾りは丸味のある桐文、重複する「〇」の刻印	40	10
218	瓦	軒棧瓦		攪乱				瓦当径9.2cm、巴文は左巻きで尾は長い、珠文13個・珠文径0.7cm、文様区径7.1cm、キラコを使用	40	10
219	銭貨	寛永通寶		SK21				直径2.4cm、古寛永	40	
220	銭貨	寛永通寶		攪乱				直径2.4cm、古寛永	40	
221	銭貨	寛永通寶		A3-I層				直径2.5cm、新寛永	40	
222	金属製品	雁首		SK2				銅製、長さ7.3cm、火皿径1.6cm、小口径1.0cm	40	
223	金属製品	吸口		SK2				銅製、長さ6.8cm、小口径0.8cm、口付径0.3cm	40	
224	金属製品	吸口		SK29-b層				銅製、長さ7.1cm、小口径0.8cm、口付径0.3cm	40	
225	金属製品	簪		SK29-c層				銅製、長さ7.9cm、直径0.2cm、鍍金が部分的に残る	40	

注)口径・底径・台径・器高における括弧内の数値は、現存値である。「?」は断定することはできないが、その可能性があるもの。

表18 出土遺物一覧表(2)

遺構名	旧番号、層位等	古代以前		中世				中近世			近世		近代陶磁器	時期不明	その他					合計		
		弥生土器	須恵器、灰釉陶器等	無釉陶器(山茶碗類、片口鉢)	施釉陶器(古瀬戸、大窯)	中国産陶磁器	土器(伊勢型産鍋・羽釜)	常滑産陶器	土師器(皿)	土器(内耳鍋、茶釜)	陶磁器	土器(ホウロク、焼塩壺)			土製品等	瓦	石器	木製品	金属製品等			
SK58	S033				2		1		1	1		1										6
SK59	S129			1																		1
SK60	S131								1	2	1	7		1								12
SK61	S132		1	1	1					2												5
SK63	S192											1										1
SK64	S157	2	1	3	2																	8
SK65	S188				1																	1
SK66	S193			1					1		3	3										8
SK67	S194			2	1									1								4
SK68	S195			1					1	6	1											9
SK70	S136	1											1									2
SK72	S141	1			4																	5
SK76	S146									1												1
SK78	S189		1	24			1		2	7		1										36
SK79	S201			5			1		2	2												10
SK80	S148	2		1	1																	4
SK81	S199			18	1	1			10	15	6											51
SK82	S184			3	1					10	2		1									17
SK83	S185			1						5	1											7
SK84	S183									1												1
SK85	S181	1								1												2
SK87	S200			2	1						8				1							12
SK88	S173			8			1	3	12													24
SK89	S178			2																		2
SK91	S171			4			1	1	11	1												18
SK92	S172	1		3					4													8
SK94	S196			1																		1
SK95	S169			8	1				2	16	1											28
SK97	S166			4					1	1	2											8
SK98	S165			5	1				3	7	1											17
SK99	S167			1					1	2												4
SK100	S164			1	4				4	3				1								13
SK101	S163			5	1				1	10										1		18
SP2	S089									1												1
SP4	S055			1																		1
SP5	S022									2												2
SP6	S057									1												1
SP7	S050												1									1
SP9	S085		2	3					4	2												11
SP11	S034									1			1									2
SP12	S053									1			1									2
SP15	S077				1					1												2
SP17	S175									1												1
SP19	S191									1												1
SP21	S203																					2
SP23	S140										1		1					1	1			2
SP24	S144											1										1
SP26	S198				2				1	4												7
SP27	S179				3	1					9											13
SP28	S197		1		3				1	9												14
SP30	S187									1												1
SP38	S064				1																	1
SA1-P1	S134											1										1
SA1-P4	S147				1							1										2
小計		33	36	294	66	13	11	81	300	78		13	22	12	12	71	4	41		5		
狭小区 以外	I層	1	5	42	12	1		10	41	19		652	15	8	2	3	4				4	820
	II・III層		1	23	6			3	28	9		336	1		1	3	9				1	421
狭小区	不明				1			2		1		24		1								29
	I層		1	7	1				8	1		26			2							46
	II層		1	6	7	2			24	4		9										53
III層		6	34	17	2	3	10	61	12		3			1			1				150	
全域 攪乱		2	1	16	10	0	0	14	14	9		557	11	6	4	4	7	1	0	1		657
小計		3	15	128	54	5	3	39	176	55		1,607	27	15	10	10	20	2	0	6		2,175
合計		36	51	422	120	18	14	120	476	133		3,366	40	37	22	22	91	6	41	11		5,026

※遺物が出土した遺構に限り、接合後破片数(注記できない微細な遺物を除く)を掲載した。

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節以降に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び所見を述べる。

出土木製品の樹種同定（第2節）、出土漆器碗の塗膜分析（第3節）

実施の経緯 SK4とSK25から漆器6点が出土した。内5点は蒔絵装飾を施している。発掘区は近世戸田家の武家屋敷の位置に当たる。漆器は、木地材質や漆工過程によって品質の良さが分かり、出土した蒔絵装飾を施す漆器は、当屋敷地に居住する武家家族の生活様式や経済状態、嗜好等を示す可能性がある。漆器の木胎樹種同定及び塗膜分析を行うことで、当遺跡の性格を考察する一端となると考え、分析を実施した。

出土木製品の樹種同定結果の概要 木胎はブナ属とトチノキであった。すべて横木取りであった。中世以降の漆器の木地としては寸法の安定性や緻密さ・堅さにやや欠けるが、入手、加工がしやすく、大量生産品として多用される傾向にある樹種である。

出土漆器碗の塗膜分析結果の概要 漆器は、炭粉渋下地に内面が赤色漆、外面が透明漆をそれぞれ1層塗る構造であった。赤色漆層はベンガラであった。使用された漆は劣化したものと同定された。

結果からの所見 ブナ材やトチノキ材はケヤキ材より、炭粉渋下地はサビ下地より、ベンガラ漆は水銀朱漆より、1層塗布は多層塗布よりそれぞれ劣るとされる¹⁾。また、塗布に使用された漆は劣化が認められ、不純物を含む粗悪品であった可能性が考えられる。さらに、上品な漆器に施される布着せ補強は見受けられず、蒔絵装飾は肉眼観察から金ではなく、より安価な銀又は錫によるものの可能性が高い。これらのことから、屋敷地の武家は規格性のある大量生産品を使用していたと考えられる。17世紀後半は、商家が大きな財を成す一方で、武家は幕府による奢侈禁止令を受けていた時期である。戸田家が当時の簡便な材質と技法で製作された漆器を使用していたことは、歴史的背景や経済的状況等多様な要因があった可能性を示唆するものである。

注

1) 北野信彦2005『漆器の考古学 出土漆器からみた近世という社会』、あるむ

第2節 出土木製品の樹種同定

1 はじめに

当遺跡から出土した木製品6点について樹種同定を行った。分析は、小林克也、黒沼保子（株式会社イビソクの協力機関である株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

試料は、SK22から出土した椀が1点と、SK4から出土した椀が3点と蓋が2点の、合計6点である。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムク

ロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察及び同定、写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のブナ属とトチノキの2分類群が確認された。木取りはすべて横木取りであった。結果の一覧を表19に示す。

表19 樹種同定結果一覧

No.	掲載番号	遺構名	器種	樹種	木取り
1	97	SK25	椀	トチノキ	横木取り
2	74	SK4	蓋	ブナ属	横木取り
3	77	SK4	椀	トチノキ	横木取り
4	76	SK4	椀	ブナ属	横木取り
5	73	SK4	蓋	トチノキ	横木取り
6	75	SK4	椀	ブナ属	横木取り

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真9に示す。

(1) ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真9 1a-1c (No. 2)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔

は単一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬及び緻密で、靱性があるが保存性は低い。

(2) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 写真9 2a-2c (No. 3)

やや小型の道管が、単独若しくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

トチノキは暖帯から温帯に分布する落葉高木で、ある。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

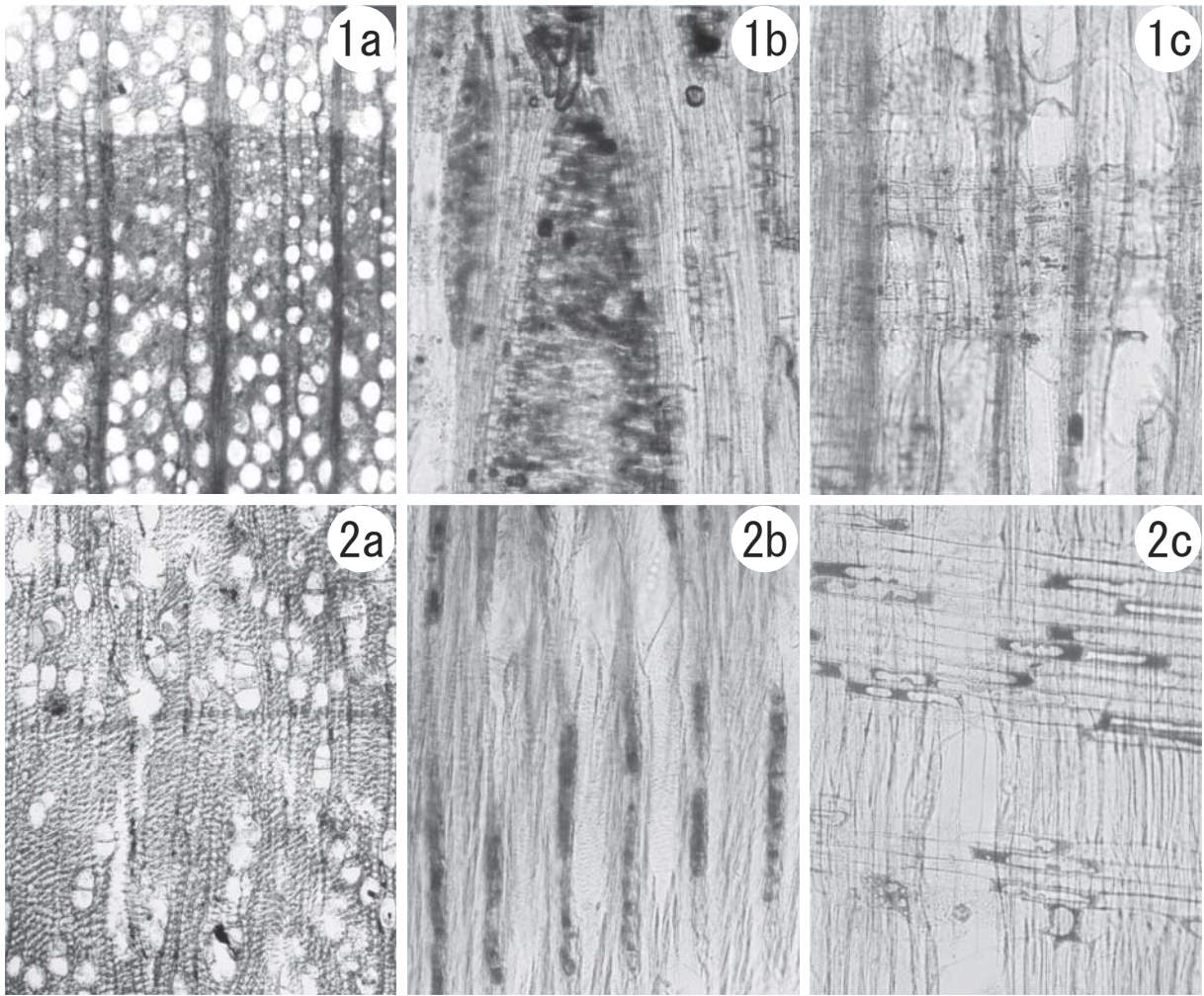
4 考察

SK22とSK4出土の椀は、どちらもトチノキであった。また、SK4出土の蓋はトチノキが1点とブナ属が3点確認された。トチノキとブナ属は、中世以降は漆器の林地として全国的に多用される傾向がある²⁾。したがって、今回の分析結果も整合的であった。

注

1) 次の文献を参考にした。平井信二1996『木の大本科』、朝倉書店

2) 伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』、海青社



スケール： 

写真9 出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. ブナ属 (No.2)、2a-2c. トチノキ (No.3)

a : 横断面 (スケール=250 μ m)、b : 接線断面 (スケール=100 μ m)、c : 放射断面 (スケール=100 μ m)

第3節 出土漆器碗の塗膜分析

1 はじめに

当遺跡から出土した漆器碗について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。分析は竹原弘展、藤根久、米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

分析対象は、土坑SK 4から出土した漆器碗1点である（表20）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製

表20 分析対象一覧

No.	掲載番号	出土遺構	器種	特徴	塗膜分析面
1	77	SK4	碗	内面赤色、外面黒色	両面

して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察及びX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜表面から少量削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光（株）製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆などの吸収スペクトルと比較・検討した。塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機及び精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約50 μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、主に赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約20 μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

写真10に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。図41に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率（%R）、横軸は波数（Wavenumber（ cm^{-1} ）；カイザー）である。各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表21）。また、表22に赤色塗膜層のX線分析結果を示す。

3 結果

内面の塗膜薄片では、木胎a層、炭粉と柿渋とみられる下地b層、赤色漆層c層が観察された（写真10-1a、1b）。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール

表21 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

を特徴づけるウルシオール

の吸収の一部（吸収No. 6～No. 8）がみられるほか、漆などの有機物にみられる炭化水素の吸収（吸収No. 1及びNo. 2）が明瞭にみられた（図41-A）。1080 cm^{-1} に見られる大きな吸収は、劣化に伴うゴム質の吸収である。赤外分光分析の結果から、劣化の進んだ漆と同定さ

れた。赤色漆層c層からは、X線分析で鉄 (Fe₂O₃) が検出され (表22)、ベンガラの使用と推定された。

表22 赤色塗膜層のX線分析結果 (mass%)

No.	塗膜層	C	SiO ₂	SO ₃	CaO	Fe ₂ O ₃
1	内面 c層	45.99	18.61	—	—	35.40

外面の塗膜薄片では、木胎a層、炭粉と柿渋とみられる下地b層、透明漆層c層が観察された (写真10-2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール吸収の一部 (吸収No. 6 ~ No. 8) がみられるほか、漆などの有機物にみられる炭化水素の吸収 (吸収No. 1 及びNo. 2) が明瞭にみられ、劣化の進んだ漆と同定された (図41-B)。各塗膜の特徴を表23に示す。

4 考察

当遺跡から出土した漆器碗について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、下地は炭粉渋下地と推定され、そ

表23 塗膜分析結果

No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層	
1	碗	内面赤色塗膜	炭粉渋下地	1層	赤色漆層 (ベンガラ)
		外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1層	透明漆層

の上に内面は赤色漆層、外面は透明漆層が各1層塗られる構造と考えられた。赤色顔料には、ベンガラが使用されていた。

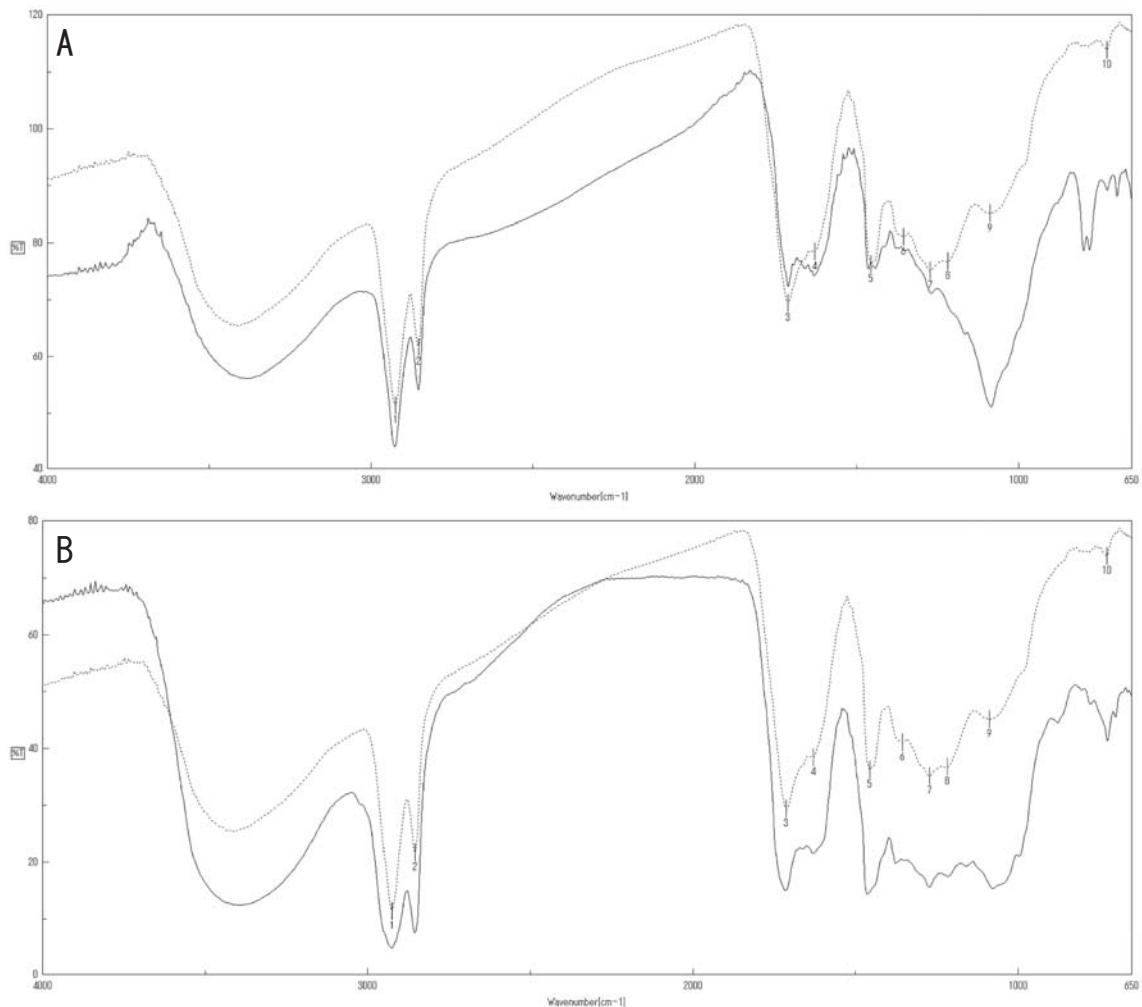


図41 塗膜層の赤外分光スペクトル A. 内面 B. 外面
(実線：塗膜層、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

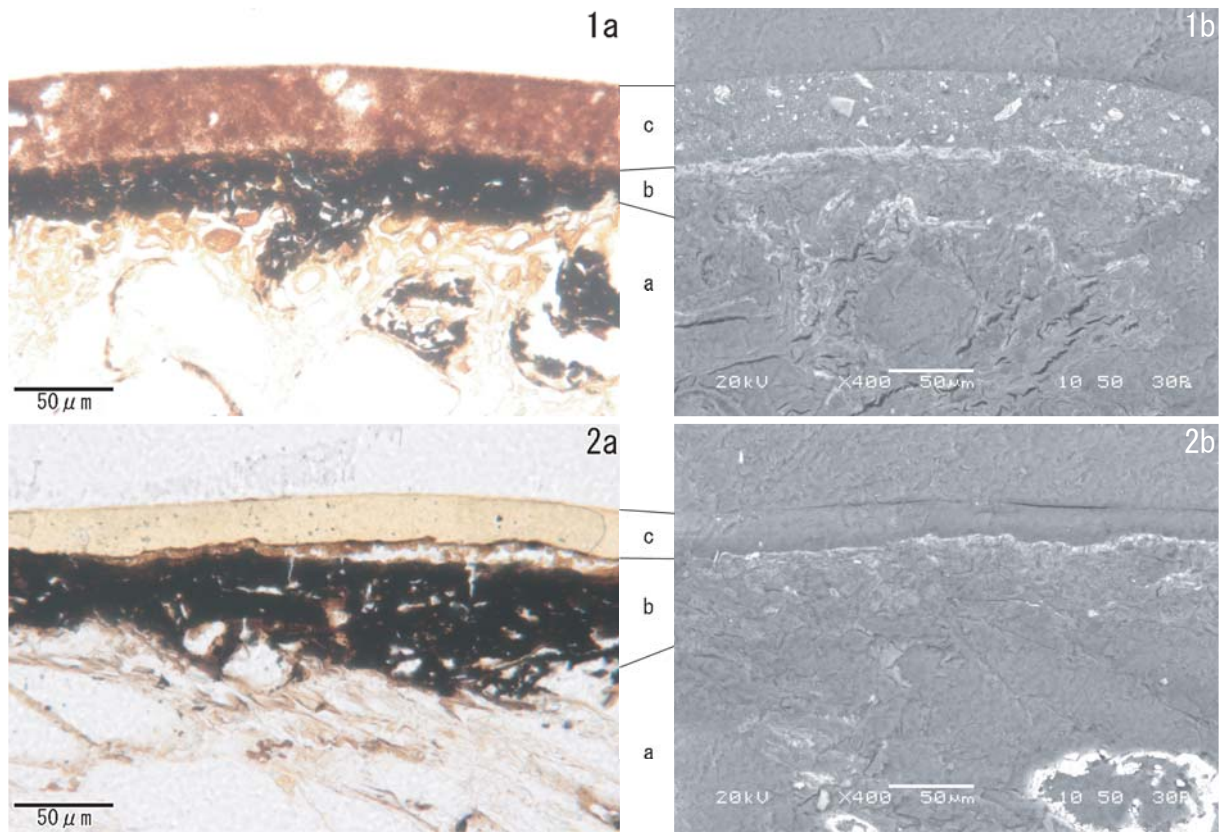


写真10 漆器碗の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b)

1. 碗内面赤色塗膜 2. 碗外面黒色塗膜

第5章 総括

第1節 遺物

1 中世の遺物

中世の遺物（注記ができない小片を除く）のうち、山茶碗類については底部が残存する個体、片口鉢・常滑産陶器・土師器皿については口縁部が残存する個体、古瀬戸・大窯・中国産陶磁器については全ての個体を対象にして、接合後破片数を計測した¹⁾。なお、近世・近代の遺構等により中世の遺構が削平されて

表24 山茶碗類底部・片口鉢口縁部の破片数

	尾張型										東濃型										その他	合計			
	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式	第11型式	小計	第3型式	谷迫間2	丸石3・窯洞1	浅間窯下	白土原1	明和1	大畑大洞4	大畑大洞4新	大洞東1	脇之島3			生田2	小計	
山茶碗	2	8	37	15						62	2	5	5		1	1			1	1	1	1	17	12	95
	1			1						2	2												2		
小碗		1	1							2	1	1											2		5
				1						1													1	1	
小皿			2	1					1	4												1	1	1	10
				2						2								1					1		
																		1					1		
片口鉢			1	1						2													0	1	4
					1					1													0		
確定	2.0	9.0			0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	70	3.0	6.0	5.0	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	1.0	2.0	20			
按分	0.5	0.5	2.0	2.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	6	1.0	1.0	0.0	0.1	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	4	14	114	
総数	2.5	9.5			0.5	0.5	0.0	1.0	0.0	76	4.0	7.0	5.0	0.1	1.3	1.3	0.3	1.3	1.3	2.3	24				

※「その他」：美濃須衛型2点(山茶碗1, 片口鉢1)と産地不明12(山茶碗11, 小皿1)を合計した。

いるため、発掘区全体の遺物組成を明らかにすることは困難である。まず、発掘区全体の傾向について述べる。山茶碗類と片口鉢の集計結果は、表24のとおりである。山茶碗第3及び第4型式では、尾張型と東濃型の数量差はほとんどないが、第5及び第6型式では尾張型が優勢となり、第7から第

11型式まで東濃型山茶碗が少量出土した。片口鉢については尾張型が極少量伴う。

常滑産陶器は、6型式から12型式までの甕・片口鉢・水瓶（体部の破片のみ）が少量出土した（表25）。

土師器皿のうち中世前期は11点と少なく、中世後期以降、

表25 常滑産陶器の破片数

	口縁部										不明	合計	体部の破片数	
	3型式	4型式	5型式	6型式		7型式	8型式	9型式	10型式	11型式				12型式
	a	b												
甕				1		2		2				6	22	
片口鉢								2				2	1	
水瓶													1	
合計	0	0	0	1	0	2	0	4	0	1	0	8	24	

表26 土師器皿の口縁部破片数

	中世前期					中世後期～近世							分類不明	小計	合計
	A類			B類		A類	B類		C類	D類	ロクロ				
	1a	2b	2c	1a	2a	3	1	2	1	2					
接合後破片数	3	1	2	1	4	1	10	28	10	129					
							60				1	26	71		
小計	6			5		1	98		139						
口径別	7～8.9cm							1	1	15	1	5		23	347
	9～13.9cm		1					1	2	9		3		16	
	14cm以上							1					1	1	
小計	1			0		0	5		25		1	9	0	41	

表28 古瀬戸・大窯の器種別破片数(2)

器種		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					大窯						合計				
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新	1	2	3前	3後	4前	4後					
瓶・壺・甕	壺 I	四耳壺(無文)		2																				6	
		四耳壺(文様有)					1						1												
		壺(鉄釉・文様有)											1												
	壺 I 又は 瓶	壺か瓶(灰釉・有文)									4														23
		壺か瓶(灰釉・文様有)						1			4		1												
		壺か瓶(鉄釉・無文)		2				3					1												
		壺か瓶(鉄釉・文様有無?)												1											
	壺 II	祖母懷茶壺												3										3	
		瓶	梅瓶(灰釉・無文)									1													5
	梅瓶(灰釉・文様有無?)										1														
	瓶子Ⅲ類(灰釉・無文)												1												
	仏花瓶						1																		
	その他	蓋												1										2	
その他												1													
器種不明(灰釉)													1										4		
確定		0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	9.0	4.0	5.0	3.0	6.0	0.0	2.0	1.0	5.0			38		
按分		0.5	0.5	0.5	0.5	2.8	2.8	2.3	2.3	15.1	15.1	8.6	10.4	7.9	2.5	2.5	2.8	2.3	0.8	0.8			81		
合計		0.5	2.5	0.5	0.5	2.8	2.8	2.3	2.3	15.1	16.1	17.6	14.4	12.9	5.5	8.5	2.8	4.3	1.8	5.8			119		

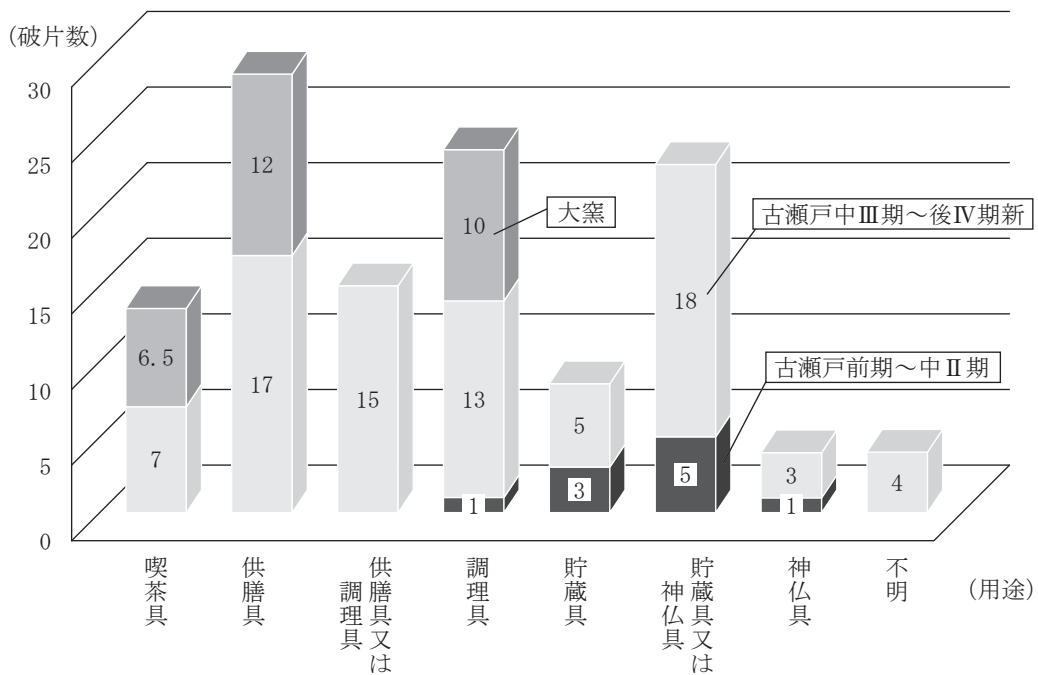


図42 古瀬戸・大窯製品の用途別分類

表29 中国産陶磁器の器種別破片数

種別	器種	窯	型式	破片数	合計
青磁	碗	龍泉窯系	I-2	1	8
			I-5	2	
			I-6	1	
			不明	1	
	不明		2		
	皿	同安窯系	I類	1	
不明			2		
白磁	碗		II類	1	7
			IV類	1	
			VIII類	2	
			不明	3	
その他	天目茶碗			1	1
合計				18	

中国産陶磁器は、中世前期を中心とする各種型式が少量出土したが、青磁・白磁はほぼ同数である（表29）。

次に、中世の遺構を確認した狭小区の傾向を述べる。遺構の時期決定に際しては、一定量の遺物群における各種の時期別組成の変化により時間軸を設定した上で、出土遺物の内容や組成を基に位置づける必要がある。ここでは瀬戸美濃産陶器の最新型式を把握した上で、土師器皿の様相を参照することとした。西濃地区の中世後期土師器皿の様相については、資料の制約もあって明らかではないが、ひとまず各種の出現・ピークの時期は岐阜地区のそれと同じと仮定した（岐阜地区における各種の出現時期と古瀬戸製品との共伴関係は、B1・C1類は美濃中世後期I期で古瀬戸後III～IV期古段階の製品が共伴し、B2・C2類は同II期で古瀬戸後IV期古及び新段階の製品が共伴するといふ⁵⁾）。遺構の切り合い関係や出土遺物の最新型式を基に、狭小区の遺構の時期決定を行った結果（表30）、中世前期（SK97）と登窯期（SK82・84・85）の可能性のある遺構を含むものの、主体となる時期は古瀬戸後IV期から大窯第2段階頃までである。遺構の下限の時期については、遺構面直上のIII層から出土した土師器皿がB類とC2類がほぼ同数で、残存する個体では中大型品が目立たないため、大窯期の後半には降らないと判断した。しかし、登窯期の遺物もIII層から少量出土したことから、大窯期後半から登窯期にかけての堆積土中に遺構内の遺物が分散・混入したと推測する。なお、狭小区における土師器皿の出土点数は多く、表土から遺物包含層まで（I～III層）を含めると口縁部の点数は165点を数え、発掘区全体の約47.6%を占める。今後、発掘区周辺との比較検討が必要ではあるが、狭小区において多量に土師器皿が消費・廃棄された可能性がある。

表30 狭小区における遺物包含層と遺構の時期

	土師器皿(中世後期～近世口縁部)の破片数							山茶碗類 (ただし最新型式の破片数のみ記載)	山茶碗類以外の陶器	土層・遺構の時期	時期決定の根拠 (凡例:新>古)
	B1	B2	B(細分不明)	C1	C2	ロクロ	不明				
III層		1	12	1	13	1	11	3(登窯期)	大窯期後半～登窯期	出土遺物	
SD4								1(大窯2・丸皿)	大窯第2段階～登窯期	出土遺物	
SK79			2					1(5型式)	古瀬戸後IV期新以降	>SK81	
SK81		2	1		2		5	1(6型式) 1(後III・折縁小皿) 1(常滑甕10型式)	古瀬戸後IV期新以降		
SK82			2		4		2	1(第5型式)	1(登窯期)	登窯期	
SK83			2						古瀬戸後IV期新以降	>SK81	
SK84					1				登窯期	>SK82	
SK85						1			登窯期	>SK82	
SK87		2	1	2			1	1(後III～IV・器種不明)	古瀬戸後IV期古		
SK88	1	1	4	1	1		4	1(第4型式)	古瀬戸後IV期古以降	>SP27, 出土遺物	
SK91	2		5				1	1(第5型式)	古瀬戸後IV期古以降	>SK88・92	
SK92	2		1				1	1(第3型式)	古瀬戸後III～IV期		
SK95		1	3	1	1		4	3(第5型式)	1(後III～IV・四耳壺)	古瀬戸後IV期古以降	出土遺物
SK97							3	3(第6型式)		中世前期	<SK98
SK98					1		4	1(第10型式)	1(後I～II・梅瓶)	古瀬戸後IV期古以降	出土遺物
SK100						4	1		1(後IV新・播鉢)	古瀬戸後IV期新以降	出土遺物
SK101			1				4		1(大窯2・丸皿)	大窯第2段階以降	出土遺物
SP26		1	1				2	1(第5型式)		古瀬戸後IV期古	<SK88, 出土遺物
SP27			5		1		3	1(第6型式)	1(後IV古・卸目付大皿)	古瀬戸後IV期古以降	出土遺物
SP28		1	3	3			2			古瀬戸後III～IV期	<SK88, 出土遺物

※遺物を出土した遺構のみ掲載し、時期決定に際して重視した遺物の欄を、アミかきで表示した。

2 近世の遺物

掲載遺物の選定は、遺物の残存状況に影響されやすいため、特定の時期・器種に偏る可能性がある。そのため、遺跡の実態を検討する上で出土量も多く使用頻度が高いと考えられる播鉢を対象に、以下に分析する（表31）。出土した播鉢は、関西系1点（185）を除いて全て瀬戸美濃産である。大窯期の系譜を引く播鉢Ⅰ類が大半で、玉縁状の口縁をもつ播鉢Ⅱ類は3点と少ない。時期を特定できない按分資料を含めると、全時期の資料が確認できる。登窯第1小期から第3小期にかけて少なく推移するが、第4小期に増加して第8小期に最大のピークとなり、第9小期に減少する。

発掘区内の播鉢の出土状況から、次の3点を指摘できる。

- ①播鉢は少なくとも第2小期以降、近代まで継続して出土した。大窯第4段階後半から登窯第1小期にかけて播鉢の出土数は少ないが、播鉢以外の器種も出土しており、当該期の発掘区において遺跡の断絶があるのか否かは判断できない。
- ②SD2出土の播鉢以外の器種においても、第8小期（18世紀後葉頃）の遺物量は多く、遺物の残存状況は良い。播鉢以外の器種との比較・検証が必要ではあるが、発掘区の登窯期における瀬戸美濃産陶器の出土傾向を反映している可能性がある。
- ③播鉢の継続的な出土は、発掘区が登窯期を通じて播鉢を消費・廃棄する場所であったと考えられる⁶⁾。

表31 播鉢の口縁部破片数

	第1段階				第2段階			第3段階				関西系	近代	合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11			
播鉢Ⅰ類		2	2	9	10	5	11	16	4	2				73
	1				1			1	9				4	
	2				1				1				83	
播鉢Ⅱ類					1	2								3
その他の播鉢												1	2	3
確定	0.0	2.0	2.0	9.0	11.0	7.0	11.0	16.0	4.0	2.0	0.0	1.0	2.0	67
按分	1.0	1.0	0.5	0.5	0.3	0.8	0.8	0.5	1.0	5.0	4.5	0.0	0.0	16
合計	1.0	3.0	2.5	9.5	11.3	7.8	11.8	16.5	5.0	7.0	4.5	1.0	2.0	83

注

- 1) 「確定」とは各分類に確定した遺物、「按分」とは複数の分類に均等割りした遺物を指し、小数点第2位を四捨五入し少数点第1位までの数値を記載した。
- 2) 井川祥子2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』、高志書院
- 3) 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2011『財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター研究紀要』第17輯
- 4) 藤澤良祐2007「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』、愛知県史編さん委員会
- 5) 前掲2)と同じ。
- 6) 発掘区内では、播鉢を消費する遺構（台所）は確認できなかった。ただし、近世の絵図によると17世紀前葉から19世紀中葉にかけて武家屋敷地として利用されたことが明らかで、滋賀県立大学中井均氏の御指導によると、屋敷地における各種施設の基本的な配置は大きく変わらないという。

第2節 遺構

第1調査面では近代の溝状遺構・土坑・柱穴、第2調査面では中世から近代にかけての溝状遺構・土坑・柱穴・柵を確認した。ここでは、検出した遺構について大きく3時期に区分し、土地利用の変遷を検討する(図43)。

中世

幅が4m前後のSD6・13・14と、幅が約1~2mのSD9を確認した。これらの時期は中世後期で、規模に違いがあるものの長軸方位はほぼ同じ(N-4°-EからN-6°-E)である。発掘区周辺は、奈良時代から室町時代にかけて東大寺大井荘が存在し、その範囲¹⁾は近世大垣城下町を包括するほどの広さであったとされている。大垣市の調査によると²⁾発掘区周辺は3条1里と3条2里の里境付近に位置し、その境の長軸方位(N-5°-E)とSD6・9・13・14の長軸方位が一致することから、これらの溝状遺構は条里地割を意識して掘られた可能性がある。SD9からSD13までの区間では、近世以前の柱穴を複数確認したが、発掘区の制約もあり建物跡の存在は確認できなかった。しかし、狭小区(発掘区東端)では古瀬戸後IV期から大窯第2段階頃を主体とする時期の土坑が残存することを確認した。狭小区において近世以降の積極的な土地利用がなかったために中世後期の土坑を多数確認できたと解釈すると、中世の遺構の多くはSD2などの近世・近代の遺構によって失われ、その中には中世墓を含んでいた(第5章第1節参照)可能性がある。



図43 各時期の主な遺構位置図

近世

大垣城周辺を描いた近世絵図は多数ある³⁾が、発掘区は武家屋敷地内に所在する(図44)。「大垣御城下図」や「大垣城郭図」、また図示していないが「大垣城古絵図」⁴⁾(慶応3年)でも南北方向の背割りがあり、近世を通じてほぼ同じ位置に図示されている。この背割りは発掘区西端のSD6に相当する可能性もあるが、SD6は遺構の切り合い関係や出土遺物等から中世後期に位置付けた。そのため、絵図で示された背割りは発掘区外に所在する可能性がある。発掘区内では当該期の溝状遺構や土坑をわずかに確認するに留まり、建物跡や近世遺物を多数出土する遺構は確認できなかった。今後の周辺の調査が進み、屋敷地内の全容が明らかになることを期待する。

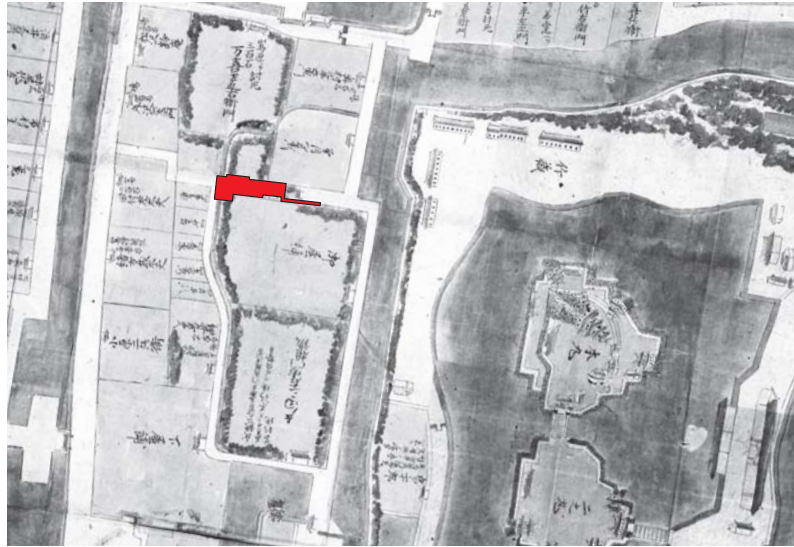
近代

今回の調査では、第1及び第2調査面ともに近代の遺構を確認した。「大垣城郭図」(図44)では発掘区を含む広範な屋敷地が広がるが、「大垣城古絵図」(慶応3年)では、発掘区付近で屋敷地を東西方向に区画する地割が描かれている。第2調査面のSD7やSA1は、出土遺物等から当該期の遺構と判断したが、「大垣城古絵図」で示された地割が踏襲されている可能性がある。また、SD7やSA1の北側で確認したSK10・27等は明治時代前期に戸田家別邸⁵⁾の南端に掘られた廃棄土坑と考えられる。第1調査面のSD2は戦前まで浚渫されていた可能性はあるものの、底面の形状や土層堆積状況から溝を再掘削した痕跡は認められなかったこと、図44の明治24年地形図で神宮奉斎会大垣本部⁶⁾の北東側に東西方向の地割が示されていること、SD2の北面のみ護岸施設が設置されていたことなどを勘案し、第1調査面の遺構について次のとおり整理しておきたい。

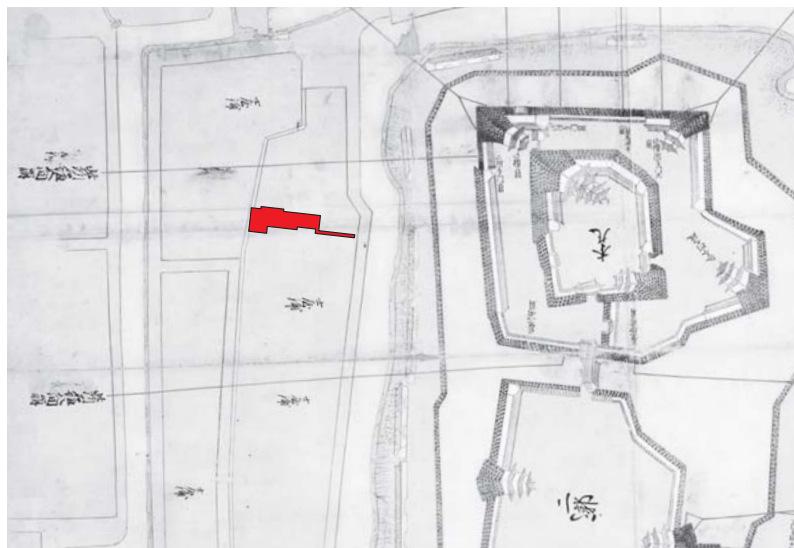
- ・SD2は明治15年に神宮奉斎会大垣本部の設置に伴い掘削され、戸田家別邸側のみ護岸施設を設置した可能性がある。
- ・SD2の埋没中に掘削されたSD3やSK25は、神宮奉斎会大垣本部に伴う遺構の可能性が高い。

注

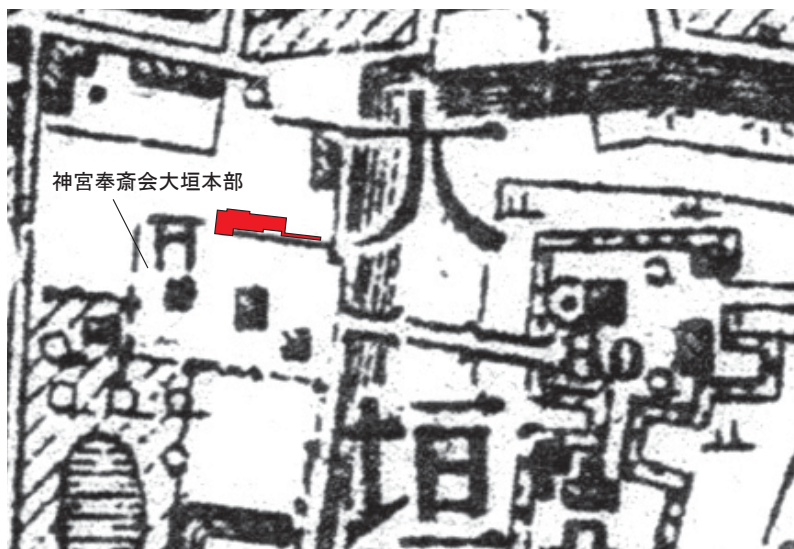
- 1) 大垣市2011『大垣市史考古編』
- 2) 大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』
- 3) 2)と同じ
- 4) 個人蔵
- 5) 戸田家別邸の位置を示す明確な資料は確認できていない。また、起源については明らかでない。しかし、地元の古老の話によると、昭和初期には発掘区の北側には旧藩主が居住した戸田家別邸があり、その南側には神宮奉斎会大垣本部があったという。
- 6) 「この大垣地区にあった神宮教第十七教区本部は大垣郭町にあり、明治十四年には敬神者を代表して伊勢神宮奉拝の祭儀を行うところとして神殿を作り、同十五年には伊勢神宮の御分霊を祀り、神宮奉斎会大垣本部といい、俗に大神宮と称した。」(大垣市1968『新修大垣市史 通史編2』)



大垣御城下図 寛永 14 ~ 19 年頃 (大垣市立図書館)



大垣城郭図 正徳 5 年 (大垣市立図書館)



明治 24 年地形図

図44 調査位置図

引用・参考文献

- 井川祥子2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』、高志書院
- 伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』、海青社
- 江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』、柏書房株式会社
- 小野木学1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号、美濃の考古学刊行会
- 大垣市1968『新修大垣市史 通史編2』
- 大垣市2011『大垣市史考古編』
- 大垣市教育委員会1994『新版大垣市遺跡地図』
- 大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編—』
- 大垣市教育委員会2000『大垣城跡Ⅰ—太鼓門跡付近発掘調査報告書—』
- 大垣市教育委員会2001『大垣市埋蔵文化財調査概要平成12年度』
- 大垣市教育委員会2015『大垣城跡・城下町—大垣市立興文小学校屋内運動場建て替え工事に伴う発掘調査報告—』
- 金子健一1996「ホウロクの種類」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 岐阜県文化財保護センター2012『荒尾南遺跡A地区Ⅰ』
- 岐阜市教育委員会・(財)岐阜市教育文化振興事業団2003『史跡加納城跡』
- 北野信彦2005『漆器の考古学 出土漆器からみた近世という社会』あるむ
- 北村和宏1996「尾張の「伊勢型鍋」「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』、九州近世陶磁学会
- 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2011『財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター研究紀要』第17輯
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『梅原梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告—東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—』
- 鈴木正貴1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 鈴木正貴2001「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器—時期別組成の分析を中心に—」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号、愛知県埋蔵文化財センター
- 戸田氏共公顕彰事業実行委員会1988『戸田氏共公』
- 永井宏幸1996「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム）、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

中野晴久2012「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』、愛知県史編さん委員会

平井信二1996『木の大本科』、朝倉書店

福田 敏一2008「鉄道の考古学」『考古学という可能性—足場としての近現代—』、雄山閣

藤澤良祐2007「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』、愛知県史編さん委員会

横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』



発掘区西半 第1調査面近景(西から)



SD2 土層断面(C-C')(西から)



SD2 石積検出状況(南から)



SD2 石積検出状況(南から)

図版2 第1調査面の遺構(2)



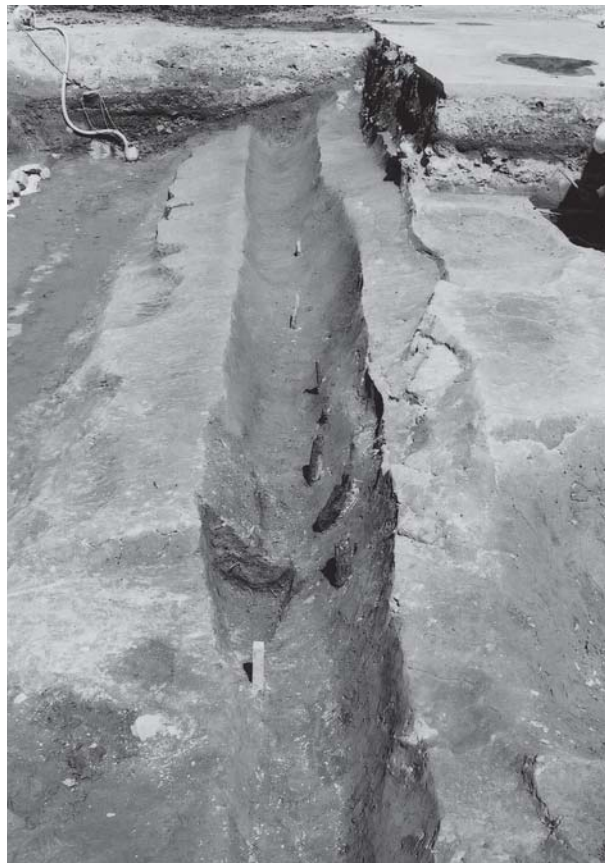
SD 2 石積検出状況(南西から)



SD 2 洞木・留杭・枕木出土状況(南西から)



SD 2 留杭断ち割り状況(A-A')



SD 3 杭列出土状況(西から)



SK 4 遺物出土状況（東から）



SK 4 遺物出土状況（東から）



SK 25 遺物出土状況（西から）



SD 6 完掘状況（南から）



SD 7 完掘状況（西から）



SD 7 遺物出土状況（西から）



SD 8 完掘状況（南から）

図版4 第2調査面の遺構(1)



SD9 完掘状況(南から)



SD9 完掘状況(西から)



SK1 遺物出土状況(東から)



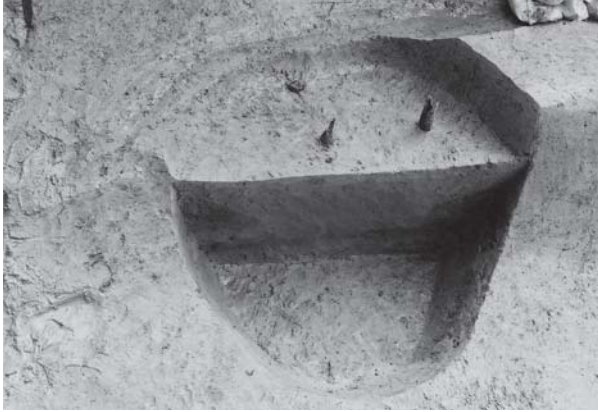
SK27 遺物出土状況(東から)



SK84 遺物出土状況(南から)



発掘区東端 第2調査面近景(西から)



SK78 土層断面(北から)



SP21 遺物出土状況(北から)



SD13 完掘状況(北から)

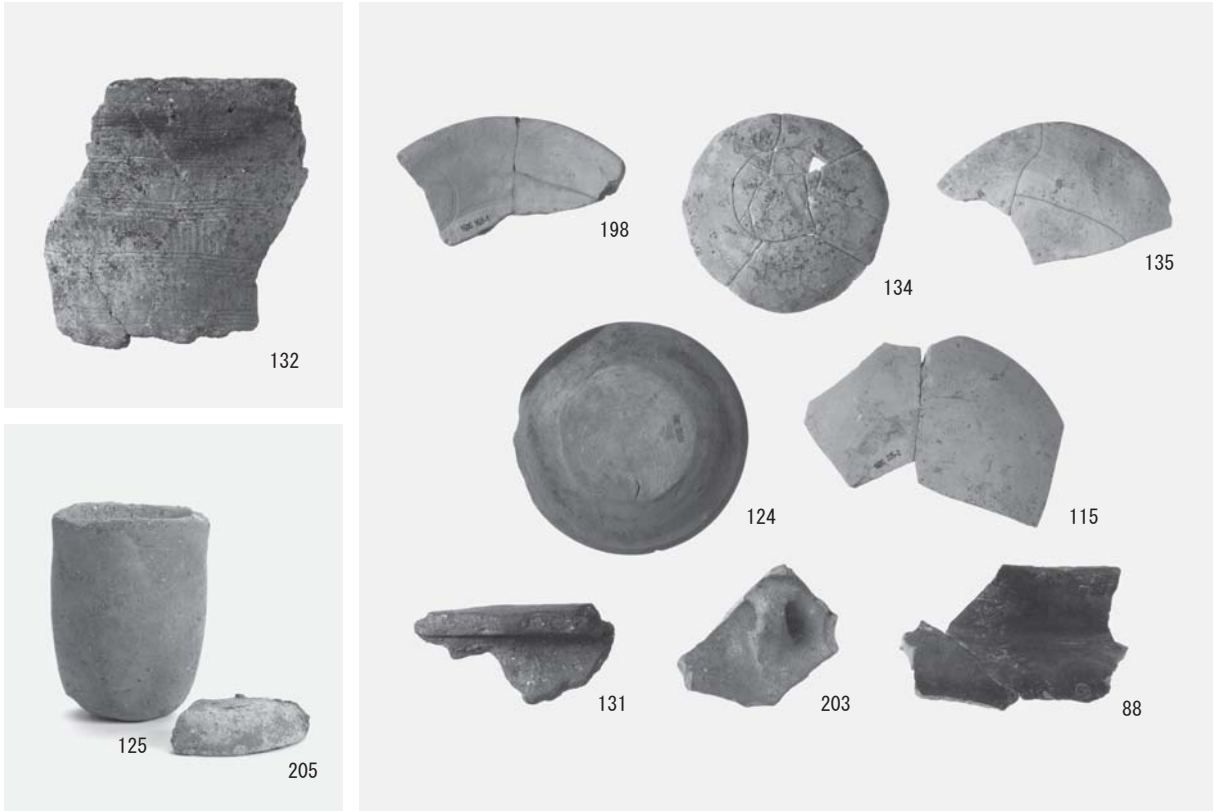


SD14 土層断面(北から)

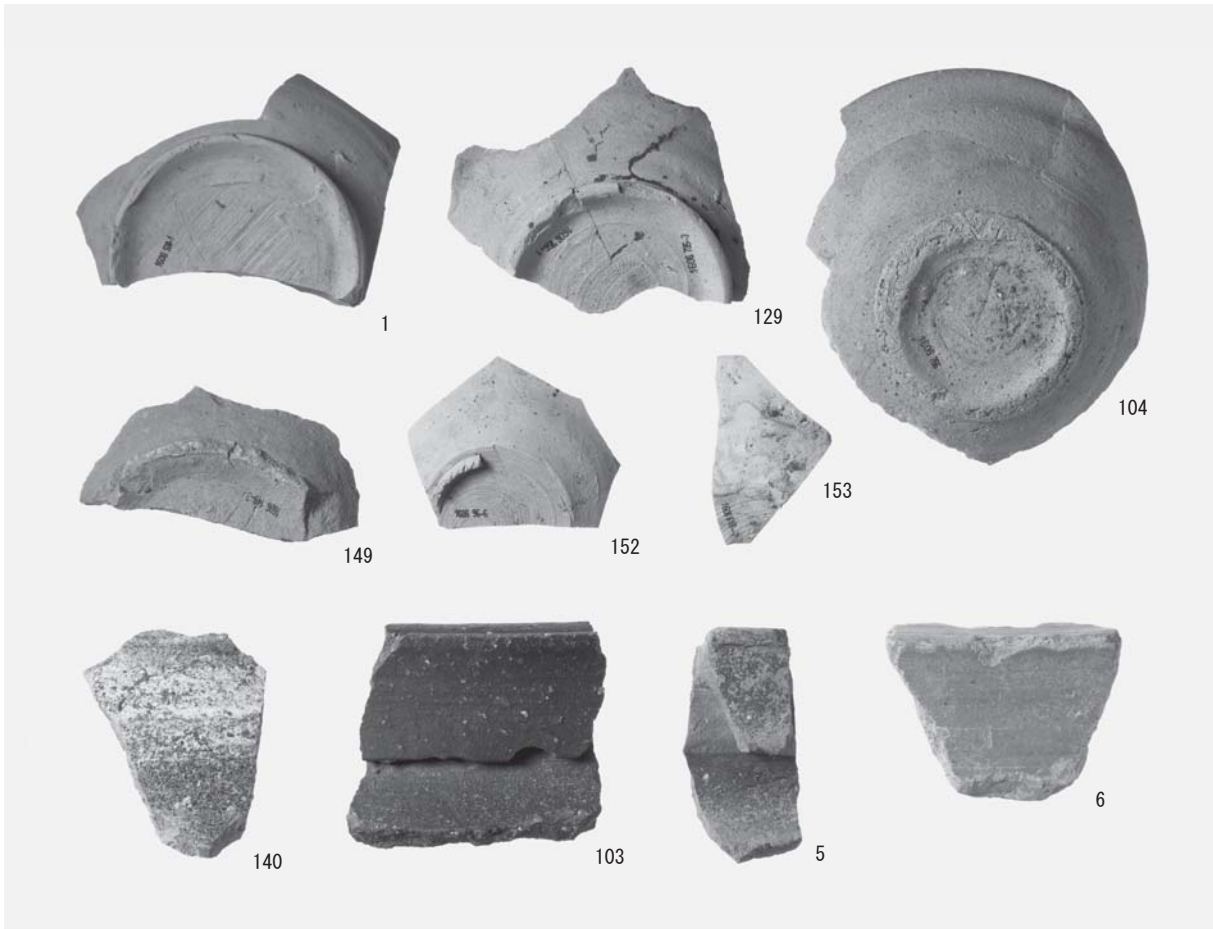


発掘区東半 第2調査面近景(北東から)

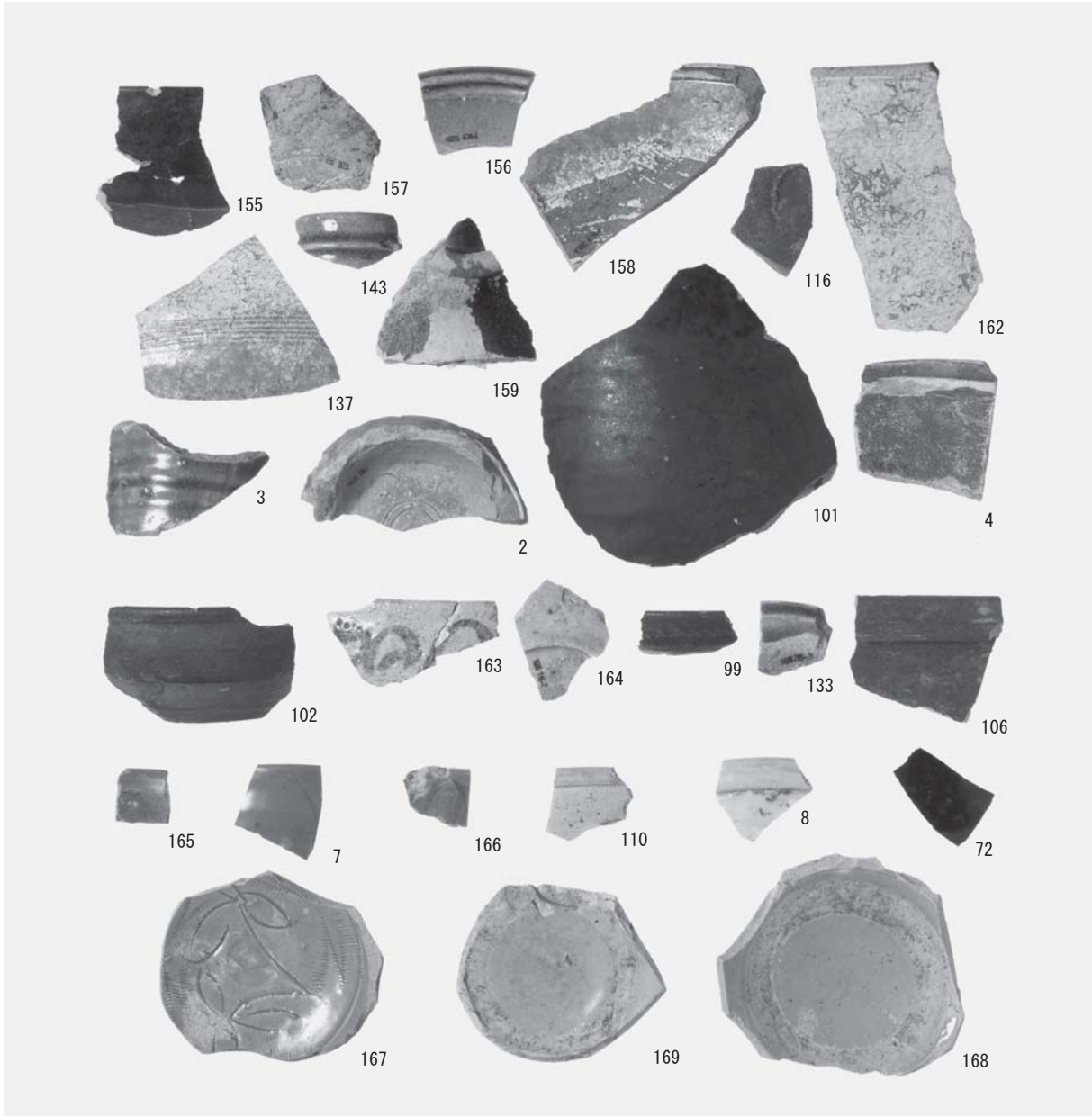
図版6 土器類(1)



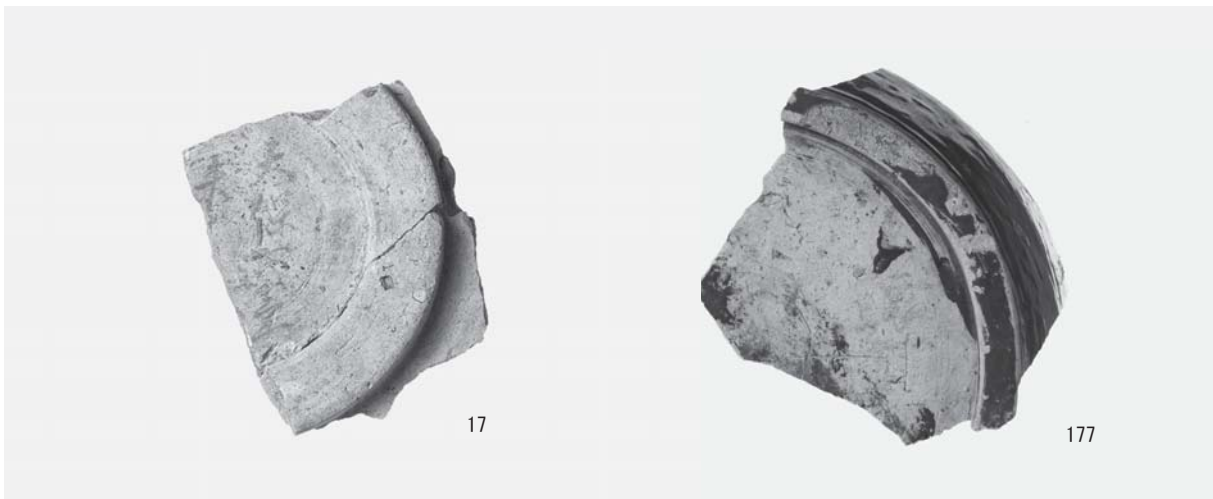
土器・土師器



山茶碗・常滑産陶器



古瀬戸・大窯・中国産陶磁器



文字資料

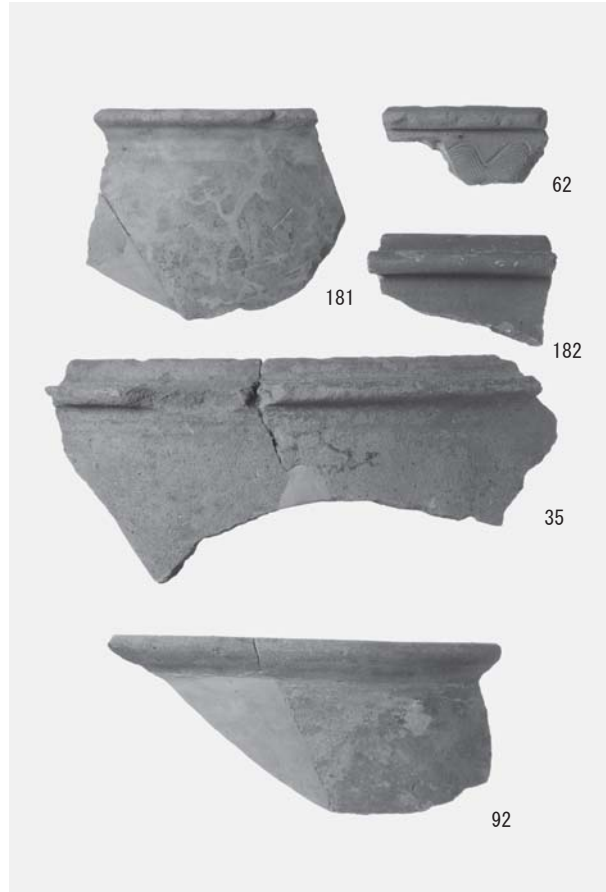
図版8 土器類(3)



瀬戸・美濃産陶磁器



肥前産等陶磁器



常滑産陶器



SD2 出土漆器



土製品・石器



瓦

報告書抄録

ふりがな	おおがきじょうあと・じょうかまち							
書名	大垣城跡・城下町							
副書名								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第140集							
編著者名	加中雅章 三輪晃三							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550 FAX058-237-8551							
発行年月日	2018年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
おおがきじょうあと じょうかまち 大垣城跡・城下町	ぎふけん おおがきし まるのうち 丸の内 いちちょうめ 一丁目	21202	02595	35°36'22"	136°61'42"	20160506 ～ 20161012	317.8	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大垣城跡・城下町	城館跡	中世 近世	溝状遺構15 土坑102 柱穴30 柵1	弥生土器、須恵器、灰 釉陶器、土師器、山茶 碗類、片口鉢、古瀬戸、 大窯、中国産陶磁器、 常滑産陶器、近世陶磁 器、近代陶磁器、瓦、 土製品、石器、木製品、 金属製品、銭貨		中世の条里地割 の方位と同じ向 きである溝状遺 構や石積を伴う 近代の溝状遺構 を確認した。		
要約	<p>大垣城跡・城下町は、木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）により形成された濃尾平野の北西部に立地する中世から近世にかけての城館跡である。今回の発掘区は、大垣城天守閣から約200m西に位置し、近世の絵図によれば戸田氏の家老屋敷地内に当たる。中世においては、少量ではあるが古瀬戸前期の壺・瓶類が出土しており、発掘区周辺に中世墓が存在していた可能性がある。また、長軸方位が条里地割の方位とほぼ同じ向きである溝状遺構を複数検出した。発掘区の東端では、中世後期の遺構を複数確認するとともに中世の土師器皿が多く出土した。近世においては、出土した播鉢が登窯全時期にわたってみられることから近世を通じて土地利用されていた。近代においては、明治時代の戸田家別邸に関わると思われる遺構、漆器・箸などが出土した廃棄土坑を確認した。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第140集

大垣城跡・城下町

2018年2月28日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 新日本法規出版株式会社